
大日本同盟

一般読者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大日本同盟

【Nコード】

N1577M

【作者名】

一般読者

【あらすじ】

日清日露戦争が起らなかった日本、紺碧の艦隊の世界の日本、ウォーシップガンナー2の世界でウィルキア帝国を独力にて押し返しその技術力を吸収した日本。

文章だと一、二行分しか違わないこの日本が世界をどう変えていくのか

「第二次世界大戦は三極構造となり戦線は膠着状態になった。欧州帝国となったドイツ第三帝国はヒトラーが暗殺されたため次第にその影響力を失い、アメリカ合衆国も国民の嫌戦感情が高まり講和の

機会を窺っていた、だが大日本同盟は違った、その特殊な国家形態からか戦費の捻出にさほど苦労しなかった、ということも関係するだろうが何よりもその技術力が決め手であったのだろう」とある近代史研究家のレポート冒頭部分より。

第一部 大日本同盟結成！

(2011, 11, 21, 19; 25改訂)

(前巻

この小説はわたくしの偏見において作成されております。

閲覧中に気分が悪くなりましたらすぐに電源ボタンを押すか、閲覧を停止してください。なお誹謗中傷は感想フォームまで・・・受け付けておりません。

それでも良ければどうぞ下へ。

第一部 大日本同盟結成！

(2011, 11, 21, 19; 25改訂)

「第二次世界大戦は三極構造になり戦線は膠着状態になり欧州となったドイツ第三帝国はヒトラーが暗殺されたため次第にその影響力を失い、アメリカ合衆国も国民の嫌戦感情が高まり講和の機会を窺っていた、だが大日本同盟は違った、その特殊な国家形態からか戦費の捻出にさほど苦労しなかった、ということも関係するだろうが何よりもその技術力が決め手であったのだろう」とある近代史研究家のレポートより。

日清日露戦争が起らなかった日本、紺碧の艦隊の世界の日本、ウォーシップガンナー2の世界でウィルキア帝国を独力にて押し返しその技術力を吸収した日本。

この3つの日本が何らかの要因によって3つの島に転移させられたのちに利害の一致や安全保障上の面で意見が一致し大日本同盟を結成した。

政府、軍、経済などを一つに統合し技術の差などを埋めながら周辺海域を搜索したが陸地はあったが文明はおろか人すらいない事が判明し資源などを求め開拓していった。

その後も周辺の調査は続けられたがどうやらその世界は自分たち以外に文明といえるもの（というよりも人類）が存在していなかったのである。そうした中、彼らは自分たちがなぜこの世界にやってきたのかを調査しだした、だがいくつも仮説は立てられるものの結局

直接的な原因は分からなかった。

しかし陸地の状態や海底火山などから転移先で起こる転移の前触れを知ることができた。その結果頻繁に震度2から5程度の地震が短期間に何回も発生していたことが分かった。

だがそれだけであつた。月日は経ち転移から百年が経とうとしていた、とある学者から「異次元間移動について」と論文が発表された、それによると高エネルギーを秘めた隕石を使用することで異次元へと行くことができるらしいのだ。

彼らは一種の賭けに出た。なぜならその”星”ではウランやプルトニウムなどの核物質が入手にくく、石油や石炭といった化石燃料も手に入りにくかつたからだ。

幸いその高エネルギーを秘めた隕石はかなりの量が入った（異次元移動数回分であつた）そして彼らは国内や輸送船などにその”星”で採れた持てる限りの資源と急ピッチで作り上げた艦艇、航空機、車両を持って異次元へと飛んだ。

第一部 大日本同盟結成！

(2011, 11, 21, 19; 25改訂)

(後書

実はこの作品が処女作なんです、ね、なのでアドバイス等をよろしく
お願いします。

次回「大同盟来る」

第二部 大日本同盟来る (2011, 11, 21, 19:27改訂)

「【私は生きている】あの時そう私は思った。」 二代目 大日本
同盟首相の手記より

西暦2015年 太平洋上

その世界で最初に彼らが接触したのは当然のごとく日本であった（
が決定的に歩んできた歴史が異なっていた）がここで1つの問題が
発生した、彼らの存在が世間に広まるのが早かったのである。しか
し、それから2年もの間どの国も動かなかった、いや動けなかった
のである。

なぜなら世界は彼らに対しての情報を何持っていなかったからだ。
各国が情報収集に血眼になっている今を時の日本国総理大臣は好機
と捉え、大日本同盟側と協議の結果日米同盟を完全に破棄し大日本
同盟のもと（世間には隠していた）10カ年計画に基づいて再軍備
を始めた。

当然のごとく周辺各国（特定のアジアなど）からは非難の嵐だった
がそれに対して背後には強大な軍事力や豊富過ぎる地下資源を持つ
大日本同盟（以降大同盟）が付いているから強気に「内政干渉だ」
と非難し返した。だがこれで面白くないのは米国である。彼らは今

まで日本に国債などを買わせていたが同盟解消とともにすべて売り払われ、更に再軍備となると極東アジアでの軍事バランスが崩れ自国の存在意義も無くなってしまうからだ。

そして彼らはついに動き出した、結論から言うと国連の安全保障会議での日本たたきであるが、それに対する日本の回答は他国にとって最悪なものであった。

その時の議長であった人物は「悪夢の到来を感じたよ、世界恐慌並みの絶望を感じた」こう語っている。その内容は、至極簡単にして致命的なもの（無論アメリカにとって）であった。

国連安全保障会議

日本代表

「あなた方の言いたいことは十分にわかりました、ですがあなた方の注文に対する我が国の答えはとても簡単なものです。現時点を持ってわが日本国は大同盟と同盟を結び第4の日本国となります、そして現時点で他国にて働いているすべての日本人に対して強制帰国命令を多国籍企業には全工場と支社の全面撤退を命じ、日本国内にいる留学生や不法滞在者、旅行者には1週間以内に国外退去を命じます、もし帰国を妨げたりした場合は武力にて解決することになりますので」

これこそが日本切り札であった、これは日本に友好、非友好問わず衝撃を与えた、いや与えすぎだったのであろう現実が見えていない者もいた、それは言わずもがなアメリカ代表であった。

米代表

「はっはっは君そんなことしていいのかい？」

その言葉に全員が凍りついた、いや全員ではないだろうが皆はこう考えた筈だ。こいつ気が狂ったのか？と、なぜなら今回の件で一番ダメージを受けるのがアメリカで一番ダメージを受けたのもアメリカだったからだし、変なことを言って日本のへそを曲げられなくとも国家存亡の危機になりかねないほど受けた傷は相当深かったからだ。

日

「と、言いますと？」

国々の代表が顔を青くしている。

米

「そんなことをしたら君たちの方が大変なことになるだろうに」

その言葉に全員が、やっぱりこいつ頭がおかしくなったと思った、知らされていない筈がないからだ、日本のバックにいる大同盟がどんな国なのかを、そして自分たちがどんな損害と損益を受けるのかを。

その時、ようやく自分を取り戻せた議長が少し休憩を取ろうと提案した、無論誰も異論を述べない。当たり前だ、なぜなら早急に自国へ連絡を取り指示を仰がなくてはならないからだ。それをしなかったのは議長と日本代表そして状況が理解できない、というよりしたくない一心で気を失ったアメリカ代表であった、しかし数分後の会議場には椅子が一つ余っていた。

そして最後の椅子が埋まり会議が再開されたが一向に進展せずそのまま解散となった。

ちなみにアメリカ代表の代わりに大統領が急遽呼ばれた。

第二部 大日本同盟来る

(2011, 11, 21, 19:27改訂)

(後書き

大統領初登場！(笑)

第二話投稿！にしても短い・・・もっと長いのが書きたいです。

次回「日本の切り札と罠」

〈番外編〉 設定資料（前書き）

前回名前だけでできた『同盟条項』です。

（番外編） 設定資料

第一章 皇室及び天皇

第一項 皇室の複数存在を許可する。

第二項 天皇の複数存在を許可する。

第三項 権限は各天皇の最年長者またはそれに任命されたものに限定する。

第四項 権限を世襲することを禁ず。

第五項 すべての皇室を正統なものとする。

第二章 同盟参加国の義務

第一項 同盟参加国には軍事協力条約と経済協力条約が強制的に適応される。

第二項 1 軍事協力条約は攻防問わず適応される。

2 攻勢については同盟軍統合司令部の決定に従って作戦行動を行う

第三章 貨幣

第一項 通貨は共通のものとする。

第二項 1 通貨は円とし最低貨幣は1円とする。

2 1円は1アメリカドルと同等の価値を持つものとする。

第四章 憲法及び条約

第一項 憲法は共通のものとする。

第二項 批准条約については統一する。

第五章 内閣及び国会

第一項 内閣及び国会は共通のものとする。

第二項

1

既存の内閣は解散し統合内閣に統合する。

2

既存の国会は一地方の最高議会とし影響力はその地

方のみとする。

〈番外編〉 設定資料（後書き）

さて、アメリカはどう動くでしょうかね、周辺国の動きも気になります。

??? 「さて、そろそろ私の出番かね」

・・・なんであんたがここにいる？

??? 「まあそう怖い顔をするな、ところで私は名前しか出ていないようだが？」

お前もか・・・

??? 「お前だと?! 私はg「その先はいかん」何をする・・・ここに灸をすえねばならんのだぞ」

??? 「ネタバレは駄目だろう（それに下手したら存在を消されるだろうな）」

おい、今何を考えた

??? 「下品だな」

違うわ！

まったく、いったいどこから入ってきたんだ。まあ次からは（あいつらも）忙しくなるだろうからここには来ないだろう・・・

次回「日本の切り札と罠 前篇」

第三部 日本の切り札と罠 (2011, 11, 21, 19..29改訂) (前編)

今回は長くなります。そしてあの人達が・・・

第三部 日本の切り札と罠 (2011, 11, 21, 19:29改訂)

「安全保障会議での日本代表の発言は、徐々に向上していた世界経済に重大な衝撃を与え、止めをさした」時のアメリカ合衆国大統領は自身の伝記にこう残している。

米国 ホワイトハウス

大統領

『昨夜の日本代表の言葉未だ世間には流れていないがもし流れたら大変なことになる。

かといって流さなくても日本人の帰国は止まらない・・・そしてすぐに合衆国民にばれる、武力でならばいけるが、それでは来期の大統領選で落選するだろう、ならばどうすれば・・・』アメリカ大統領はまさしく頭を抱えていた。

一方日本では

大同盟総理官邸

官房長官

「総理本当によかったのでしょうか・・・」

総理

「官房長官、計画はすでに第2段階が完了している、今変更はで

きまい」

官房長官

「そうですね」

総理

「それではそろそろ第3段階への移行準備を、それと記者団は来ているな？」

官房長官

「もちろんです、総理からの大事な発表があると謳えばいくらでも食いついてきますよ」

総理

「うむ、そうだなではそろそろ行こうか」

官房長官

「ええ」

記者会見場

記者A

「昨夜の会議で何があったのですか」

総理

「今進めている再軍備と徴兵制度復活について文句を言われましてな、だから海外にいる全日本人の引き上げと在日外国人の国外退去命令を多国籍企業には即時撤退を命じました。」

記者B

「総理！それはいったいどういう考えのものと行動ですか?!」

総理

「すみませんが今日答えられるのはこれだけです」

記者会見は騒動のうちに終了した。

翌朝

ホワイトハウス

「大統領！大変です」

大統領

「何だね、奥さんが急死でもしたのか？」

「いえ、それはそれで大変なのですが・・・これを見てください」

大統領

「今日の朝刊？これのどこが・・・何！」

『全日本人に帰国命令！日系企業が総撤退！昨夜の会議で何が?!』

大統領

「どういうことだ、どこから漏れた！」

「日本の首相が昨夜記者会見を開き安全保障会議であったことを発

表したのです」

大統領

「何ということ・・・」

「早く閣僚を集め会議を開きましょう、事は急を要します」

大統領

「そうだな、急がなくては」

このような驚愕と焦りは世界各国で見られた。

大同盟総理官邸

「総理、他国は想定道理の動きをしています」

総理

「そうか、在外日本人たちの帰国状況は？」

「あと3日はかかると」

総理

「そうか（あと3日か・・・さて世界はどう動く？）」

この日世界経済は日本企業の株価の暴落によって取引が全面ストップするところまで来ていた、この状況で誰も日本企業の株を買わないと思っていたがある時を境に急に上昇し始めた。これこそ日本の

計画であつた。

事は2年前にさかのぼる・・・

「始めまして、首相の片山有朋です」

「日本国首相、衛藤克彦ですよろしく」

彼らの会談は秘密裏に行われた。

片山は大同盟の現状について説明しこの世界の日本に協力してほしい有無を伝えた。

衛藤は最初大同盟について評価しかねていたが話を聞いてゆくにつれて『あちらだけでなくこちら側にも莫大な利益がある』と確信し始めていた。

密談は数時間続き一応の結果を見せた、だがここで話し合われた事が世界を混乱へと導くことになる。

時は戻って

総理

「（予想道理か・・・ならばこのまま計画道理に）さてと、浦部君か？ああ、そうだ。そろそろ株価が暴落し取引がストップするだろう、日系企業の株の買い占めを開始してくれ」

浦部財務大臣

「分かりました」

総理

「さて、あとは時が来るのを待つだけだ」

コンコン

???

「総理、楠田です」

総理

「入りなさい。国防大臣の君が来たということは・・・」

楠田国防大臣

「はい、陸海空3軍とも即応体制が整いました」

総理

「そうか、これでいつでも動けるな」

楠田

「ええ、そうですね。後、例の新型戦闘機ですが量産体制に入りましたが全面配備には最低でも2ヵ月はかかります」

総理

「今の配備状況は？」

楠田

「即応集団にはすでに配備されていますが、他はまだまったく」

総理

「八八八八艦隊計画はどうか」

楠田

「そちらは、大半が艤装を完了し、訓練に入っております、すべて終わるにはあと1カ月ほどかかります」

総理

「1ヶ月か、もう少し早めることはできんのか？」

楠田

「いえ訓練を含めて1カ月なので乗組員は同型艦から流用すればもう少し早くなります」

総理

「ならば、そうしてくれ、一刻も早く戦力にしたいのでな」

楠田「分かりました」

ここで『八八八八艦隊計画』について説明しよう。この艦隊計画は

『日本武尊』～『やまとたける』～『級戦艦4隻

50口径50・8cm 65口径15cm砲 35mmC

IWS 巡航ミサイル

ハープーン シースパロー

『ヴォルケンクラッツァー』級戦艦4隻

60口径56cm砲 荷電粒子砲 60口径46cm砲

152mm速射砲

35mmCIWS 波動砲

『信長』級航空母艦4隻

15cm65口径 単装高角砲 12cm65口径 連装高角砲

35mmCIWS 艦載機 30機

『ムスベルヘイム』級航空母艦4隻

60口径30.5cm砲 35mmCIWS 40mmバ

ルカン砲

艦載機 40機

『やまと』級イージス艦8隻

45口径46.0cm 152mm速射砲 アスロツク

ハーブーン

シースパロー

『一亀天』『きってん』『級潜水艦8隻

防秘

計32隻からなる大艦隊である

すべての艦艇は核融合炉を使用している。

この艦隊の建造は大同盟各地のドックにて行われこの世界の日本に
配備される予定であった。

総理

（八八八八艦隊の完成も近いがほかの国がいったいどう動くのか・
・）

トゥルウウ トゥルウウ

総理

「私だ」

浦部財務大臣

「総理、日系企業の株の買い占めに成功しました」

総理

「そうか、これではかの国がどう出るかだな」

浦部

「はい、やはり何らかの動きがあるでしょう」

総理

「だがもはや止まることはできないからな」

浦部

「分かりました」

総理

「さてと・・・官房長官か？ 私だ、閣僚会議を開く。皆を集めてくれ」

時は少しさかのぼって

白い家

「大統領、やはり日系企業の株価が急落しています」

大統領

「とうとう始まったか・・・世界恐慌の始まりだ」

「どんどん下がっていきます、ん？・・・なっ！ だ、大統領！！」

大統領

「どうした!」

「株価が急に上がっていきます」

大統領

「買っているのはどのどいつだ!」?

「大統領、日本が日系企業の株をどんどん買っていきます」

その後も株の買占めは続き数秒前まで紙くず同然だったものが一瞬にして何百倍にもなった、その時大統領はなぜ日本があの手を公開したのかを瞬時に理解した。

大統領

「そうか、そういうことだったのか!」

「どうしたのですか?!」

大統領

「どうして日本があの手を公開したのかわかったぞ、やつらは意図的に日系企業の株を急落させすべて国のものにしてしまった。そうかこれが狙いだっただのか」

「正攻法で民間企業を国営企業にしてしまふ、だがこんなこととして奴らは戦争でもする気なのでしょうか?」

大統領

「わからん、だが必ず裏があるはずだ。急いで調べさせろ！」

「はっ」

大統領

「（日本は何を考えておる、そうだ奴らはたしかあのとき・・・）
現時点を持ってわが日本国は大同盟と同盟を結び第4の日本国となります】・・・なるほど大同盟か！」「わたしだ、すぐに大同盟について調べ上げろ！ 今すぐに、だ！ いいな！」

日本によって日系企業の株が買い占められてから早1ヶ月が経った。

一か月後

白い家

「大統領、大同盟についてですが2015年に太平洋に突如現れその2年後日本と同盟を結び今に至ります、大同盟領内に侵入を試みましたが国交がないとの理由で追い返されました。

しばらくねばったのですが向こう（大同盟）の海軍が来ましてあきらめるしかありませんでした。あとこれがその時隠し撮りした大同盟海軍の船の写真です」

大統領

「1か月かけて分かったことがこれだけだとは、」

「それにそろそろ国民も限界です」

今の合衆国は日系企業が全面撤退したために大量の失業者であふれ

ていた。

大統領

「大恐慌は防げたがこれでは何も変わっていないではないか！」

「各地で反政府デモが起こり治安は最悪です」

大統領

「なぜ、クビにした日本ではなくて我々を責めるのだ」

「すべてはあの時の会議から始まっていたのじゃないか」

大統領

「今の日本は極東一の強国・・・」

ばん！！

「大統領！！」

大統領

「うるさいぞ！少しは静かにしろ！！」

「日本にて在日朝鮮人が暴動を起こしたようです！」

大統領

「だからなんだ！」

「日本はこれに対して警察ではなく軍を用いて鎮圧しています」

大統領

「なに？」

このとき大統領は直感的に今がチャンスだと思った。

大統領

「今すぐ軍にいつでも動けるように準備させろ」

「は？ 軍に、ですか」

大統領

「そうだ、早くしろ」

「はっ」

大統領

（これであの憎い日本を・・・）

だが彼は知らなかった、これが日本の仕掛けた罠だということに。

第三部 日本の切り札と罠

(2011, 11, 21, 19:29改訂)

(後書

衛藤「やっとな名前が出たか」

大統領「ふん、私なんか”大統領”しか出ていないぞ」

衛藤「それは作者に頼め」

大統領「そうだ作者私にも・・・っていないじゃないか!!」

次回「日本の切り札と罠 2」

ふう、やっとな逝ったか・・・さて総合PV2000突破しました、いやゝありがとうございます。これからがんばっていききたいと思っていますので見捨てないでください。

第四部 日本の切り札と罠2

(2011, 11, 21, 19:32改訂)

(前)

フルボッコタイムの開始です

第四部 日本の切り札と罠2 (2011, 11, 21, 19:32改訂)

「彼らが“あれ”は仕組まれたものだと言ったらどんな顔をするのだろうか、この目で見てみたいものだ」

官房長官の独り言より

総理官邸

総理

「暴動はうまくいっているか」

官房長官

「はい、誰もこれが仕組まれたものだとは気付かないでしょう」

総理

「さて何力国がこれに乗るかな」

米国

記者会見場

「……寄ってわがアメリカ合衆国は本日2017年6月27日に日本へ宣戦布告することを決定しました。今頃日本大使の手元に書類が渡っているでしょう。わが合衆国と日本は翌28日午前零時より交戦状態になります。」

翌朝

ホワイトハウス

「まさかこれを利用して日本に宣戦布告するとは思いませんでした」

大統領

「ふん、これで奴らも終わりだな。朝鮮、中国、が宣戦布告したのは想定内だが、大同盟にまで宣戦布告することになろうとは」

「大統領、わが軍には様々な兵器があります、奴らの鈍足な戦艦や、薄っぺらな装甲の戦車なんて一撃ですよ」

大統領

「そうだな、さて「大統領大変です！」君はいつも大変だな。で、どうしたんだ」

「太平洋艦隊が、壊滅しました」

大統領

「ふざけるな、わが太平洋艦隊がこんなに早く壊滅するはずがない、交戦状態になってまだ6時間だぞ、日本軍と会うこともない！」

「大統領！朝鮮が降伏しました」

大統領

「何！どう「中国との連絡が取れなくなりました」中国までか！」

「だ、大統領一体何がどうなっているんで」

大統領

「私を知るか！ 一体何がどうなっているんだ」

総理官邸地下

幕僚A

「総理、朝鮮が降伏し北京を瓦礫に変えました」

総理

「そうかよくやった」

「海軍司令部からの連絡です、『発 第四艦隊所属 超潜伊300
1 『亀天』 宛海軍司令部 ワレ、米太平洋艦隊ヲ撃破セリ』
以上です」

幕僚B

「おお」

幕僚C

「やりましたな、総理」

総理

「ああ、だがまだ始まったばかりだ ここで気を抜いては作戦に不備が出るかもしれん、各員気を引き締めて事に当たってくれ」

幕僚

「「はっ」」

総理

「私だ、あれの準備は？・・・そうか、発動は指令書道理に・・・ああ・・・そうだ・・・失敗は許されないからな・・・うむ、頼むぞ」

この時一体何があったのだろうか、初めに太平洋艦隊から見てもよう。

宣戦布告の数時間前に太平洋艦隊は大統領命令によってハワイを出港し西へ向かっていた、しかしこの時から第四艦隊所属の超潜伊3001型潜水艦が尾行をしていた。途中補給の関係により尾行していた潜水艦が入れ換わったがアメリカ合衆国が日本に対して宣戦布告したことは、本国との通信で知らされていた為、時間になると同時に攻撃用意に移った。

米太平洋艦隊 旗艦 CIC

長官

「時間ですな」

艦長

「よし、針路そのまま第一種戦闘配置！」

超潜伊3001型潜水艦

艦長

「ふむ、時間か・・・魚雷室、追尾魚雷発射用意、目標CIC指示の方向」

魚雷室

「準備完了！」

艦長

「よし追尾魚雷・・・テッ。再装填急げ」

米太平洋艦隊 旗艦 CIC

「ソナーに感あり！ 後方より潜航物体接近！ 数5！」

どおおおおん

艦長

「どうした！？」

観測手

「魚雷攻撃です」

艦長

「被害状況知らせ！ 対潜警戒を強化しろ！」

「舵損傷！ 操舵できません！！」

艦長

「糞！ どこから来た！？」

観測手

「分かりません」

超潜伊3001型潜水艦

艦長

「針路210ー5深度100」

操舵手

「針路210ー5深度100」

艦長

「魚雷・・・テッ」

米太平洋艦隊

どおおおおん

艦長

「またか！！ 被害状況知らせ！ ヘリは何をやっている！」

「左舷浸水！」

「機関室浸水！」

副長

「艦長！」

艦長

「くっ、ここまでか。総員退艦！」

これが米太平洋艦隊を襲った悲劇の全容である
時同じくして朝鮮、中国にも攻撃が始まった
まず朝鮮から見てみよう。

時は少し遡ることになる

6月26日 呉軍港より『日本武尊』級戦艦2隻、『ヴォルケンク
ラッツァー』級戦艦1隻、『こんごう』級イージス艦2隻、揚陸艇
10隻が出港。

少し遅れ舞鶴軍港より『ムスペルヘイム』級航空母艦2隻、護衛の
ため『やまと』級イージス艦4隻が出港。洋上にて待機していた、
なぜならこの時すでに朝鮮、中国はアメリカとともに日本へ宣戦布
告をしており、これに対して司令部は三国同時攻撃作戦『暁』を決
行した。

三国同時攻撃作戦『暁』とは朝鮮 中国 アメリカに交戦状態に入
ると同時に朝鮮に上陸し政府機能と司令機能を麻痺させた。そし
て、中国には沖縄より超重爆撃機『アルケオブテリクス』2機、『

富嶽』10機が緊急発進、佐世保軍港より出港した『信長』級航空母艦2隻ならびに佐世保配備の護衛艦隊が先行し（大同盟海軍 第六艦隊が後詰めに入った）周囲の制空権、制海権を確保し北京に爆撃を開始、徹底的に攻撃をしてがれきの山にする。アメリカにはハワイを出港した太平洋艦隊を潜水艦による雷撃し横須賀軍港より出撃した第一艦隊が攻撃し壊滅させる。

6月27日 日本海

通信士

「司令部より入電、『ふたよんまるまる暁2400〇』以上です」

艦長

「長官、やっときましたな」

長官

「うむ。僚艦に打電、全機発艦準備」

6月27日 東シナ海

通信士

「司令部より入電、『ふたよんまるまる暁2400〇』以上です」

艦長

「やっときましたな」

長官

「僚艦に打電、最大戦速」

6月27日 沖縄

基地司令

「全機出撃用意」

6月28日 ふたよんまるまる 2400〇 日本海

長官

「時間だな、全機発艦始め」

同じく 東シナ海

『ヴォルケンクラッツァー』級戦艦内CIC

艦長

「波動砲発射用意・・・撃てー」

観測員

「敵艦隊ならびに江華島消滅」

艦長

「いつ見てもぞっとするな」

通信士

「旗艦より入電『各艦独自に射撃を開始せよ』 以上です

艦長

「そうか、主砲準備できているか？」

砲雷長

「全砲塔発射準備完了」

艦長

「出し惜しみはせず、全砲塔旋回」

旗艦『日本武尊』級戦艦内CIC

長官

「噂には聞いていたがここまでとは・・・」

艦長

「彼らの世界では樺太を二つに分けたそうですよ」

長官

「恐ろしいものだ。さて、こちらでも負けてはいられないぞ、砲塔旋回 目標地上敵軍施設 撃ち方始め」

同じく 東シナ海

旗艦『信長』級航空母艦内CIC

長官

「向こうもはじめたな。よし全機発艦」

艦長

「発艦急げー！」

攻撃開始より一時間後 沖縄

基地司令

「よし、全爆撃機発進」

管制官

「後は無事帰ってくるのを待つだけです」

基地司令

「ああ、対空警戒を強化しろ」

三時間後 作戦司令部

「司令、朝鮮に上陸した陸軍は敵総司令部を占拠し特殊部隊が大統領官邸に侵入大統領を確保し降伏勧告をしました。中国は上陸支援艦隊が合流し艦砲にて攻撃をしています。」

さらに二時間後 大同盟総理官邸

「総理、朝鮮の軍事施設のすべてを破壊もしくは占拠しました」

総理

「そうか、これで朝鮮は片付いた。後は中国だが状況はどうなっている」

「弾道ミサイルの発射基地および共産党本部をつぶしたのでしばらくは大丈夫と思いますが、念のため海軍と空軍に即応態勢をとらせています」

総理

「ふむ、ならばしばらくは大丈夫だろう」

時は戻って少し進む

ホワイトハウス

「大統領！今すぐ避難を」

大統領

「どうということだ!？」

「今レーダーが高速で飛翔する物体を発見、あと五分で西海岸に到達します」

大統領

「迎撃はできんのか」

「超超高度を飛んでいるためまったく届かず、さらに混乱のため展開も遅れています」

大統領

「どこに向かっている」

「おそらくは此処でしょう、空襲警報は全土に出してあります、早く避難を」

大統領

「分かった」

ホワイトハウス 地下

大統領

「そろそろ時間だな、だがいつの間に日本は弾道ミサイルを造ったんだ？」

「たぶんH2Aロケットを改造したのでしょう」

大統領

「そうか弾頭が核でないことを祈ろう」（核？なにそれおいry）

【どおおおおん】

大統領

「とうとう来たか」

「おかしいです、まだ到着時刻ではないはずですよ」

大統領

「それではさっきの爆発は一体何だったんだ……」

「分かります「教えてやろうか？」誰だ！」

????

「日本、と言えは理解できるかな？」

「なぜここに日本軍がいる?!」

隊長

「玄関から入ったからな、まあ少し手荒に入ったからな」

「先ほどの爆発はそれか・・・だがここには弾道ミサイルが向かっている」

隊長

「それなら今頃パナマ運河だろう」

大統領

「なに！」

隊長

「さておしゃべりの時間は終わりだ」

大統領

「降伏ならできない相談だ」

隊長

「なら仕方がない、引き揚げるぞ」

隊員

「「「はっ」「」」」

こうして第一次攻撃は終了した

第四部 日本の切り札と罠2

(2011, 11, 21, 19:32改訂)

(後

朝鮮と中国がさっそく脱落しました。ちなみに中国に上陸する予定はありません。

??? 「はて、ここは？」

楠田防衛大臣がなぜここに？

楠田「総理に書類を提出に来たんですが・・・」
なんでだ？

楠田「わかりませんよ」

まあそのうち帰れるだろう

楠田「そうですね」

(もう出番がないなんて言えない・・・)

楠田「何か言いましたか？」

いや何も

次回「米本土上陸、フルボッコはまだまだ続く」

第五部 米本土上陸フルボッコはまだ続く、もとい作戦『曙』発動！（前書き）

（2011，11，21，19…33改訂）

第五部 米本土上陸フルボッコはまだ続く、もとい作戦『曙』発動！

「あの時にああ言わなければ、国民は苦しまずに済んだのだろう」
——「人生最大の失敗」より——

6月29日

総理官邸

楠田

「総理、アメリカは降伏を断ったそうです『それと“あれ”は無事成功しました』」

総理

「そうか」

“あれ”とは太平洋艦隊が壊滅した後密かに発射させた弾道ミサイルである

総理

「そうか、ならばあれをやるしかないか」

楠田

「そうですね」

総理

「ああ、米本土上陸作戦“曙”発動を命じる。それと“彼ら”に伝言を頼みたい」

楠田

「わかりました、してなんと送れば？」

総理

「『同盟の明暗はこの一戦にあり粉骨碎身努力せよ』以上だ」

楠田

「わかりました」

その日の夜

扶桑州（ふそうしゅう） 呉

〔この世界の日本〕

闇夜に乗じて『日本武尊』級戦艦二隻、『信長』級航空母艦二隻、『ムスperlヘイム』級航空母艦二隻、『やまと』『こんごう改』級イージス艦、各十隻が静かに出港した。

だがこのように大艦隊が一度に動いたのはここだけではなかった。

秋津州 武里（たけり）

〔ウォーシップガンナーの世界の日本〕

『リバイアサン』級戦艦三隻、『アラハバキ』級ドリル戦艦三隻、『ハリマ』級戦艦三隻、補給艦十隻、

瑞穂州 八驊駒（やたごま）

〔紺碧の艦隊、旭日の艦隊の世界の日本〕

『日本武尊改』級戦艦二隻、『ヴォルケンクラッツァー』級戦艦二隻、『阿武隈』級巡洋艦十隻、『不知火』級イージス艦十隻、補給艦十隻

大和州 芦張（あしばり）

〔日清日露戦争が起きなかった日本〕

『超大和』級戦艦三隻、『信長』級空母五隻、『ながと』級イージス艦十隻、『家康』級ヘリコプター搭載護衛艦十隻、『秀吉』級工作艦五隻、補給艦十隻

戦艦十八隻、巡洋艦十隻、空母九隻、イージス艦四十隻、ヘリコプター搭載護衛艦十隻

工作艦五隻、補給艦三十隻 総計百二十二隻がその日出港した。

彼らはいったんハワイに集結し補給を完了させたのち沖合にて

戦艦十八、巡洋艦三、空母四、イージス二十

護衛艦五、工作艦二、補給艦一五の第一連合艦隊と

巡洋艦七、空母五、イージス二十、護衛艦五、工作艦三、補給艦一

五の第二連合艦隊に

分かれた。

第一艦隊は南米へ、第二艦隊はハワイを出港した『デュアルクレイター』級強襲揚陸艦十隻、二個護衛艦隊とともに東へと向かった。

7月9日

ホワイトハウス

「大統領！」

大統領

「どうした今度は核でも使われたか？ そうでないのなら静かにしてくれ」

「日本軍が西海岸に上陸しました」

大統領

「なぜ上陸された！ 陸軍はいったい何をやっていたんだ！」

「わかりません、近隣の民間人には避難勧告はもう発令済みです」

大統領

「どこに上陸された？」

「オレゴン、カリフォルニアです」

大統領

「アイダホ、ユタ、アリゾナに防衛線をはれ、そして空軍に爆撃させ進撃を遅らせろ！ くそ太平洋艦隊とパナマを通過中の艦艇がやられたのが痛かった、おかげでパナマは数か月通行不能だ。だがそんな簡単に上陸できるはずがない」

時は数時間戻り

カリフォルニア 米陸軍防衛線付近

隊長

「ここで間違いないか？」

隊員

「はい確かにここが上陸予定地点です」

隊長

「そうか、そろそろ時間だな。各員装備を点検」

彼らはホワイトハウスに侵入した陸軍特殊部隊である、あの後さまざまな手段を使いワシントンD・Cからここカリフォルニアまで上陸支援のため来ていた。ちなみにこの後彼らは本土で休養が与えられる。

隊員

「見えました、味方の攻撃機と揚陸艇です」

隊長

「よし、陣地のあるところを重点的に狙うぞ」

隊員

「」「」「はっ」「」「」

隊長

「まずはあれだな、揚陸艇も接岸しそうだな。よし攻撃開始」

防衛線

「奴らとうとう此処まで来やがった」

「ああそうだな、何としてもここで食い止めるぞ」
「おい来るぞ！」

ざざん！ ばたん！ 揚陸艇の扉が開き日本兵が飛び出してきた。

日本兵

「「「うおおおおおお」」」

更に、二回以上大きいものからは10式戦車が出てきて防衛陣地に砲撃をしている

「戦車までいるのか！」

「ひるむな打ち返せ！」

どーん！

「増援か？」

「いや違う、敵だ！」

「なぜ後ろから敵が来る！」

更に艦載機の増援が来たため防衛線はあっという間に崩壊した。

一か月後

昼夜を問わない爆撃や奇襲、強襲、夜襲により一か月でシカゴにま

で来ていた陸軍だが、ここで進撃を停止して補給路や米陸軍と空軍の基地を修理し防衛拠点としていた。

補給路の構築や陸空軍両基地の修理が完了した夜、暗号文にて司令部に向けて

『旭日は未だか』と発せられた。

第五部 米本土上陸フルボッコはまだ続く、もとい作戦『曙』発動！（後書き）

大統領「……………（涙）」

圧倒的ではないか！我が軍は！

次回米本土攻略作戦『旭日』発動！

第六部 米本土攻略作戦『旭日』発動！

(2011, 11, 21, 19:35)

「ん？ あの暗号文の意味？簡単だよ、海軍旗が旭日旗だからさ」とある元陸軍大将より

第一連合艦隊 旗艦『日本武尊』 艦橋

「陸軍さんも急かしますな」

「しょうがないだろう、久しぶりの出番なんだからな。さて我々も動くか」

「そうですね」

「僚艦に打電『我に続け』これより北上しワシントンD・Cを攻撃する。機関最大！」

数日後 ホワイトハウス

「大統領、偵察機より『日本の艦隊が大西洋に出現、北上している模様』との通報が・・・早く避難を」

「分かった、日本艦隊の目標はやはりここか？」

「そのようです」

「（大同盟との連絡が取れなくなってから一か月以上、そろそろ年貢の納め時…か）」

シカゴ米本土攻前線司令部

「海軍と空軍が動き出したそうだが、空軍は攻撃機などで背後からワシントンD・Cに攻撃するそうだが。今の我々はアラチャ山脈以西のほとんを抑えている。だが今の我々がワシントンD・Cに行くには山脈を越えなければいけない、そこであえて山脈を越えず迂回しようと思う」

「ということはアトランタ、シャーロット、ワシントンD・Cという経路で行くのですな」

「そうだが、たぶん途中で海軍と合流できるかもしれん。その時は艦上機と艦砲の支援を受けながら進撃することになるだろう」

「もし米軍が山脈を越えてきたらどうしますか？」

「その点は問題ない。すでに後方より増援が来ているからな」

「そうですか、それなら安心です」

「ああ、だが海軍がはげしく暴ればそれどころではないかもしれないがな」

それから一時間後 大西洋上

接敵まであと3万

旗艦『日本武尊』C I C

「電探に感あり敵艦隊です」

「対艦戦闘用意！イージス起動、超防御重力場展開！」

「主砲旋回、弾種徹甲弾。目標敵艦隊一番艦！ 距離1万より発砲開始」

「特殊弾頭弾用V L Sハッチ解放！目標敵艦隊中央艦、射程に入り次第発射その後、急速回頭余波を食らうな！」

『アラハバキ』C I C

「対艦戦闘用意、超兵器機関作動！」

「超兵器機関無事作動しました」

「艦首ドリル回転開始、両舷ソー回転開始」

「超防御重力場展開、特殊推進装置作動」

特殊推進装置によって速度が急激に上がる

「くっ やはりなかなか慣れないな」

接敵まであと一万五千

『リバイアサン』C I C

「主砲旋回砲撃用意！弾種特殊徹甲弾装填 敵艦隊側面より砲撃する。取舵10 特殊推進装置作動！」

旗艦『日本武尊』C I C

「敵艦隊ミサイル発射！」

「かまうな、イージスが撃ち落とす」

「敵艦隊距離一万」

「よし、撃ち方始め」

『リバイアサン』C I C

「『日本武尊』発砲開始」

「まだだ、まだ打つな、敵艦隊の側面から砲撃するのだ」

「敵ミサイル全弾迎撃完了」

「敵艦隊側面に到達」

「よし、主砲撃てー」

旗艦『日本武尊』C I C

「特殊弾頭弾の射程に入りました」

「僚艦に打電『我これより特殊弾頭弾を使用する、十分に距離をとれ』以上だ。特殊弾頭弾発射」

「特殊弾頭弾発射！」

「弾着まで30秒、装填完了まであと20秒」

「初弾全弾遠」

「主砲下げ角2 撃てー」

『アラハバキ』C I C

「旗艦より入電『我これより特殊弾頭弾を使用する、十分に距離をとれ』以上です」

「そうか、面舵いっぱい！ 巻き添えになるなよ！」

『リバイアサン』C I C

「初弾 挟くわ 叉また！」

「旗艦より入電『我これより特殊弾頭弾を使用する、十分に距離をとれ』以上です」

「主砲一掃射ののち取舵20」

「全主砲旋回、目標敵艦隊。照準そのまま、撃て」

「取舵20！」

「とーりかーじ」

『アラハバキ』 CIC

「弾着まであと10秒・・・5、4、3、2、弾着今！」

「敵巡洋艦三隻撃沈！」

「旗艦より入電『貴艦はリバイアサンとともに敵残存艦を撃破せよ。我等これより米本土攻撃に移る』以上です」

「取舵いっぱい！ドリルにより敵艦を撃破する」

駆逐艦『キング』艦橋

「なんだあれは・・・」

「一発で離れたところの二隻も食らいやがった」

「それにあんなにでかいのに速すぎるだろう」

『無理だこんなのになにに勝てない』

ここで彼らの意識はここで途絶える、次目を覚ましたら『アラハバキ』の医務室であった。

第六部 米本土攻略作戦『旭日』発動！

(2011, 11, 21, 19:35)

もしかしたら今月いっぱい更新ができなくなるかもしれません。

頑張ってみるつもりですが第二種電気工事士試験の実技試験が終わるまで何とも言えません。

第七部 終戦、そして・・・ (2011, 11, 21, 19:39改訂)

「・・・悪夢、そうだ悪夢だった。あの日大西洋で起こったことは悪夢だと言えない。たかが一発のミサイルで3隻も食われた、これが悪夢でないのならばなんだというのだ」

シカゴ米本土攻略前線司令部

「司令『リバイアサン』『アラハバキ』が大西洋艦隊を撃破。旗艦『日本武尊』以下第一連合艦隊は東海岸沿いに北上しているそうです」

「早速やってくれたな。ちょうどこちらも準備が整ったところだ。さあ、行こうか・・・」

ホワイトハウス

「大統領、大西洋艦隊が壊滅しました」

大統領

「・・・」

「大統領!」

大統領

「・・・大同盟に連絡を、もしかしたら通じるかもしれん」

「・・・・・・・・分りました」

大統領

「今まで勝ってきた代償か・・・かなり高くついたな」

首相官邸

衛藤

「大西洋艦隊壊滅が壊滅した、となるともはや合衆国の盾はなくなつたも同然。そろそろ頃合いだな」

コンコン

???

「失礼します」

衛藤

「宮野君が来たということは」

宮野外務大臣

「はい先ほど扶桑州経由でアメリカから一週間の停戦と講和の打診がありました」

衛藤

「そうか、シカゴの前線司令部と第一連合艦隊に作戦中止命令を、その他の部隊には第一種警戒態勢を」

宮野

「分かりました、中国はどうしますか？」

衛藤

「彼らもそろそろ限界だろう、このあたりで終わらせておこう」

話は数か月前に戻り

6月28日 中国

陸軍

「党本部との連絡はまだつかないのか」

「雑音しか聞こえてきません」

「くっ いったい何があったんだ」

海軍

「北海艦隊旗艦ハルピンだ、至急応援を うわ！ザァー」

「こちら東海艦隊旗艦崇明島、現在日本軍の：ザァー」

「南海艦隊司令部だ、潜水艦による襲撃を受けている、ほとんどの艦艇が沈められた」

空軍

「ミサイル！？」

「いったいどこから」

「くそっ まだついてくるぞ」

沖縄より飛来した『アルケオブテリス』『富嶽』により共産党本部が壊滅、途中迎撃に上がってきたSu30MKKを空母『信長』から発艦した新型戦闘機『天震』が殲滅『アルケオブテリス』『富嶽』は無傷にて沖縄に帰還した。同時に北海艦隊には第七艦隊、東海艦隊には第八艦隊が南海艦隊には第四艦隊の潜水艦隊が攻撃し壊滅させた。

宮野

「まあ、あれだけやればもう回復できないでしょう。ところで講和会議はどこで？」

衛藤

「イギリスあたりでいいだろう」

宮野

「分かりました打診してみます」

衛藤

「頼むよ」

ホワイトハウス

「大統領、講和の件ですが向こうも待っていたようです」

大統領

「そうか、他には何か」

「ええ、会議はイギリスでいいかと。どうしますか」

大統領

「イギリスか・・・仕方がないか、もうここまで来てしまっているのだから」

「そうですね」

数日後 イギリス

日本代表（以降日）

「さて、まずはこの戦争の責任はいつたどこにあるのか、はつきりしましょうか」

アメリカ代表（以降米） ・ 中国代表（以降中）

『来たよ』

米

「それは貴国が暴徒の鎮圧に軍を投入したから・・・」

日

「そんなことこの国でもやっているでしょう」

中

「再軍備をするから・・・」

日

「大同盟に加盟しましたからもう日本ではないので日本国憲法は無効です。それと私の記憶が正しければ宣戦布告はそちらからでした

よねえ？」

米・中

「うっ・・・」

日

「どうしました？」

米・中

「い いえ何でも」

日

「そうですか、それでは賠償金の方ですが1兆ユーロを請求します。それ以外は結構」

中

「い、1兆！？そんな額払えるわけがない」

日

「ならば500億ユーロと希少金属10トンずつで・・・」

数日後

総理官邸・閣議室

衛藤

「諸君目下一番の問題は片付いた。これからどうするかだが、経済産業大臣頼んでおいたものは？」

前橋経済産業大臣

「はい、まずはこちらをご覧ください。これはこの世界での化石燃料の使用率です、有機由来説に基づいて計算すると枯渇までおよそ40年です、無機由来説ならば採掘技術が発達して根気よく掘り続ければ枯渇の危険は回避されるでしょう。石油分解菌の研究が進めば石油の生成が可能になるかと思われます」

飯山国土交通大臣

「ところで、何が言いたいんです？」

衛藤

「つまり、『次の世界にどのタイミングで飛ぶか？』ということだ」

飯山

「確かに、そのことを考えると30年以内に次の世界に飛ばなければ混乱に巻き込まれてしまいますな」

伊藤総務大臣

「そうすると、早くても10年から15年以内、遅くても20年後には次の世界へ飛ぶ、と」

衛藤

「いいや、米・中の混乱が収まるまでに、少なくとも7年後には（次の世界に）飛びたいと思っている」

前橋

「7年ですか」

衛藤

「そうだ混乱が収まってからでは何をされるか分からんからな。ですので7年後を目安に転移計画を練ろうと思う異議・質問があるも

のは拳手願いたい」

伊藤

「総理、扶桑州はどうするのですか」

衛藤

「それについてだが少なくとも数日以内に転移について扶桑州の国民に伝えたいと思う」

伊藤

「それで反対されたら、どうするのです」

衛藤

「それはないだろう、反政府団体は開戦前の暴動の鎮圧と同時に壊滅させたからな」

山本国家公安委員長

「それでは一応警察に警戒態勢を取らせます」

衛藤

「そうしてくれ、さてほかに質問等は？ないなら閉会とする」

二日後

衛藤総理自身によるテレビ・ラジオのすべての局において“転移”について知らされた。そして五日後の州議会において採決を行い賛成多数において他州とともに“転移”することが扶桑州の国民に知らされた。

五日後

扶桑州議會において“転移”に関する採決が行われていた。（州議會議員は各道府県から代表を二人（東京都は三人）選び州議員として議會に参加できる。広聴は申し込みがあれば簡単なボディーチェツクののち中に入れる）95議員中83議員の賛成により他州とともに転移することが決定された。

大・一『真っ白に燃え尽きたぜ』

衛藤「何やってるんだ？」

伊藤「どうやら大統領は負けたことが原因で、作者は実技試験が終わったのはいいが点検をしていない所があったのが原因です」

衛藤「伊藤君、後ろから話しかけないでくれるかな？」

伊藤「すいません、あと作者は部活で小学校に行っていたためかなり疲れているようです」

衛藤「まったくその程度で暗い空気を作るな」

その程度、だと。俺がやったかもしれない失敗はな、それひとつで失格ものなんだよ、ここで落ちたら来年就職先探しながら、卒業研究をやりさらに筆記免除者用の実技試験の練習をしなくちゃいけないだぞ。

この苦労がお前にわかるか。

衛藤「わからん」

おい、こら(怒)

衛藤「だがな、まだ落ちたとは決まっていなから自分を感じて合否通知を待ったらどうなんだ？」

通知が来るの九月なんだぞ、それまであと一か月はあるんだぞ。

伊藤「だから自分を信じて、通知を待ってい居ればいいでしょう」
落ちてたら嫌なんだよ

衛藤「その時はその時だ」

伊藤「(なんという無責任」

：声に出しているぞ

伊藤「えゝ」

衛藤「(さらばだ伊藤)」

き・さ・ま・ら・光、になれーーーーー

大統領「なんで私まで」

悪は滅んだ、これでいいのだ。

戦争は終わり世界には平和が戻った。

そして七年後米・中は混乱から回復し始めていた。

次回『新たなる世界へ』

第八部 新たな世界へ (2011, 11, 21, 19:40改訂)

2015年地震とともに彼らはやってきた。

米・中・朝の参三国を相手に圧倒的勝利を収め。

七年後、彼らは去って行った。

皇紀二七八二年 某日 転移まであと3時間

総理官邸

総理

「さて、ついにこの日がやってきた。今回の転移について確認しておこう。まず、事前調査では西暦一八〇〇年だと思われるが数十年の誤差が出てしまうだろう」

国防大臣

「海軍と空軍には転移開始の三時間前から緊急出動し警備に当てらせていますので戦時中に転移しても大丈夫なようにしています」

総理

「そして転移先はこの世界でグアムがある辺りだが、転移先にはグアムおよびハワイが存在していない。さらに気候も海洋性亜熱帯気候ではなく日本と同じような四季のある気候のようだ。これについては転移後すぐに磁場などの観測を行い各精密機器の総点検を行ってもらいたい」

総務大臣

「分かりました」

総理

「さて、他に何か付け足すことがある者はいるか？」

外務大臣

「転移先には日本は存在しているので？」

総理

「調査では日本列島が確認されたがそこが日本である確証はない。よってまず日本列島に接近し交流を図る、そして大同盟に参加してもらう、一八〇〇年代後半であればまだ日本は近代化を成し遂げてはいない、そのことを会議で出せば何とかなるかもしれない」

総理

「他には？無いならば各自、自分の仕事をしてくれ」

転移まであと1時間

大同盟海軍と大同盟空軍は周辺警戒のため二時間前から領海及び領空を巡回していた。表向きは陸空海三軍による同時演習（三軍とも内容が違う、海軍は海自と対海賊。空軍は空自と対領空侵犯。陸軍は警察、陸自と対テロ）のため周辺国はそれほどの警戒はしていなかった。

自衛隊について

日本国自衛隊は大同盟軍に吸収されずに国土防衛部隊として軍とは別に、主に対テロ、領空・領海侵犯、対海賊、と他国との交戦時における最強の盾とするべく再編成された。年に一度軍と演習を行っている。その時、軍が攻めて自衛隊が守っている。ちなみに勝敗はほぼ五分。数年に一回攻守を変えての演習も行っている。

同時刻 日本海

海上自衛隊 第八防衛艦隊 旗艦 空母『蜃気楼』 艦橋

艦長

「にしてもこんな事になるとは数年前まで考えたことが無かったな」

航海長

「そうですね一国二軍体制ですからね」

艦長

「それだけではない、我々が空母に乗っていることもだ」

甲板からはカタパルトによって『蒼海』が発艦していった。

艦長

「あれが最後か、取舵20」

航海長

「とーりかーじ」

空では先ほど発艦していった『蒼海』の編隊が領空侵犯機（演習のため『天震』）を追いかけていた。

転移まであと30分

第八部 新たなる世界へ (2011, 11, 21, 19..40改訂) (後書き)

1895年 日清戦争が終わり【下関条約】が史実道理に締結され
【三国干渉】により遼東半島を史実と同じ3000両にて同半島を
返還した。

ここまでが史実道理の歴史である。

次回『新たなる世界で』

彼らはいったい何をなそうというのか

第一部 新たなる世界で（前書き）

1896年3月5日未明ハワイ諸島より北西約1500kmの地点で地震が発生

ハワイ諸島は無論、日本列島にも被害が及んだ。

だがこの余震は世界各国で観測された、その後も震度3から5程度の余震とは言い

難い揺れが続いた。

余震が収まり2日たったある日、東京湾に謎の大艦隊が出現した（のちに同盟海軍

第六艦隊所属の護衛艦隊と分かった）彼らは急に東京湾に現れたことを謝罪し大日

本同盟のことや彼らの目的を説明した。

1896年4月11日大日本帝国は大日本同盟に参加することを決定、調印式は

（大日本帝国の）皇居にて行われたがどの国もこのことを知ることはできなかった。

第一部 新たなる世界で

1900年 清

6月某日

史実道理に義和団が日本公使館書記とドイツ公使を殺害し北京の大使館を包囲。これにより大同盟が第二十七師団より二個連隊（普通科連隊）を清に派遣することを決定した。

21日

清国が宣戦布告、大同盟は二個連隊の代わりに第二十六師団を派遣。一個師団が派遣された理由は史実とは異なり大同盟の存在感を示すためだった（大同盟参加により大日本帝国のすべての条約が解消された）

一個師団の通常編成は

普通科連隊 五個 特科連隊 二個

火砲大隊 二個 飛行大隊 二個

通信大隊 偵察大隊

後方支援連隊 施設大隊 化学防護隊

となっている。大同盟陸軍の編成はその国の陸軍を方面軍としているため（一部例外あり）一個方面軍にかけられる予算は一国の軍と同等となる、つまり一個師団は実質二個師団分の戦力を持つてゐる。だが今回は

普通科連隊 六個 後方支援連隊 二個

通信大隊 特科連隊

偵察大隊

施設大隊

という編成になった。

なにはともあれ6月25日には第二十六師団が天津に到着。翌日には占領を終了。

7月4日より北京攻略作戦始動、大使館には第七方面軍の特殊部隊および中央即応集団が奇襲し、各国大使館を開放した。一方紫禁城には戦車大隊が攻撃を開始、城門を吹き飛ばし普通科連隊の突撃によって紫禁城は陥落した。

7月7日から北京にて和議交渉がなされ10月5日に北京議定書が調印された。

北京議定書（一部抜粋）

義和団に殺害されたドイツ公使と日本書記官に対する清朝要路者の弔問（ドイツ公使には皇弟愛新覚羅載あいしんかくらさいほう？、日本書記官には戸部侍郎那桐）と十分な賠償、さらに光緒帝本人の哀悼の意の表明。ドイツ公使に対する慰霊碑の建設。

清国政府はドイツと大日本同盟政府に対して賠償金として3億両を支払うこれは20年間の分割払いとする。

清国は、賠償金として4億5000万両を銀で列国に支払う。

清国政府は今事件に対しての責任者である西太后を退位させる。

（本来は極刑に処す、となっていたが西太后の命により賠償金を1億両から3億両に上げて合意した）

そのほか公使館を置いていた各国との議定書に調印したがロシアは中国東北部（満州）の割譲となった。

時は少し進み

1901年

八洲州（旧大日本帝国）の 横須賀、呉、舞鶴、佐世保、大湊の軍港を拡大、さらに根室、嘉手納、台南に新しく軍港を建設し各地に艦隊配備、そのほか発電所を建設する『日ノ本改造計画』始動。

1901年1月 イギリス

ヴィクトリア女王が死去。エドワード王子がエドワード7世として即位

2月

設計が見直された八幡製鉄所の操業開始。目標製鉄量は年500万トン。

3月

96年6月より改修工事をしていた足尾銅山が操業再開。

5月

『日ノ本改造計画』第一弾として八洲州各地に200万キロワット級のレーザー核融合炉を使用した発電所の建設。営業開始は1908年以降。それに伴い各地にて道路、鉄道敷設開始。終了目標は1916年。扶桑や秋津、大和、瑞穂の建設会社も参加した一大工事となった。

第一部 新たなる世界で（後書き）

歴史は変わり始めた。だがそれはたったの一部にしか過ぎなかった。

史実道理に起こった災害。

史実道理の歴史的出来事。

ならばどこまでがそのままだというのであろうか。

次回『日露開戦！』

第二部 そして時は流れる・・・（前書き）

1902年から1904年までを軽く説明

第二部 そして時は流れる・・・

「まさしく東洋の神秘」アルフレート・フォン・ヴァルダーゼー

1902年

3月

改六六艦隊計画（内訳は、イージス艦6隻、戦艦3隻、空母3隻そのほか護衛艦40隻）によりイージス艦敷島・旭日・初瀬・三笠・香取・鹿島、戦艦八雲・出雲・吾妻、空母河内・摂津・薩摩が同盟各地の乾ドックにて建設されたため同時に進水を迎えたが乗組員の大半が大和州などから派遣された大同盟海軍の士官だった。これは1910年になるまで解消されなかった。

8月

伊豆鳥島が大噴火したがアホウドリが乱獲され数が減少したため立ち入りが禁止され島民も本土に転居していた。そのため被害はないと思われたが、調査ののち密猟者数名が侵入していたことが分かった。

9月28日

八丈島の北東にて台風が発生。千葉、茨城、群馬、福島、山形等で死傷者、家屋の倒壊などの被害が出た。その時21日にフィリピンの当方にて発生した台風が沖縄方面より北上。この二つの台風の影

響により『日ノ本改造計画』による工事は一時中断、台風が去ってから作業が再開されたが工事に数か月の遅れが出た。

29日

八洲州各地に配備されていた陸上自衛隊が災害派遣されたため死者数は200人ほどに抑えられた。

1903年

7月

ロシアが東清鉄道を全線開通させる。これに対して大同盟は警戒を強める。

12月

ライト兄弟が動力飛行に成功したが、翌年大同盟空軍の航空機を目にし今までの苦労を嘆いた。

1904年

2月5日

大同盟政府はロシアの南下に対し八洲州の防衛体制を急速に整え、ロシア側と交渉を行い最悪の場合、武力行使も辞さない姿勢を表す。

8日

ロシア旅順艦隊が八洲第4艦隊に奇襲攻撃するが、発砲と同時に後方に展開していた戦艦隊に報復攻撃され半数が撃沈。八洲第4艦隊は無傷にて帰港。

10日

ロシア、大同盟へ宣戦布告。3自衛隊が防衛態勢、3軍は攻撃態勢へ。

11日 早朝

八洲州呉軍港より双胴強襲揚陸艇『デュアルクレイター』二隻が双胴空母『ムスペルヘイム』、空母『信長』二隻、戦艦『大和武尊』、駆逐艦多数を護衛にウラジオストクへ向けて出港。

15機の『飛影』が誘導爆弾を満載しウラジオストクへ向けて（空軍基地の整備が整っていないため）佐世保の機動艦隊より発艦。ウラジオストク港に停泊中のウラジオストク巡洋艦隊を全艦撃破し落伍機なしで帰還した。

12日 深夜

八洲州呉軍港を出港した双胴強襲揚陸艦『デュアルクレイター』はウラジオストク港より10キロの海上で揚陸艇を放出し戦艦『大和武尊』とともに北上、双胴空母『ムスペルヘイム』、空母『信長』の航空支援を受けながらウラジオストク港に入港。闇夜に紛れながら各種車両を上陸させながら対テロ訓練を受けた陸上自衛隊員と陸軍の特殊部隊によって、ウラジオストク港周辺のロシア軍施設を制

圧していった。

13日 明朝

ロシア軍基地には日章旗がはためいていた。

その頃第六方面軍第22師団（司令部は八洲州北海道札幌）は第十五艦隊に護送され間宮海峡を越え樺太に上陸豊富な火力で侵攻していった。

第二部　そして時は流れる・・・（後書き）

明後日には終戦を迎えたい・・・

第三部 極東ロシア攻略完了！

極東には一時の平和が訪れていた。

樺太、ウラジオストクを占領した大同盟陸軍は沿岸州を占領、東清鉄道の線路を走れる車両を待っていた。

さらに第4方北方面軍第が極東ロシア攻略作戦のためベーリング海を北上していた。

3月

第12・13師団はカムチャッカ半島を占領し西進を続けていた。樺太、ウラジオストク攻略部隊は第6北方面軍第23・24師団と交代し本土で休養していた。代わりに来た第23・24師団はようやく完成した車両を使用して東清鉄道を一路西へ進んでいた。（このとき使用された車両はディーゼルエンジンを積んだ車両が使用された）

4月

極東ロシア攻略作戦は東清鉄道、シベリア鉄道を使用して進められたため開戦2カ月でバイカル湖以東のほぼ全域を抑えていた。そうした中、旅順などの要塞は一向に補給と増援が来ないことにいら立っていた。そして4月18日大同盟陸・空・海軍による攻略作戦が開始された。

18日明朝 旅順要塞

「ん？」

「どうした？」

「なんだか甲高い音が聞こえたんだが」

「気のせいだろ、疲れているんじゃないのか？この頃まともに寝てないんだろう？」

「たぶんそうだろう、だけれども休むわけにはいかないだろう？」

「そうだ『ドオオオオオオオン』なっ、なんだ？」

「敵の攻撃か？」

「分かん、とにかく行こう」

「おう！」

旅順上空

『こちら“夜鷹”目標の撃破を確認』

「了解、帰投する。全機高度を上ろ」

『大鷲1了解』

『大鷲2了解』

『大鷲3了解』

『大鷲4了解』

彼らは扶桑州大同盟空軍嘉手納基地より飛来したステルス重爆撃機“彗星”である。彼らは嘉手納基地を飛び立ち八洲州嘉手納上空にて航空自衛隊の給油機より給油され旅順要塞を爆撃した後奉天要塞を爆撃しようとしていた。

「こちら大鷲1、迎撃機が上がってこないから安心してできましたよ」

『確かに、だがそれも今のうちだろう40年後には確実に迎撃機が上がってくるさ』

『そうそう、でもそのころには俺たちは退役だろ？』

「もしかしたら、どこかで教官でもしているかもな」

『おいおいそのころには定年だよ』

『俺たちに定年なんてあったか？』

「もしかしたら無線式の戦闘機とかの操縦士じゃないのか？」

『こら、お前らまだ作戦中だぞ!』

雲の上はおおむね平和であった

旅順要塞

『空からは喪失感が降ってきた、海からは絶望感がやって来た』

屈強なるロシア帝国兵にそこまで言わしめたのは大同盟陸軍第1方面軍第1並びに第2師団であった。彼らは大和州から第1艦隊の護衛付きで八洲州佐世保港に寄港。

爆撃機“彗星”の発進と同時に出港。綿密な作戦スケジュールにより爆撃終了直後に旅順へ上陸を開始、爆撃による混乱が残っているうちに要塞の後方より87式戦車の一斉砲撃や護衛の第1艦隊所属船の支援砲撃を受けながら要塞へと接近。

砲撃が止むのと同時に対テロ訓練による成果を見せまいと訓練道理の動きを再現した。事前爆撃や支援砲撃、閃光音響手榴弾の多用により日本側の被害は戦死13名、死傷者20名に抑えられた。

旅順要塞攻略を受けて総司令部は奉天要塞の攻略を先延ばしにし、奉天要塞には陸上部隊の砲撃と爆撃機“彗星”による爆撃が続けられた。そうした中大日本同盟外務省は大同盟陸軍特殊諜報部3課に協力を要請。

諜報部1課は国内、2課は国外そして3課は転移間もなくの状態でもことも関わりがない状態の国に潜入しその国の内情を調べ上げ、戦争状態に陥った時などに相手側の首脳陣と接触するのが任務となっていた。

早速ロシア帝国首相セルゲイ・フイツテ氏に接触することが決定されたが、旅順・奉天両要塞の攻略が終わって情報がニコライ二世のもとに届くころに決定された。

第三部 極東ロシア攻略完了! (後書き)

いつの間にかPVが1万8000になった

第四部 日露講和（前書き）

突貫工事でした・・・

第四部 日露講和

「この時の彼らの勝利はアジアに存在する植民地を支配する者にとつては悲劇であつたことは君達にも理解できるだろう、しかしここで問題なのが欧州各国の温度差だ。

イギリスをはじめとする欧州列強とアメリカが動いていれば歴史は変わった。全ての植民地の消滅という歴史になっていただろう。しかし欧州列強の一部並びにアメリカにロシア容易し、とロシアが負けたのは当然のこと、むしろ勝てない方がおかしい。などの意見が多数出た為なかなか動くに動けなかった事が幸いしているだろう。だがこれは歴史上の出来事が数十年遅れただけであることは歴史が物語っている。ではなぜ数十年後に過ちを犯してしまったのだろうか・・・今回はこのことをレポートの題材とする。提出は来週だ、必ず一枚は書くこと。以上質問は？無い様なので今回はこれで終了とする」

某大学教授の授業の一コマより

ニコライ二世

「さて、諸君たちも知っていると思うが、昨夜旅順・奉天両要塞が陥落したとの報告が入った、それに鉄道もバイカル湖以東が押さえられていて・・・取り戻すにはかなりの犠牲を払わなければならぬことは確か。今年是不作との報告も挙がっている・・・さらに民衆の中には戦争の中止を求む声も上がっているようだ。この戦争早く終わらせねばこの国は内部から崩壊するかもしれない・・・」

セルゲイ・ヴィツテ

「皇帝、昨夜日本から私に使者が参りました、彼らは我がロシア帝国と和平条約に締結する意思があることを通達してきました。朝鮮半島に手を出さなければウラジオストクなどの占領地域に引き渡し、捕虜の引き渡しの用意もある、とのこと。皇帝、ここで終わらせれば民衆の不満も抑えが効きます」

ニコライ二世

「・・・」

セルゲイ

「皇帝、これは敗北ではありません。やり直すチャンスです。もしこのまま戦争を続けたならば確実に民衆は皇帝に反発します、ですがここで終わらせれば・・・少なくとも手遅れにはなりません。手遅れになってしまった時には、この国は終焉を迎えます！

今引き返せねば今後の繁栄を失ってしまいますぞ！皇帝、あなたの処遇は私が彼らと交渉します！」

ニコライ二世

「セルゲイ、私のことはどうでも良いのだよ・・・ただ我が最愛の妻と娘たちが無事であれば・・・」

セルゲイ

「それも確実にします。この命に代えても・・・必ず・・・」

ニコライ二世

「頼んだぞ・・・セルゲイ」

1904年 5月 15日
バイカル湖畔

日露両代表による講和会議が開かれようとしていた。ロシアからセイゲル・ウィツテ首相を始め随員10名、大同盟からは山村外務大臣や外務省職員5名と陸軍士官3名が出席した。

会議のためにシベリア鉄道を用いてバイカル湖畔に来たセイゲル・ウィツテはそこに駐留する陸軍の大軍団（第23・24師団と増援として派遣された第1・2・3師団の全員が出撃を待っている状態であった）に驚愕した。

（これには大同盟には侵攻能力がまだあり、今すぐにでも動くことができる。ということロシア側に表していた）

セルゲイは今回の大同盟側の申し出を断っていたらこの大軍団がモスクワを火の海にしサンクトペテルブルグが瓦礫の山と化していたことを悟った。

何しろ相手は二つの要塞を一晚のうちに撃破し自分の元に使者を送るほどの国だ、あの海の先には後どれくらいの兵士がいるのだろうか・・・少なくとも・・・

ここまで考えてからセルゲイは恐怖した。

あれの何倍もいるとしたら、確実にわがロシアは敗れる。いかに冬將軍が来ようとも確実に敗れる・・・ならば今のうちに・・・そう、今のうちに・・・

山村

「セルゲイ殿遠路遙々ご苦勞でした」

セルゲイ

「いいえ、まずは我がロシア帝国の皇族の処遇を確かにしてもらいたいのですが？」

山村

「ええ、本国からは皇族の安全の保障については5億\$で身柄の拘束など一切行わないそうです」

セルゲイ

「そうですか・・・」

山村

「それではこのたび極東ロシアにて起こった戦闘の責任はそちらにある、という認識で構いませんね？」

セルゲイ

「構いません」

山村

「それでは、捕虜についてですが階級に関わらず一人当たり1万\$、捕虜は凡そ35万人とのことですので請求金額は35億\$です」

セルゲイ

「そつ、それはいくらなんでも・・・」

山村

「それでは彼らには今現在各地で行っている鉄道敷設を25億\$分手伝ってもらいましょうかね・・・」

セルゲイ

「すみませんがそちらの要求を紙面でもらえませんか？どうにもいくら全権大使といっても決められないことが多々ありますので・・・」

山村

「ええ、いいでしょう。今紙面にして持ってこさせます」

このとき山村がロシア側に渡した要求書は

一つ、5億\$にて大日本同盟はロシア皇族を拘束などしないものとする

二つ、極東ロシアで戦闘勃発の責任はすべてロシア側あるとする。
よって賠償金15億\$を請求する

三つ、捕虜は階級に関わらず一人あたり1万\$でロシア側に引き渡す。本人が帰還を断ったら支払いをせずに大日本同盟に帰化できるものとする。

四つ、今戦争勃発の原因としてロシア側に30億\$を請求する。

五つ、ロシア帝国および大日本同盟は朝鮮半島および樺太を非武装地帯とする。

六つ、大日本同盟は講和条約締結と同時にロシア領より撤退を開始する。

七つ、戦闘および戦争勃発の原因に対する賠償の半額は同等のものとの交換でも良い事とするが、大日本同盟が同等としたものに限る。八つ、支払期限は定めのないものとするがロシア帝国が滅びたとしても大日本同盟が後継国とした場合未支払分の賠償金を相続する。の八項目からなっていたため対露基本八項目要求書と呼ばれた

バイカル湖畔での講和会議より二週間後、バイカル湖の臨時作戦司令部にロシア帝国から戦闘および戦争勃発の原因に対する賠償の半額をバイカル湖より以東のロシア領の割譲、ロシア領内に存在する資源の優先獲得権にしてもらえないか、という文章が届いた。

大同盟政府はこれをバイカル湖畔の東側沿いに割譲ラインを引いた地図と永久割譲および資源の永久優先権にて戦闘および戦争勃発の原因に対する賠償金の半額とするという条文にしてロシア帝国に送った。

1904年 6月 10日

バイカル湖畔の大同盟陸軍基地において日露講和条約及び各種条約が締結された。

これにより凡そ半年間続いた戦争は終結したのである。

そしてこのとき大同盟はロシア帝国と国交を正常化、その後ロシア帝国の仲介の下イギリス、フランスなどの列強と国交を正常化させていった。

第四部 日露講和（後書き）

さて、本日は8月15日終戦記念日です。終戦と言っていますが実際には敗戦なので記念日とは言い難いのですが戦争という悲劇が終わった日、という解釈ならば記念日という表現でもよいのかなという気がします。

さて国内だけでなく海外にも目を向けると隣の半島では解放記念日だとか、ですが史実の日露戦争時に日本派、ロシア派に分かれていたことを知る人は少ないのでは？ほかにインドやコンゴの独立記念日だそうです。

韓国といえど何やら文献などの返還を要求しているようですが、いままさら併合時代の文献などを返還しても保存費がかさむだけで意味がないと思うんですよね。

終戦より早60数年日本という国家は長い間平和というぬるま湯に浸かっていましたがそろそろ、なぜ日本が長い間平和であり続けられたのか、考えることが大切になってきました。なぜならぬるま湯は長く浸かっていると冷たくなって風邪をひいてしまいますからね、このあたりでもう一度沸かし直した方が良いのではないのでしょうか？ですが私は戦争をしろと言う訳ではありません、ただ今の平和は砂上の楼閣でしかありません。それは案外もろいものなのです、周りを警備するものが居なければ誰かが不用意に触ってしまい崩れてしまうかもしれません。

軍事力がいらぬという人は家を留守にするときにいつもドアや窓を全開にしていってくださいそうすれば我々を守る者の大切さが理解できると思います

さて次回は更新が遅くなります、ご了承ください。

世界には平穩が戻ったしかしそれはすぐに崩れてしまった平和は新たな争いの準備期間でしかないのだから・・・次回『小休止』

第五部 小休止（前書き）

平和とは新たな争いへの準備期間である。

第五部 小休止

日露戦争終結により世界には平和が訪れた・・・たえそれが一時的なものであったとしても、それは平和には変わらなかった。

1906年

サンフランシスコ地震

死者数千名、22万人余りが家を失うほどの被害が出た。大同盟政府は現地の日本人に帰国命令をだしサンフランシスコ市に500億円の援助金を贈った。

レーザー核融合炉を使用した発電所が北海道（上川・日高）・青森・宮城・群馬・長野・岐阜

奈良・兵庫・広島・徳島・高知・大分・鹿児島・沖縄で完成、なお周波数は議論の結果50Hzに統一され、発電所が完成したところから送電路の敷設が開始された。

1908年

台湾にて縦貫線が全線開通。八洲州の他路線より早く完全電化が完了。

清の光緒帝、西太后が崩御。光緒帝に関しては砒素による毒殺が疑われた。

釧路・岩手・石川・静岡・山口・宮崎にレーザー核融合炉を用いた発電所が完成。

この後も各地に風力・水力などの自然エネルギーを用いた発電所が建設され、従来の発電所は解体またはタービンなどを最新のものに

交換し使用された。

1911年 10月

辛亥革命発生。

海上自衛隊隷下の海上保安隊と航空自衛隊、海上自衛隊の索敵機が出動。国境警備を開始。

1912年 7月20日

明治天皇崩御。大日本同盟憲法に基づき次期天皇を大和州の皇太子に。

10月

第一次バルカン戦争勃発

清朝が倒され共和制国家「中華民国」が樹立

11月

日露間にて極東ロシア防衛条約締結により自衛隊5個師団が第一、第二、第三防衛管区より移設、陸軍第六北方方面軍より二十七、二十八師団からそれぞれ普通科連隊三個、特化連隊二個、戦車大隊二、飛行大隊二個が移設。基地建設のため陸軍と自衛隊の施設大隊を総動員し滑走路や要塞などの主要施設を建設していった。

この時建設された要塞が後に最終防衛ラインとして活躍することはまだ誰も知らない。

建設が完了した発電所が全国一斉に運転を開始。

発電所は職員の育成が終わるとともに民間企業に引き渡された。

1913年 8月

次元航行艦『日向』就役

秘密裏に建造されていた『日向』は数年前から確認されていた謎の武装集団に対抗するために機密費や国債の一部を流用し建造された、機関・武装・航行システム・推進装置などが数十年たった今でさえも資料が防衛機密・軍事機密・国家機密として扱われている。

閲覧は何者でさえ許可は下りず、設計も数十人が携わりそれぞれが各部分を担当したため完全には判明せず、製図された場所すら判明していないほどの徹底ぶりである。だが次元航行艦の名の通りに次元転送装置の改良版が搭載されていることは確かである。

12月

鹿児島県にある桜島の東側海域の生け簀で魚・エビの大量死が確認され海水温が上昇していることが判明。複数の火山学者が調査したところ“噴火の予兆あり”と判断されたため桜島に生活している住民に避難勧告が出された。

1914年 1月

桜島が大噴火

噴火の数日前から微小地震が数百回観測されていたため自衛隊が災害出動し、まだ桜島で生活していた住民数十名を保護した為死傷者は奇跡的に0人であった。

なお、この時の噴火に伴う地震により対岸の鹿児島市内で石垣や家屋が倒壊する被害が出た、翌日の昼ごろに噴出した火山弾により島内各所で火災が確認されたほか、多数の軽石が島内および海上に落下、大量の火山灰が風下の大隅半島に降り積もった。

島内各所に存在した集落が溶岩流にのまれ数日後には海上にあった鳥島が溶岩に包囲されたほか深さが72mあった瀬戸海峡が埋め立

てられた。

月末には溶岩により桜島と大隅半島が陸続きとなった。

5月

リニアモーターカーが運行開始。その他主要都市にて路線が開通、運行開始。

政府は発電所の発電量に余裕があることを確認し既存の全家庭に配電工事を推奨。

工事業者には助成金を配布。各地に工業高校が開設されていく。当時電気工事法に則った工事ができる技術者が少なかったからである。

秋津・大和・瑞穂・扶桑の工業高校から講師が招かれ大都市に校舎を建設し中等教育終了者を募集し授業が始まったが開始数か月目から退学するものが多数出てきたが、生徒の7割が修業し全員電気工事士免許を取得し各地にて活躍していく。そして数年後には工業高校の学科が電気以外にも設立されていた。

第五部 小休止（後書き）

少しスランプ気味ですが頑張っていきたいと思います。

それでは少し気になった記事を紹介します。

次期主力戦闘機（FX）の機種選定問題で、防衛省は23日、平成23年度予算案の概算要求にFXの調査費として、米英などが共同開発中のF35ライトニング2関連を中心に約7億円を計上する方針を固めた。21年度に最初の調達費を計上するはずだった予定から大幅に遅れているFX計画は、最新鋭の第5世代機のなかで唯一調達可能なF35への一本化に向け、大きく踏み出した格好だ。

F35の調査では、敵に捕捉されにくいステルス性などの性能のほか、調達と維持にかかるライフサイクルコストや整備面で必要となる情報も収集する。

こうしたデータについて、防衛省は有償軍事援助（FMS）契約で米政府に開示を求める。

F35は米英はじめ9カ国が共同開発中で、情報開示にかかる費用は米国以外にも支払う必要があり、合計で数億円にふくらむ見通しだ。

YahooJapanニュース（産経新聞）より

FXはF35に決まりそうですね、ですがほかの候補のユーロファイターやFA18E/Fなどは情報開示の費用は掛からないようです。

ここで少し冷静に考えてみると自衛隊がステルス機を持ったとしてそれを生かす機会があるのかどうか問題となります。

なぜなら自衛隊が戦闘するのは自国の領空・領海・領土つまり自分たちの庭。

さらに防空となると正義は割られにあるのです、来たものを追い払うにはミサイルなどの装備量にかなりの制限があるステルス機よりステルス性能がなくとも速度、機動力のある機種が良いのではないのでしょうか？

そもそもステルスとは電波の反射を少なくしエンジンからの排熱を最小限して、なるべく見つからないように進みどこからともなく攻撃をする。

これがステルス機の戦法です。ですが自衛隊にできることは逃げる領空侵犯機を追いかけたり、警告するという堂々と姿を現し重圧をかけることにあります。

この時、向こうが攻撃してきたらいくらステルス機でも簡単に落とされてしまうでしょう。ならば相手のミサイルないし追撃をかわせるほどの速度と機動力が重要になるのではないのでしょうか？

さて今回は第一次世界大戦です。

たった一人の“死”それが世界に与えた影響は大きかった……いや大き過ぎた。

この時彼らはどのように動くのか……介入か？それとも静観か？

どちらにせよ欧州の地では血が流れることになるのであろう……

次回『新たなる戦』

“これ”が我々の戦争ですよ・・・高高度からの爆撃、射程外からの攻撃、強力な火砲による砲撃、敵の位置を探る監視システム。卑怯？いいえ、これが我々の戦争ですよ。

第六部 新たなる戦い 前篇（前書き）

皆様、お久しぶりでございます。

予てからの懸念事項であった第二種電気工事士の技能試験も無事合格しました。

これからよろしく願います。

P S. 累計P Vが2万6千を超えておりました。皆様ありがとうございます。

第六部 新たなる戦い 前篇

賽は投げられた。

一人の男の暴挙によって。

一人の男の死によって。

世界は、いや歴史は血に飢えている。

1914年 6月末

サラエボ事件発生。

当時の欧州列強は複雑な対立、同盟関係にあった。

列強国の参謀本部は敵国からの侵略に備えさまざまな戦争計画が練られていた。

その中で起きたサラエボ事件を契機に各国軍部は総動員を発令し戦争準備に取り掛かった。

各国の政府は何とか沈静化しようとした。だが、一度動き出したものは止まらない。

暗殺犯の自白により暗殺に用いられた武器はセルビア政府の支給品であることが判明した。

オーストリア＝ハンガリー帝国はセルビア政府に対して最後通牒を突き付けた。

そして全条件を無条件にて承諾しなければ宣戦布告することを通知。これに対しセルビアは一部以外すべて承諾したが全条約では無かったためオーストリア＝ハンガリー帝国は7月28日、セルビアに宣戦布告。

7月

欧州各国はドイツ帝国・オーストリア帝国・オスマン帝国・ブルガリア王国の同盟国とイギリス・フランス・ロシア帝国の協商国を中心とした連合国の二つの陣営に分かれた。

そして戦闘が開始される前にロシア帝国、イギリスは極東事変（日露戦争は規模、期間が小さかった為）の際に締結した日露英三国協力条約に基づき大同盟にアジアの英国植民地の防衛、露国への食糧支援、通商防衛を打診。

そして大同盟は活動地域での食糧などの供給を約束に海軍第七、第八艦隊。海自第九、第十一護衛艦隊。陸軍第一、第二方面軍。陸自第六、第八軍団の派遣を決定。

大同盟は同盟国に対して宣戦布告する意思は無いが悪意ある攻撃には全力をもって対応することを発表。

混沌とした情勢の中で各国の準備は整っていった。

28日

オーストリア＝ハンガリー帝国、セルビアに宣戦布告。

日英露三国協力条約に基づき英露が大同盟に対し協力を要請。

29日

ブルガリア、中立宣言。

アメリカ合衆国、モンロー主義に基づいて不干渉を宣言。

30日

大同盟は協力を承諾。

大同盟の協力を得られたロシア帝国は総動員を開始。

31日

オランダ・ベルギーで総動員開始。

ドイツ、フランスに対し中立を要求。

8月 1日

フランス、中立要求を拒否し総動員開始。

ドイツ、総動員開始。ロシアに対して宣戦布告。

オーストリア・ハンガリー帝国、総動員開始

2日

ドイツ、ベルギーに領内通過要求と同時にオランダに侵攻。

――首相官邸――

大高首相

「とうとう始まったか・・・」

西野経済産業大臣

「そうだ、すでにオーストリアがセルビアにドイツがロシアに宣戦布告している各国が雪だるま式に宣戦布告し始める」

高山内務大臣

「予想されていたことだ。何の問題もあるまい」

柊防衛大臣

「問題があるとすれば我が国の台所事情だな」

金本財務大臣

「一応長年貯めてきた機密費の備蓄がありますが、これには手を付けずに昨年からの持ち越し予算を足りなくなったら流用すれば何とかなるでしょう」

佐藤厚生労働大臣

「もしも機密費の備蓄を使ったとしたら隠し通すことはできん」

高山

「野党が五月蠅くなりそうだ」

金本

「機密費なのだから何に使っても問題はありませんよ」

西野

「確かに」

佐藤

「そういえば『日向』と例の“あれ”はどうなりました？」

柊

「今『日向』が足取りを追っているがな・・・何せ暗闇の中で白い紙を探すようなものだ」

高山

「一歩間違えたら次元の藻屑・・・か」

佐藤

「ぞっとしますね」

金本

「それにしても奴らは何なんでしょうね」

柊

「ああ、あんなに簡単に次元を越えるとは」

大高

「ともかく『日向』が“あれ”の足取りをつかむまでこの件は保留だよ。それよりもこの戦争、どこまでやるのが問題だ」

柊

「本格参戦になった場合、陸海空軍と陸海空自の全力を投じた短期決戦か特殊部隊による首脳部の暗殺のどちらか、もしくは両方を投入すれば参戦から一年で終わらせることは可能だが・・・」

金本

「金が掛かる。そう言いたいのだろうか？」

柊

「そうだ、何せ採算度外視で計画を練りやがって宣戦布告と同時にS弾頭ミサイルまで・・・ぶつぶつ・・・」

佐藤

「何か・・・今聞いちゃいけないような事が聞こえたんだが・・・」

大高

「まあ、なんだ・・・その・・・一応捻出できる戦費内で戦略をな・・・頼むぞ？」

（ふう。欧州各国はこの戦争でかなりのダメージを受けるだろうな・・・そのまま衰退の道を歩んでいく国が幾つ有るのだろうか？この戦はもはや消耗戦だ、過去のように賠償金を払っただけでは戦勝国の傷は癒える事が無いだろう・・・そうなればわが大同盟もある程度はやり易くなるが外貨の獲得が難しくなる。それに問題はまだ有る、この世界に来る前に調査した世界では“時空管理局”という武装組織が接触してきた、奴らの技術は科学によるものではないのは確か・・・それに名称から想定すると複数の時空世界に勢力を伸ばしているはず。いずれかは対立することになるのだろうか？その時は少なくともS弾の使用も止む無しとなるのかもしれない。こちらもある程度の損害が出るはず・・・その時兵士たちの士気が落ちなければ良いのだが・・・）

3日

ベルギーがドイツの領内通過要求を拒否するがドイツ軍は無視しフランスに宣戦布告

4日

ドイツ、ベルギーに宣戦布告

イギリス・カナダ・ニューファウンドランド、ドイツに宣戦布告

大同盟は海自第九護衛艦隊をインド洋、第十一護衛艦隊を南シナ海に派遣し英国のアジアにおける通商防衛を開始。また海軍第七、八艦隊は北海に派遣。島国イギリスの制海権、制空権を終戦まで確保し続けた。

5日

モンテネグロ、オーストリア・ハンガリーに宣戦布告

6日

オーストリア・ハンガリー、ロシアに宣戦布告

セルビア、ドイツに宣戦布告

中国、中立宣言

7日

スペイン、中立宣言

8日

モンテネグロ、ドイツに宣戦布告

フランス・イギリス、オーストリア・ハンガリーに宣戦布告

23日

ドイツ軍、ベルギーに総督府設置

26日

ドイツ軍、東部戦線にて快進撃を続ける

28日

オーストリア・ハンガリー、ベルギーに宣戦布告

9月 5日

マルヌ川でフランス軍がドイツ軍の進攻を阻止。これにより対フランス戦悶着状態に

10月 30日

ドイツ軍、ベルギー戦線にて塹壕戦に突入。対イギリス戦悶着状態に

11月 2日

ロシア・セルビア、トルコに宣戦布告

5日

イギリス・フランス、トルコに宣戦布告

7日

イギリス・フランスの要請により大同盟が参戦

11日

八洲州台北より海軍第二〇艦隊隷下第一、第二機動艦隊が艦上爆撃機『天震』を満載し第二一艦隊の護衛の下出撃。

第一、二方面軍並びに陸軍特殊部隊がシベリア鉄道を西進しモスクワに到着。

16日

極東ロシアに作られた空軍基地からイギリス、フランスまた北海に展開している海軍のため物資を満載した軍用機が飛び立ち始める。目的地に整備された滑走路がないため物資の供給はパラシュートが多用された

ドイツ軍・オーストリア軍、ロシアと激戦。東部戦線はそのまま悶着戦に

21日

大同盟陸軍第一、第二方面軍、陸軍特殊部隊がワルシャワに到着。

12月 10日

北海

派遣された第二〇艦隊隷下の機動艦隊より爆弾を満載した『天震』が飛び立とうとしていた。

さらに近くにはイギリス海軍の艦艇が警邏している。

英国海兵A

「それにしてもなんだ？あの船は」

英国海兵B

「確かに、艦橋は薄くて右舷側によっているし大砲もつんでない。あれでどうやって戦うんだ？」

英国士官A

「それだけじゃない、あれだけデカいから排水量もかなりの量になる」

英国士官B

「それに船の速度がかなり落ちるのは間違いないだろう」

英国海兵C

「ん？何か出てきたぞ！」

英国士官A

「黒い、飛行機？」

英国士官B

「しかしプロペラがないな」

その時一機の『天震』が電磁カタパルトによって打ち出された

英国海兵A

「な、なんて速さだ」

英国海兵B

「おい！もう一機出てきたぞ！」

英国士官C

「もしかしてあの船は飛行機用の船か？」

英国士官B

「だが奴らは貧弱な飛行機に何をさせるんだ？」

———空母『不破』艦橋———
艦長

「司令。爆撃機の発艦、終了しました」

司令

「作戦『ヨーロッパの火』の発動だのう」

艦長

「彼らの活躍に期待ですな」

司令

「そうだな。まあ、わしらにできることは彼らの帰る場所を守る事ぐらいだよ」

艦長

「確かに」

司令

「さて艦長。欧州派遣軍団の全部隊に緊急電、文面は“火が出たぞ”だ。それと第一、第二機動艦隊の全艦に打電これよりバルト海へと向かう。機関最大！全速前進！」

第六部 新たなる戦い 前篇（後書き）

カタカタカタ

カタカタ・・・カタ・・・カカカカッカタカタカタ

大高

「おい作者」カタカタ

なんだ カタ・・・カタカタ

大高

「なんでこんなにも更新が遅れたんだ」

知りたいか？

大高

「ああ」

出番減るぞ

大高

「なに！」

・・・冗談だ

大高

「性質が悪いぞ」

実はな・・・

大高

「無視すんな！」

気胸で入院してた、8月の28日位から。

大高

「・・・いつまで？」

月曜

大高

「今週の？」

今週の

大高

「今日は何曜だ？」

木曜。詳しくは9月の第2木曜

大高

「そうか・・・」

そうだ。で他には？

大高

「いや、何も」

そうか カタカタ

カタカタ・・・・・カタ・・・カチ、カチ、カタカタ

カタカタカタ

カタカタカタ

第七部 新たなる戦い 中編（前書き）

なかなか終わらない

第七部 新たなる戦い 中編

――ワルシャワ 大同盟陸軍前線司令部 指令室――
通信士

「児玉司令！緊急電です！」

参謀

「内容は？」

通信士

「はっ！」

発、第二〇艦隊隷下第一機動艦隊旗艦『不動』
宛、欧州派遣軍団の全部隊

“火が出たぞ”
以上です！」

児玉

「そうか・・・総員戦闘準備！目標はドイツ帝国首都ベルリンだ！」

参謀

「べ、ベルリンですか・・・それは少し遠くないですか？」

児玉

「なあに、問題はないさ。たった今、北海から『天震』が百機ベルリンを空爆しワルシャワに向かう。その途中で敵軍の塹壕があったら爆撃するしワルシャワ近郊まで来るか、我々を確認したら北上してバルト海に向かう手筈だ。まあ監視衛星の画像でどこに敵がいるのかはわかっているのだがね」

参謀

「なるほど『天震』がうまくやってくれば、ベルリンまでの道のりは多少は近くなりますな」

児玉

「何、俺たちは第一、第二方面軍団と特殊部隊だ、苦勞するはずがない」

参謀

「まあ、多少の損害は受けるでしょうが」

児玉

「さて、忙しくなるぞ」

その頃指令室の外、いや司令部の外は爆音が支配していた。今回派遣された第一、第二方面軍団はそのほぼ全部隊を欧州の地に送っていた。そのためこの地には十六個師団分の戦力が集っていた。

――二時間後――

ワルシャワの防衛に数個師団を残した彼らは線路沿いに西に向かっていた、またロシア帝国軍も鉄道を利用して着いて来ている。さらに欧州派遣軍団の司令である児玉司令も指揮車両に乗って後方からついて来ている。

――欧州派遣軍団 指揮車両――

児玉

「ところで、今更ですが来ても良かったので？ブルシロフ將軍」

ブルシロフ

「ええ、ワルシャワにいるより貴軍に付いて行った方が安全そうだったのですね」

児玉

「そうですか。それでは我々の戦い方を存分に見てもらいましょうか」

ブルシロフ

「貴軍の装備は興味深いものばかりですからな」

児玉

「そうですか」

通信士

【児玉司令】

児玉

「どうした？」

通信士

【先頭を進む部隊より、敵塹壕発見との連絡が】

児玉

「そうか、分かった」

ブルシロフ

「敵ですか？」

児玉

「ええ、そうです。そうだ良いモノを見せましょう」

ブルシロフ

「良いモノ？」

その頃先頭を走る部隊は

――火砲大隊統合指揮車両――

火砲大隊指揮官

「監視衛星の画像によるとそろそろ接敵するはずなんだが・・・」

通信士

「先頭を走る偵察隊より入電。我、前方2km先に塹壕を確認、指示を求む。以上です」

火砲大隊指揮官

「後続の友軍に打電。我これより砲撃準備に移る全車両停車し警戒を厳にされたし、以上だ。それと前方の偵察隊に弾着観測をさせろ。第二師団の火砲大隊に砲撃命令。施設大隊に打電。前方に塹壕を確認、作業の用意をせよ。以上だ」

――第二師団 火砲大隊 指揮車両――

敵塹壕発見の知らせを聞き戦車隊の砲以外は仰角を取り砲撃準備に入っていた。

通信士

【火砲大隊統合指揮車両より第二師団火砲大隊へ。前方の敵塹壕へ

の砲撃を許可する。

なお、弾種は榴弾を使用せよ】

「了解。第二師団火砲大隊の全員に告ぐ。砲撃用意、目標は前方敵塹壕、使用弾種は榴弾を使用せよ。正確な距離が不明なため三掃射の後に効力射に移る」

【こちら第一自走榴弾砲隊いつでもいけます】

【第二自走榴弾砲隊、準備完了】

【第一自走迫撃砲隊だ。合図を待っている】

【第二自走迫撃砲隊。発射の合図はまだか？】

「準備が早いな。よし全砲門、撃て！」

ドドドオオオン

【こちら偵察隊、弾着を確認した。これより修正データを送る】

【第一自走榴弾砲隊準備完了】

【第二自走榴弾砲隊、修正完了】

【第一迫撃砲隊。修正が完了した】

【第二自走迫撃砲隊、準備完了】

「第二掃射目、撃てえ！」

ドオオオオン

【目標への弾着を確認。修正の必要なし】

「了解。各砲門に告ぐ、これより効力射に移る。停止の指示があるまで撃ち続けろ」

【第一自走榴弾砲隊。了解】

【第二自走榴弾砲隊。効力射に移ります】

【第一自走迫撃砲隊。了解！】

【第二自走迫撃砲隊。了解】

——欧州派遣軍団 指揮車両——

ブルシロフ

「一方的ですな」

モニターの向こうではいまだ砲撃が続けられている

児玉

「ええ。それが何か？」

ブルシロフ

「いつから戦争は名誉や名声の為のモノではなくなったのでしょうか？」

児玉

「元々ですよ。争いごととは醜いものです」

通信士

【児玉司令『天震』が到着しました】

児玉

「そうか、援護感謝すると伝えてくれ」

通信士

【了解しました】

児玉

「それと、全部隊に通信を繋げてくれ」

児玉

「諸君、欧州派遣軍団司令の児玉だ。たった今、北海を飛び立った『天震』が上空を通過した。という事は作戦目標のベルリンまでの道のりはかなり楽になるはずだ、敵は未だ爆撃の混乱から覚めていないかこれ以上の攻撃はないと思っているに違いない。叩くならば今だ、しかし時が経てば混乱から回復し態勢を立て直されかねん。そうなれば苦戦することは間違いない、一刻も早くベルリンに到着せねばならない。到着すれば後は此方のものだ、我らが祖国はドイツにしか宣戦布告はしていない。よってベルリンを落とせば我らは祖国に戻る。さあ、急ごう諸君、彼の地では君たちの家族が待っているぞ」

第八部 新たなる戦い 後編（前書き）

ピースウオーカー式型に勝てない・・・

第八部 新たなる戦い 後編

———??? ???? ?———

ビィー、ビィー、ビィー

???

「！！前方に次元の亀裂が発生！」

???

「次元跳躍システム作動！何としても逃げ切れ！」

???

「システム作動！炉心安定、出力最大！」

???

「亀裂拡大！」

???

「転移可能数値まであと500・・・400・・・300・・・」

???

「亀裂の拡大が速まっています」

???

「あと200・・・150・・・」

???

「ん?! 大変です！次元の亀裂に引き込まれています!!」

???

「なんだと!! 今までの亀裂ではそんな事は無かったぞ?!」

???

「亀裂にのまれるまであと100!!」

???

「転移可能まであと90!!」

???

「亀裂、さらに拡大! 本艦を包むように広がっていきます」

???

「転移可能まであと60、亀裂にのまれるまであと65。ぎりぎり逃げ切れます」

???

「亀裂がさらに拡大! 四方を囲われました!」

???

「転移まであと40!」

???

「亀裂の拡大さらに加速! 転移まであと30!」

???

「あきらめるな!!」

???

「セーフティー作動!? 炉心出力低下!! 転移、間に合いません!」

???

「くそ!!.....ここまでか.....」

???

「亀裂にのみこまれます!」

12月 11日 深夜 ベルリン

昼間の爆撃により町は瓦礫の山となっていた。

更に路地裏では家々の壁が崩れ通れなくなっているところもあった。そんなところに2、3人は余裕で入れそうな木箱が2つないし3つ置かれていた、それも様々なところに.....そして、それはなぜか傷1つ付いておらずそこに佇んでいた。

奇妙な沈黙と威圧感を放ちながら.....

12日 早朝

第一軍団統合指揮所

???

【ザザーーHQ、こちら山猫、目標を確保。ザザーー】

通信士

「作戦発動暗号受電！」

軍団長

「とうとう来たか、まったく待ちくたびれたよ」

副長

「しょうがないでしょう、昨日までの戦闘で弾薬をいくらか消費してしまいましたし。」

車両の整備もしなければならぬのですから」

軍団長

「まあ、それは分かっているが・・・」

副長

「それに、“彼ら”の準備も整えねばなりませんでしたし」

軍団長

「仕方のないこと、と言えば聞こえはいいがな・・・過ぎたことを言ってもしょうがないな。火砲隊に打電、作戦目標に対し0630（マルロクサンマル）より砲撃を開始せよ」

第一軍団火砲隊指揮所

通信士

【統合指揮所から火砲隊指揮所へ、作戦目標に対し0630（マルロクサンマル）より砲撃を開始せよ】

指揮官

「了解」

通信士

【オーバー】

指揮官

「カクカク、指定目標砲撃用意に移れ」

指揮官

「1射目は一斉射撃、2射以降は自由射撃とする。なお砲撃開始は0630（マルロクサンマル）だ、それまで接近するものに警戒しろ」

時は少し遡り・・・

12日 ベルリン

時刻は夜明け前、路地裏に置かれた木箱は数時間前と何一つ変わらずにそこに在った、いやそこに居た。

???

【ザザーーー山猫は眠らない。繰り返す、山猫は眠らない。ザーーー】

カタ・・・

スーーー・・・

カタン・・・

トサツ・・・ザツザツザ

突然流れた無線を合図に急に木箱の蓋が開き、中から都市迷彩に身を包んだ兵士たちが出てきた。このようなことはベルリンの様々な所で起きていが、そのことに気付く者は誰一人として居なかった。

同日 早朝 ベルリン

昼間の爆撃によりベルリン王宮は、窓が外壁ごと吹き飛び、屋根はなくなり、内装は所々焦げていた、その姿はまるで火事のあった廃墟のような風貌をしていたが、警備の兵が巡回しているためまだ皇帝は王宮に居る事が見て取れた。

しかし周囲の民家なども爆撃により崩れているため、周囲の見通しが悪くとても警備が整っているようには見えなかった。

そんな宮殿に足音もなく近付いてくる姿があった。

その数凡そ20名。彼らは都市迷彩に身を包み暗視ゴーグルをつけ、手には消音機を付けた拳銃を持っている。彼らは爆撃後未だ混乱の中にあるベルリンに潜入し作戦発動まで持ち込んだ木箱の中で待機していたのだ。

そんな彼らの部隊名は大同盟陸軍総司令部隷下特殊戦闘潜入部隊第一部隊。通称山猫部隊

その他第二部隊、第三部隊がありそれぞれ赤狐、大蛇部隊と呼ばれ、陸軍総司令部以外から（外務省、海軍、空軍、統合幕僚本部など）の依頼にも対応している、また今回のように追加戦力・別任務を受けて派遣されることも多い。なお任務のほとんどが単独潜入である。そのため無線の相手はたいてい作戦本部に繋がっている。

陸軍の他の部隊や自衛隊の特殊部隊からは「自衛隊の特殊部隊（俺たち）は人間をやめた人間だ、しかし奴らはもともと人間ではない」

とまで言われている。なお無線によるサポートが役に立たないことで有名。

そんな彼らの任務は山猫部隊としてベルリンに潜入、ドイツ皇帝とその家族の確保、並びにドイツ侵攻の橋頭保となること。そして今回与えられた武器は暗視ゴーグル、9 m 拳銃（消音機付）サバイバルナイフ、一部兵にプラスチック爆薬か狙撃銃が配給されている。

1914年 12月 12日 6時30分

大同盟陸軍第一軍団隷下第一師団火砲大隊、同第二師団火砲大隊、同第三師団火砲大隊、同第四師団火砲大隊、並びに同第二軍団隷下第五師団火砲大隊、同第六師団火砲大隊、同第七師団火砲大隊、同第八師団火砲大隊、合計八個師団3600門にも及ぶ火砲が咆哮した。

第八部 新たなる戦い 後編（後書き）

どうも皆様お久しぶりです。

なんだかこの頃、周囲が煩くてたまりませんね。

まったく、日産などに掛け合って全面撤退してもらえば国内の就職率もかなり上が

るというのに・・・それに侵入者に対する対応がおかしいでしょう。

今回の件であたりにさらに漁船が集まってしまふ筈です。

やはりミンスではだめでしたね、某ニュース番組で自民、公明、みんなにさんざん

言われてましたし（笑）

ちなみにこの世界での日本はへそを曲げるととんでもない事をやらかします。

簡単に言えば今回のような黒鋼の咆哮です。八個師団3600門は正直やりすぎた

かなと思っています。これに普通科や施設科などが加わったのが後

19個師団、5個方面軍分とおよそ30個師団、7個方面軍の陸上自衛隊。水上艦艇1000隻以上の海軍、ほぼ同数の海上自衛隊に

稼働機数30000機以上の空軍と稼働機数およそ20000機の
航空自衛隊が加わり、次元航行艦隊とS弾頭ミサイルの雨・・・
こんな国に勝てる存在はありませんね。

「ここはどこだ・・・」

「時間だ・・・全砲門一斉射撃!!」

「ベルリンが・・・燃えてゆく・・・」

「これで、俺たちは帰れる」

「明日からまた、訓練漬けた・・・」

見知らぬ場所にたどり着いた追跡者たち

燃えるベルリン

火を噴く黒鉄の塊・・・

彼らは何を得、何を失い、何を考えるのか・・・

次回

「失われし都。そして・・・」

第九部 失われし都、そして・・・

12月 12日

東シナ海 海中

「試作三号魚雷、装填完了」

「目標深度到達と同時に魚雷発射」

「目標深度まであと100!」

同時刻

———???———

「かん・・・・・・・・ちよう・・・・・・・・艦・・・・・・・・長・・・・・・・・艦長!!」

艦長?

「うえあ!!」

「どんな驚き方ですか・・・」

艦長？

「ここはどこなんだ？ 副長」

副長？

「（スルーですか）それが全く・・・」

艦長？

「分からない、か・・・とりあえず救難信号は発信してあるのだから？」

副長？

「ええ、次元の亀裂の発生とともに自動的に発信されますから・・・しかしここはどうにも時空座標が不安定なようで、全くと言っていいほど座標が安定していません」

艦長？

「そのことを皆は？」

副長？

「知っています」

艦長？

「そうか・・・」

ボタン！

「おい！！大変だ！！」

艦長？

「どうしたんだ？ 鹿島中尉？」

鹿島

「さ、鮫島艦長！お気づきに為られたのですか」

鮫島

「で、なにが大変なのだ？」

鹿島

「はっ！そうだった。外の映像を出してくれ！」

「はっ。外部カメラ起動、回線異常なし。映像信号をチェック・・・
チェック完了！映像中央モニターに出力します」

艦長

「ここはどこだ・・・」

同時刻 ドイツ帝国 ベルリン 上空

「こちら第一師団輸送部隊所属MH-50R『隆雄』目標を確保これより帰投する」

【こちら欧州派遣軍団司令部。内容を確認した。到達座標が変更された、これより到達座標を送信する】

「了解。そちらで何かあったのか？」

【兎玉司令の指示でな。一旦東に向かいオーデル川を北上しシチエチンを通りグディニアで海自と海軍の輸送船に乗ってサントペテルブルグに向かうそうだ、その後装甲車や戦車、自走砲、高機動車は陸路で、ヘリは輸送艦に乗せたまま海路で進むらしい】

「なるほど・・・ヘリの整備兵とかは同乗できるのか？」

【分かんが申し出れば大丈夫だろう】

「そうか、“お客さん”は作戦道理に？」

【ああ、ブリテン島で講和会談だ】

「分かった。到達座標受信完了、これより本隊に帰還する」

【了解、気を付けて帰ってこい】

以下《内はドイツ語とします。

《ベルリンが、燃えている・・・私の、ベルリンが・・・》

《焼かれた町は再興すれば良いのです。しかし人からの信用を再び得ることは非常に難しいのです。これから貴方がしなければならぬのはベルリンの再興と国民からの信頼を再び得ることです、経済的にも軍事的にも外交的にもです。

しかしそれはあまりにも膨大かつ困難です、あなた一人だけではできないでしょう。

そんなときはビスマルクのように優秀な人材を集め彼らに頼るのです》

《ビスマルクだと！！あのビスマルクのような愚図野郎にか！！》

《彼はとても優秀な人材でした。普墺戦争では前々から準備をし、7週間で決着をつけ、講和ではオーストリアに寛大なところを見せ反感を買わないように注意した。彼はそこが他の人間とは違った。それは彼が教養ある貴族の息子で在ったからです、しかし優秀な人材は貴族ばかりに居る訳ではありません。今まで優秀な人材が貴族しかいなかったのは子供に教育を施すことができるのは金のある貴族だけだからです、ですが皇帝自らが自らの政務の補佐をさせるために教育すればあなたにとって、いや、これからのドイツ帝国にとってより良いものになるに違いありません》

《日本人のお前に何が分かる！！》

《日本人だからです。今の日本の政治を執っているのは親が国民の平均収入しか無い様な一般的な国民の息子です、ですが彼は国からの援助金の援助金を貰いながら難関大学を卒業し政治家になった。これがどういう事かお分かりになりますよね？》

「おい！そろそろ合流ポイントに付くぞ！」

「分かった！《そろそろ本隊と合流します。その後あなたはバルト海、カテガント海峡、スカゲラク海峡と進み北海を横断しニユーカッスルへ入港しそこで大英帝国とロシア帝国と講和会談を行ってもらいます。よろしいですね？》」

《良いも悪いもそれしか方法は無いだろうに・・・》

《後は、あなたがどの様に彼らと交渉するか、です》

《・・・・・・・・》

同時刻 ドイツ帝国 ベルリン郊外

———欧州派遣軍団司令部———

「部隊回収用ヘリがベルリン王宮に接近！」

児玉

「これより30分後に砲撃を開始する。全砲門開け、目標ドイツ帝国首都ベルリン。各砲門一斉砲撃準備を開始せよ、なお指定弾薬を使用せよ。以上だ」

参謀

「世界で一番長い30分ですか・・・」

児玉

「まあ、10分程度の悪夢で終わるがね・・・」

参謀

「ところで指定弾薬とは？」

児玉

「目標上空で炸裂し子爆弾をばらま「クラスター爆弾！！」違うわい！・・・人の話は最後までよく聞かんといかんぞ・・・目標上空で炸裂し子爆弾をばらまき、爆発するのさ、大量のリチウムやカリ

ウム、ナトリウム、カルシウムとともにのう」

参謀

「リチウムにカリウム、ナトリウム、カルシウムですか？」

児玉

「中学でやらなかったのか？炎色反応じゃよ」

参謀

「なるほど」

――第一軍団火砲大隊第一自走迫撃砲隊――

部隊長

「指定弾薬を使用せよ・・・か」

副長

「どうかされましたか？」

部隊長

「いや、なんでもない。ただ、これで俺たちは帰れる」

副長

「そうですね、しかし平穩ってやつは麻薬のような奴ですね」

部隊長

「確かに、一度嵌れば逃れられなくなる。だが俺たちがそうなる訳にはいかないだろう？」

副長

「そうですね・・・しかし・・・」

部隊長

「人は・・・長い間群れることで危険から身を守ってきた。その群れの中心には女子供を、外側には男達が女子供を守るように囲ってきた。いつの間にか天敵はいなくなり、ぶつかり合った群れ同士が争うようになった」

副長

「人類の歴史ですね」

部隊長

「争いの歴史さ。其れしか記せない、愚かな生命体・・・」

部隊長

「本当に愚かだ」

副長

「争いが、ですか？」

部隊長

「それもある」

副長

「悲しいことにそれが人間っていう奴ですからね」

部隊長

「まあ、それを俺達が言うのもなんだがな」

副長

「違いありませんね」

八洲州空軍駐屯地

パイロットA

「山猫部隊がドイツ皇帝の身柄を確保したそうだ」

パイロットB

「今のところ他の同盟国からは何の通達もない」

A

「そりゃそうさ、宣戦布告した訳では無いからな」

B

「日英露三国秘密同盟第三項その一。英、露のどちらか、もしくは両方が戦争状態のとき要請があれば英国、もしくは露国のどちらかに戦力を提供する」

A

「そして、第三項その二。前項にて提供された戦力の指揮権を大日本同盟は得る」

B

「上手くやったもんだよな。さてそろそろ警邏飛行の時間だ」

A

「ああ、姫さんに文句を言われるのは勘弁だからな」

瑞穂州 沖合500海里

——護衛艦「榛名」艦橋——

副長

「欧州での最終作戦目標の確保が完了したそうですよ」

艦長

「ああ、やっと上陸できる」

「艦長、基地から作戦指令です。三号暗号でロックが掛かっているそうです」

艦長

「……見なくてはだめか？」

「だめ、でしょう」

副長

「腹を決めましょう、艦長」

艦長

「そうだな……内容が帰還命令だという事を信じて……」

艦長は渡された外部記憶端末を全士官に配給されているPDAに接続しロックを解除し指令書を二度、読むと手に持っていたPDAを落とした

副長

「艦長?!」

艦長

「明日からまた、訓練漬けだ・・・」

床に落ちたPDAには『長期間の航行ご苦労。今後3週間を期限としそのまま実弾訓練を開始せよ。詳しい訓練内容は追って通達する。

基地司令 鮫島 孝明 少将』と表示されていた。

―――?????―――

鮫島

「とにかく外の状況を詳しく知らねばならんな」

副長

「ええ、少なくとも酸素の有無に有害光線の検出、細菌の検査もせねばならないでしょう」

鮫島

「職員総出でどのくらいかかるだろうか」

副長

「急がねば大変な事に成りかねません。急がせましょう」

鮫島

「そうだな」

第十部 真実とは人が作り上げるものである

12月 12日

——東シナ海 海中——

「目標深度まであと50・・・40」

艦長

「魚雷室、注水開始」

「目標深度到達！」

艦長

「試作三号魚雷発射！急速潜航開始！」

副長

「艦長・・・」

艦長

「何も、言うな・・・艦内マイクを」

「はっ！」

艦長

「艦長の穴戸だ。全乗組員に伝える、今回の航海に関しては他言無用だ。いかなる事情があろうとも今日、この日一度も魚雷を撃っていないと証言してくれ。理由その他は深く探らない方がいい、今日ここで魚雷を撃った事を忘れてくれれば良いのだ」

三時間後

———首相官邸———

大高首相

「久しぶりの登場だな・・・」

西野経済産業大臣

「誰に言っているのです？」

高山内務大臣

「読者の皆様か作者のどちらかだな」

柊防衛大臣

「そういえば作者は水曜から長崎、福岡だそうだ」

金本財務大臣

「佐世保港に行けなくて残念がっていましたね」

佐藤厚生労働大臣

「飛行機での移動は初めてらしいな」

西野

「あの・・・みなさん作者とか読者とか何のことを？」

高山

「そういえば『日向』の行方は掴めたのか？」

柊

「それが全く。救難信号が発せられてから数分で反応が消滅しましたから、亀裂にのまれたようです」

大高

「しかし普通ならば転移装置で脱出しているはずだ」

金本

「何か引っかけありますな・・・」

佐藤

「確かに、何かの陰謀なのでは？」

西野

「乗員の反乱・・・救命信号を完璧に消すことが？」

柊

「それは無理だ。救命信号は艦の心臓部の機関と艦首、艦尾そして艦の頭脳のA Iの4か所にあり、次元航行艦の設計上、取り外すことは設備の整ったドックでも二週間かかる」

香山文部科学大臣

「それではいったいどこに『日向』は消えたというのだ！」

高山

「ここで議論してもしょうがない。次元航行艦『日向』の搜索は次元管理局の追跡と並行して行う。今はそれしかできん・・・」

小林外務大臣

「ところで対独講和会談ですが・・・当初の予定道理でよろしいですか？」

高山

「ああ、そうしてくれ」

西野

「これで少しは外貨が獲得できるかもしれん」

金本

「それにしても柊さん、どういう作戦行動をとったらこんなに作戦遂行予算を減らせるのですか？ あんなに派手に撃っておいて」

柊

「最後のあれはちょっと伝手を使ってね。燃料や食料は各地からかき集めた処分間近の物ばかりを使用したからね。来年度の新規購入まで持てばいいのさ」

高山

「そろそろ時間だな・・・」

西野

「そう・・・ですね」

香山

「後顧の憂えは早期に消して置くのが良い」

佐藤

「悪あればこそ弥栄する」

小林

「真実は闇の中に・・・」

高山

「これで良い・・・これで・・・」

「緊急ニュースをお伝えします。清国の北京にて次元の亀裂の発生が観測されました、政府は国家緊急権を発動し周辺空域と周辺海域を進入禁止区域に指定し海上保安隊の巡視船に出動命令が発令されました。繰り返します清国、北京にて次元の亀裂の発生が観測され政府が国家緊急権を発動。周辺空域と海域が進入禁止区域に指定されました」

第十部 真実とは人が作り上げるものである（後書き）

西野（以下略）

「ん？・・・ああ寝てしまったのか」

「さて、ここは？・・・森の中か？」

「いつから夢遊病になったんだ？ともかく携帯で連絡を」

『おかけになった番号はただ今使用できません』

「なんでだ？」

ひとり芝居は楽しい？

「なわけないだろう！！」

じゃあなんでやってるの？

「その前にお前は誰だ？」

簡単に言えば『神』だよ。

「頭。大丈夫か？」

次回から出番無し、まあ高山達に別れの挨拶ぐらいさせてやるよ

「なん、だと・・・」

「ここ？ここは『失われし都』ウェーカー」

「今回の北京消滅の陰には過去に一度だけ接触した、なんと言いま
すか・・・我々大日本同盟のように様々な世界を移動できる武装組
織、えー、自称次元管理局が関係しているものと思われます」

「政府は北京事件と同様の事件が起こらないように次元航行が単独
で可能な戦艦の建造案を国会に提出しました。なお現有戦力で対処
できるか？という事なんですが、これに関しましては、番組の中ほ
どでお伝えしたいと思います」

次回

「失われし都 ウェーカー」

第十一部 『失われし都』ウェーカー 前篇

国家緊急権が発動され海上保安隊に出動命令が下った頃

———??? 次元航行艦『日向』———

鮫島

「調査はまだ終らんのか？近藤中尉」

近藤

「大まかには終わっていますが、大気中に含まれる物質に不明な点があるため完全には終わっていません」

鮫島

「大気中に？」

近藤

「ええ、極僅かにエネルギー反応も観測されていますが・・・人体に悪影響はなさそうです。しかし『皇』が回答を保留していますので何とも言えません」

鮫島

「『皇』が、か？」

近藤

「ええ。『皇』が、です」

鮫島

「ならば、安心だろ」

近藤

「そうですね・・・って、艦長！人の話聞いていましたか？！」

鮫島

「ああ、聞いていたぞ」

近藤

「ならば何で」

鮫島

「『皇』は回答を保留しているが人体に害はないのだから？」

近藤

「ええ、今のところ有毒成分は観測されていません。しかし・・・」

鮫島

「どちらにしろ、このままここに居ても何も変わりはないさ。それに君自身その物質が人体に悪影響を及ぼすか確かめたいのだから？」

近藤

「ええ、まあ・・・しかし他の乗組員の安全が第一ですし・・・」

鮫島

「ふん、それでも自他共に認めるマッドか？この程度で迷っているぐらいでは“あの”后月博士に幻滅されるぞ？」

近藤

「・・・そこまで言うのであればやってやりましょう」

鯨島

「（フッ、計画どおり・・・）」

――――皇――――

第貳世代型次元航行艦搭載型AⅠ『皇』は大同盟海軍と海上自衛隊の艦艇に搭載されている人工知能『月光』を次元航行艦用に調整したものである。主な役割は索敵や飛翔物体に対する自動攻撃を始めダメージコントロールの指示、次元跳躍システムの操作、次元座標の特定、その他複雑な計算や乗組員の健康チェック、食料の備蓄の確認など多岐に亘っている。

――――月光――――

イージスシステムに代わる管制システムとして作成された。現時点では海軍・海自以外に空軍・空自と陸軍・陸自のヘリコプターに使用されている。

空軍・空自は独自に開発した『月詠』と融合を果たした為にパイロットとの会話まで実現した。ちなみにCVはツンデレから妹、お姉さま、お兄様と複数あるらしい。

余談だがヤンデレは無い

二時間後

――――? ? ? ?

次元航行艦『日向』

艦橋――――

鮫島

「艦長の鮫島だ、調査の結果を発表する。近藤中尉の調査の結果、人体に悪影響を及ぼす可能性のある部室は検知されず、一応艦外は安全である。という結果が出た、しかし次元座標が安定していない事を踏まえると、この世界は次元空間を漂っていると考えられる。突然、次元の亀裂ができるかもしれないし、急に崩壊するかもしれない。

そのことを考えると次元航行のできる艦内にとどまることが一番だと思われる、しかし我等には時間がない。艦内に積み込んだ食料は後一月分しかない。早急にこの世界から脱出するには今から動き出さないと間に合わない可能性がある。無事に帰還するには外に出るしかない、そこで勇士を募りたい。我こそはというものは熟考の後、今から二時間後、艦橋まで来てもらいたい。以上だ・・・」

副長

「誰かいますかね？」

鮫島

「誰かがやらなくては全員、野垂れ死にだよ」

副長

「そうですね・・・」

二時間後

———???
次元航行艦『日向』 艦橋———

鮫島

「15名か・・・予想以上だな。しかし佐野、お前結婚したばかりだろ？いいのか？それに郷田、お前の娘はまだ生後一か月だろう」

佐野

「ええ、座して死すよりは良いと思ひまして」

郷田

「生まれた子供に武勇伝くらい伝えたいじゃないですか」

鮫島

「死んだら元も子もないだろうに・・・」

佐野

「死ななければ良いだけの話ですよ・・・それに何かしていないと落ち着けなくて」

郷田

「そうですよ、艦長」

鮫島

「馬鹿共が・・・仕方ない、艦長命令を傳達する船外に出ての調査を命じる。隊長は佐野、副隊長に郷田を指名する、一時間の報告を厳守すること、銃火器の所持は各自の自由とするが危険ならば帰還すること、それ以上行けない場合もだ。何か発見したら自分達で決めますに報告すること。そして、必ず生きて帰ってくることを以上だ！」

近藤

「一応、各種医薬品を用意した、急造で効くかどうか分からないが持って行ってくれ。それと有毒ガスは観測されなかったがガスマスクを装備して行ってくれ」

副長

「銃火器は砲雷長から受け取ってくれ。それと各種携行型レーダーも持っていくように」

「「「「「はっ!」「」「」」」」

副長

「行ってしまいましたね」

鮫島

「吉報に期待するしかないさ。さて、皇に空間座標の特定を急がせろ! 何としても脱出するんだ!」

副長

「はっ!」

鮫島

「にしてもどこかで見たような風景だな・・・」

副長

「確か・・・高校時代にやったゲームの中に似たような感じの街が出てきました」

鮫島

「あの街のように廃墟になったか?」

副長

「ええ、人々は地面の中に潜って生活していました。まあ此処に住んでいた人々が生きているとは考え辛いですが・・・」

鮫島

「そうだな・・・」

一方、調査隊は『日向』を離れ廃墟となった街にいた

佐野

「・・・不気味な所だな」

郷田

「確かに、人の姿どころか猫の子一匹いないぞ・・・」

隊員A

「何十年も前に放棄されたような感じだな・・・」

隊員B

「人工物の殆どが苔が生えてら・・・電子機器は生きちゃいないな」

郷田

「収穫なしの可能性が高いな・・・」

佐野

「次の定期報告の時、艦長に指示を仰ごう」

郷田

「そうだな」

20分後

———???
次元航行艦『日向』 艦橋———

鮫島

「どうだ？何か分かったか？」

オペレータ

「いえ、それが・・・先程から『皇』が回答を渋ってしまして・・・」

鮫島

「回答を渋るだと・・・」

オペレータ

「元来『皇』は次元航行艦という封鎖空間での乗組員の精神状況に応じて回答を保留することがあります」

鮫島

「確か艦長室のアクセス用端末から閲覧できたな？」

オペレータ

「はい、艦長室のアクセス端末で『皇』が出す質問に答えられれば・・・しかし『皇』が閲覧を拒否した場合誰も見る事はかありません」

鮫島

「それほど見せたくはない結果が出た、という事か・・・」

———????? 調査隊———

調査隊は廃墟となった街を隊長の佐野を先頭に数メートルの間隔を開け一列に並んで探索していた。

隊員C

「隊長！」

佐野

「どうした？」

隊員C

「あそこにだけ、草が踏み倒されています。それにかなり場違いな金属製の扉まで・・・」

佐野

「確かに・・・『日向』に打電！我、不審な扉を発見。指示を仰ぐ。以上！」

———????? 次元航行艦『日向』 艦橋———

オペレータ

「調査隊から入電！我、不審な扉を発見。指示を仰ぐ。以上です！」

鮫島

「・・・・・・・・」

副長

「？艦長、どうなさいましたか？」

鮫島

「ん？いや・・・なんでもない」

副長

「そうですか・・・調査隊からの報告ですが・・・どうなさいますか？」

鮫島

「そうだな・・・隊長の佐野とは通信できるか？」

オペレータ

「はい、大丈夫です。今繋がります」

佐野

【佐野です。】

鮫島

「不審な扉、と報告にあったが具体的に言うところのようなものだ？」

佐野

【ええ、街自体が廃墟と化しているのに対しそれだけ明らかに綺麗なのです、そして周りは明らかに誰かが通っているようなのです。その証拠に草が扉に向かって一直線に踏み固められています】

鮫島

「そうか・・・その扉、開けられそうか？」

佐野

【そうですね・・・扉の近くにカードリーダーのようなものが付いていますので何とか成るか？・・・】

鮫島

「解った、侵入を許可する」

佐野

【分かりました】

———???
調査隊———

艦長と通信を終えた佐野は扉の周りを調べていた

郷田

「かなり頑丈そうな扉だな・・・」

隊員B

「爆破しますか？」

佐野

「いや、その必要はなさそうだ」

郷田

「どうしてだ？」

佐野

「これを見ろ」

佐野は扉の横のカードリーダーの下を指差した

郷田

「こいつは・・・カードキーか？」

佐野

「何も書かれていないが多分そうだろう」

隊員B

「でも何でこんな所に落ちていたんでしょうか？」

郷田

「もしかしたら俺たちのように次元の亀裂に吞まれて此処に来た者の為だったりしてな」

佐野

「だとしたらこの街は次元の亀裂に吞まれてからしばらくは人が住んでいた、という事になる。しかしこの街の有様を見るとそれもあり過去の様だぞ」

郷田

「この扉の向こうに何かあることを信じよう」

第十一部 『失われし都』 ウェーカー 前篇（後書き）

火曜から中間考査のためしばらく更新を控えさせていただきます。
読者の皆様にはまことにご迷惑をおかけいたしますが、これからも
『大日本同盟』を宜しくお願い致します。

第十二部 『失われし都』ウェーカー 中編

次元航行艦『日向』の独断専行に関する報告書

隊員Aの証言

「ええ、あの時はそれが一番だと皆が思っていましたから・・・それに・・・そうするしか道は無かったんです。近藤中尉？ええ、確かに近藤中尉は自他共に認めるマッドでしたよ？本人も誇らしげにしていましたし・・・。確かに時々暴走して周りに迷惑をかけていましたが・・・ええ、艦長が説得していました、マッドの美学がどうか・・・」

隊員Bの証言

「確かにあの施設は異様でした、しかし実際に中に入ったのは隊長と副隊長の二人だけでしたので・・・中で何があったのかは私を含めた隊員の全員が知りません・・・ええ佐野中尉と郷田中尉です。確か帰還報告の時に艦長と副長、あとAIの『皇』には報告していたと思います。あの時は調査隊の皆が疲れ果てて各自、自室で休んでいましたから・・・元の世界に戻れると聞いたのはかなり後でしたよ・・・休んでいる間に何があったのかは・・・ええ今となっては知っているのは艦長とAIの『皇』だけでしょうね、佐野中尉や郷田中尉はその後の動乱で死亡が確認されていますから・・・」

隊員Cの証言

「扉を発見したのは誰かって？私だよ・・・そうあの時調査隊の皆は隊長を先頭にして進んでいた、私？私は隊長の二つ後ろだったよ。うん、前から3番目だ、私の前に居たのは・・・確かB・・・だっ

たかな？不思議なことにあまりよくは覚えてはいないんだ・・・私を含め調査隊の皆が・・・まあ、あの時は全員恐る恐る進んでいたからね・・・何か気になる物があると立ち止まって注視していたからいつの間にか前の奴を抜かしていることもあったようだ・・・」

次元の亀裂に吞まれた次元航行艦『日向』から出発した調査隊は佐野中尉（当時）を隊長郷田中尉（当時）を副隊長として15名で『日向』を出発し一時間以内に目標物αに到達。

佐野中尉（当時）はその場で『日向』に指示を仰ぎ当時の艦長である鮫島中佐（当時）が潜入を許可。その後調査隊は佐野中尉（当時）と郷田中尉（当時）が扉を開け潜入、それ以外の隊員は入り口を警備していたことが隊員たちの証言とA I『皇』の航海日誌に記されているが施設内で何があったのかは記されていない。このことを知る者は現在では鮫島中佐（当時）しかない模様。

よって次元航行艦『日向』の独断専行に対する事後処罰は慣行できないものとする。

裏側に何か手書きで書き加えられているようだ・・・

追記

鮫島中尉は数年前から行方不明になっている模様、よってこの報告書は第一級特秘文書に指定する。

大日本同盟海軍元帥 佐藤 孝明

———????? 調査隊———

郷田

「で?どうするんだ?」

佐野

「何をだ?」

郷田

「中に入る人間だよ・・・もしかして・・・」

佐野

「・・・ばれたか」

郷田

「あほか!! お前自分が方向音痴だってこと分かってんのか?!」

佐野

「あっ!! 馬鹿!! 声がでかい!!」

郷田

「てめえもでけえよ・・・十分」

隊員

「隊長・・・」

佐野

「悪かったな！方向音痴でさ！！」

郷田

「さて・・・真面目に話し合おう」

佐野

「そうだな・・・この中で陸自のレンジャー試験に受かった者はいるか？」

郷田

「おいおい、お前じゃないんだから・・・海軍と海自出身者ばかりの『日向』の乗組員に居る訳が無いだろう・・・」

佐野

「いないようなら仕方ない・・・郷田行くぞ！！後の者はこの扉の周囲を警戒していきくれ、あと定時連絡もしっかりするように。以上だ！」

郷田

「なんで俺もなんだ？」

佐野

「お前もレンジャー試験受かっているだろうに」

郷田

「そうだな・・・お前に勝手に志願書を書かれたんだった・・・」

佐野

「というわけだ、時間がないな・・・さっさと行くぞ！」

佐野

「と言って。中に入って早一時間・・・ここはどこだ？」

郷田

「お前が勝手に進むからだろう!!」

佐野

「それじゃあ、どっちに行くのが良いんだよ!!」

郷田

「なあ・・・お前・・・まだ気付いて無いのか？」

佐野

「何にだ？」

郷田

「ずっと、同じところをグルグル回っていることに」

佐野

「え？」

郷田

「もういい・・・こっちだ、付いてこい（なんで俺が後ろに付いて来てない事にも気付いて無いんだろうか？）」

佐野

「は？なんでそっちなんだ？」

郷田

「さっきもそこ通っただろうが・・・」

郷田

「手当たり次第に部屋に入っただが・・・ここで最後の様だな」

郷田の前には他の部屋と同じ金属製の扉が佇んでいる

佐野

「にしてもここはどういう構造になっているんだ？」

郷田

「さあな、とにかくかなり地下深い所にあることは確かだ・・・これじゃないか・・・」

佐野

「10分ぐらいだったか？エレベーターに乗ってたのは」

郷田

「とりあえず、ここに何もなかったら一旦上に戻ろう・・・っと、ようやく開いた」

佐野

「さっきから何やってたんだ？」

郷田

「所々で拾ったカードキーを試していたんだ・・・」

佐野

「いつのゲームだ？」

郷田

「落ちていたんだからしょうがないだろう、さあ早く入ろう」

佐野

「何がしょうがないんだ・・・」

郷田と佐野が部屋に入るとそこにはアルミ製だろうか極有触れた事務机と椅子、本棚いっぱいファイルと科学誌のようなものが乱雑に置かれていた

郷田

「研究室の様だな」

佐野

「ああ、収穫は無さそうだな・・・「そうでもないわよ？」誰だ！
！」

カチャ

郷田は愛銃であるH&K SOCOMを引き抜き構えた、佐野は肩に掛けていたM16A1のセーフティを外し周囲を警戒した

???

「まあ警戒しないで。ね？何も危害は加えないわ」

佐野

「姿を見せない奴に言われたくはない」

佐野は案外冷静に答えた

???

「あら、そうだったわね」

声の主は女だろうか、今気が付いたと云う様な口振りだった。

その時突然、机の上に数字の配列が現われ椅子の足元が光りだした

???

「初めましてお二人さん」

郷田

「これは!?!?!」

佐野

「3次元映像・・・ディスプレイもなしに!!」

郷田

「大同盟でさえ研究中なのに・・・」

???

「さて、姿を現したわよ？それと、その物騒な物を下げてくれる？」

佐野

「ああ、そうだな。だが、幾つか聞きたい事がある。それに答えて

貰っても？」

???

「ええ、いいわよ」

佐野と郷田はお互い顔を見合わせ頷くと銃をホルスターへと収めた

郷田

「さて、それじゃあ質問だ。まず一つ目、ここはどこだ？二つ目、君は誰だ？三つ目、この世界から人が消えたのは一体いつだ？四つ目、ここは何のために作られた？さあ答えて貰おう」

第十二部 『失われし都』 ウェーカー 中編（後書き）

困った。

大高

「何がだ？」

また来週は更新できなくなる

大高

「またか？ いったい今度は何なんだ？」

インターシップと文化祭

大高

「インターシップ？」

一般企業に数日間お世話になって生徒に社会を学ばせよう。ってことだ、まあ実態は学校側がうちにはこんな生徒が居ますっていうアピールと生徒の就職先の確保だ

大高

「70年だったか？」

ああ、おかげでいろいろなところに先輩・大先輩がいる。お世話になる企業もそうらしい・・・

大高

「下手な事は出来ないな」

ああ、自分たちだけじゃなく先輩や後輩達にも影響が出かねん

大高

「今の就職状況はお世辞にも良いとは言えないからな」

総理大臣としてはこの状況どう切り抜ける？

大高

「第一は農業だ、収穫量に応じた補助金の給付。これにより耕作放棄地の減少、農業従事者の増大による失業率の低下が望める。第二は今の日本の人口での大半は60歳以上の高齢者だ、これは事実しかし人間には寿命という逃れることのできないものが存在する。よって40年後にはその殆どが死亡しているはずそうすれば今までかかってきた年金や医療保険の支払いが減少、この減少分を今の十代の子供の世代での育児補助、出産補助とする。

その中にはもちろん産婦人科などの医療機関への助成金も含まれている。これだけやればどうにかなるはずだ、あとはその時その時の状況に応じた政府の対応だ。

なるほど・・・実際に君達がやっている事だな

大高

「そうだ、何か問題でも？」

いいや・・・しかしそれだと第二次ベビーブームの分はどうするんだ？

大高

「タバコ税と官僚や政治家の給料の天引き」

少なくともどれぐらい？

大高

「状況にもよるが3割は減らしたい」

国民は国の為、国は国民の為、政治家と官僚は国と国民の為と言った所か？

大高

「国民に親しまれる指導者というのは国と国民の為に思って行動できる人のことだ、ドイツのヒトラーのような」

確かに内政面では良かったかもしれないがそれを打ち消す事をやりすぎた

大高

「外に敵を作ることでは内は固まるが孤立するその国を必要とする国以外からな」

どこかの国のように？

大高

「あそこはもう終わっているだろう、新興国特有の発展はそろそろ鳴りを潜め始めるに違いない」

数十年前までは戦争で豊かになったが今では逆に衰退の可能性もあるからな・・・よほどの事が無い限り発展は見込めない、か・・・まあ安定を衰退と言うのかは微妙なところだが

大高

「発展と衰退・・・経済は白と黒のように両極じゃないさ」

人間の成長のように？

大高

「そうやって滅んだ国があるのは確かだぞ、しかし島国はなかなか滅びにくいという特性を持っているからな」

海峡一つで影響力は変わるからな・・・

大高

「まあ、今までののは全部机上の空論でしかない・・・政策のあたりは検討の余地はあるだろうがな」

大高

「そういえば西野はどこに？」

知らん

大高

「そうか・・・」

ああ、この間登場人物を一人消したぐらいしかしていない

大高

「おいこら！」

第十三部 『失われし都』 ウェーカー 後編（前書き）

書き貯めして置いてよかった・・・

第十三部 『失われし都』 ウェーカー 後編

???

「ここは、『失われし都』ウォーカーよ、そして私はこの施設の管理用AI、タイプ006P-PT05でこの世界から人が消えたのは・・・そうね、数十年以上前ね。ここはあなたたちの様な人為的に次元航行をしているモノの為に作られた各種技術の研究施設、目的は次元管理局への復讐とその為の種を蒔くこと」

郷田

「やはりAIだったか・・・」

佐野

「それよりも反管理局組織がこんなところに在ったとは・・・それでは質問を一つ増やそう、なぜこの世界から人が消えた？」

006P-PT05

「自然消滅よ」

佐野

「自然消滅？種の保存ができなくなったのか？」

006P-PT05

「いいえ、科学者たちは自分のクローンを作って切り離された世界へと戻るために研究していたわ。他にもこのまま生活していくのに必要な技術とかも研究していたわ。だけれどそれにも限界が来たの、テロメアが短いというクローン人間の欠点が出てきたのよ。結果科学者たちは私を生み出し何とかこの施設を維持させようとしたの、だけど私が目覚めた頃には誰一人として生き残ってはいなかったわ」

郷田

「なるほど、クローンか……そういえば何年間くらい人が生きていたんだ？」

006P—PT05

「んーと……確か、こっちに来てすぐにクローンが創られたのだから、百年くらいね」

郷田

「なるほど、かなりの間研究が続けられていたのか……」

006P—PT05

「そういえば、あなた達はどこの誰？」

佐野

「ん？俺たちは大日本同盟軍特務軍団、次元航行艦隊第一艦隊所属、次元航行艦『日向』の乗組員の佐野嵩平、階級は中尉だ」

郷田

「同じく、郷田博正、階級は中尉だ」

006P—PT05

「大日本同盟って連邦国家？」

佐野

「いや、元は3カ国の違う歴史を歩んでいる大日本帝国という国が他の知的生命体のいない世界に転移した結果。混乱する経済や国内を安定化させるために軍事、経済などで協力関係を築こうとしたのが元だ。次元転移技術は国内が安定し始めて暫らく経った時にとあ

る博士が提唱し、実験した結果生み出された物だ」

006P—PT05

「という事はかなり軍事力を持っている？」

郷田

「ああ、さっき出てきた次元管理局と真っ向から戦争をしたとしても引き分け以上に出来る程の戦力を有しているが？」

006P—PT05

「反応弾って保有している？」

佐野

「S弾頭弾ならあるが？」

006P—PT05

「S弾頭弾？」

佐野

「S弾頭のSはSpace—time temporal destruction—時空破壊—の頭文字だ。信管もしくは遠隔操作により起爆、起爆と同時に半径500kmの時空の歪みを作りその次元を破壊してゆく。ただの大量破壊兵器だ」

郷田

「管理局との戦争で使うのかどうかは未だ解らんがな」

006P—PT05

「管理局と戦争って正気！？」

郷田

「S弾頭弾は一撃必殺の為の武器だ。使われればその次元が原形を留めないほど破壊され、何人たりとも立ち入る事の出来ない空間になる。そうすれば戦争なんて言うてはいられなくなる、それに本国には次元航行型の艦艇が年間10隻のペースで建造されている。全ての建造ドックを使えば二倍以上に成るのは確かだ」

佐野

「同型艦10隻以上に囲まれても壊滅されることが出来る程の武装と防御機能が付いている。それに水上艦艇千隻、航空機三万機、地上総兵力四十万と水上艦艇千隻、航空機二万機、地上総兵力三十万の防衛部隊が本国に待機している」

006P—PT05

「其れだけいても魔法には敵わないわ」

郷田

「魔法？魔法があるのか!!」

佐野

「だとすると戦略の一部を変更する事になるな・・・」

006P—PT05

「この世界の人達も魔法によって虐げられていたわ・・・」

郷田

「対抗する術は何もないのか？」

006P—PT05

「無い事は無いわ、ただどこかなり効率が悪いし・・・それに人道的

観点からも賛成はできないわ。もしあなた達が試すので在らば、止めはしないわ」

郷田

「どういった方法なんだ？」

006P—PT05

「人体に埋め込むのよ・・・魔力発生装置をね・・・」

佐野

「人体改造・・・だが他の方法も研究していたんだろう？」

006P—PT05

「ええ、対魔法装甲や魔法キャンセラー、魔法吸収装置など成功した例もあるけど・・・」

佐野

「失敗も多くある・・・という事か。だがどこを見てもそんなものは無かったぞ？」

006P—PT05

「ええ、この施設の地下に隠匿されているみたい。ところで貴方達はこれからどうするの？」

郷田

「一旦、『日向』に戻って指示を仰ぐ。そういえばこの次元から脱出することはできるのか？」

006P—PT05

「ええ、かなりの高エネルギーがあれば。たとえば核融合炉とか・・・」

・
」

郷田

「確か『日向』の動力装置は補助の縮退炉が一機と融合炉が二機だったよな」

佐野

「ああ、融合炉だけでも艦の運行はできるから特に問題は無い筈だ」

006P—PT05

「それならば帰還は容易なはずよ。かなり高度な演算技術が必要だけれども・・・」

佐野

「ならば、一旦『日向』に戻って再び赴けばいい」

006P—PT05

「それじゃあ効率が悪いわ、この機の一番下の引き出しを開けて頂戴」

郷田

「一番下の引き出し？」

郷田は戸惑いながらも機の引き出しを開けた

佐野

「これは、ノートパソコン？」

006P—PT05

「これが私の本体よ。それを持って地下に行きましょう、そこには

此処で開発されたものが大量に保管されているわ」

第十三部 『失われし都』 ウェーカー 後編（後書き）

大高

「で？西野はいったい何処に行ったんだ？」

・・・くかー

大高

「おい！作者！！」

・・・すぴー

大高

「起きろ！！」

ぐーすかぴー

大高

「起きてるだろ！確実になあ！」

・・・煩い

大高

「西野は！ 今！ 何処にいるんだ！？正直に言え！」

次あたりで登場人物とかの紹介をするから・・・

大高

「そうか・・・って寝るな！続きを書け！」

良いだろ今月の半分が行事で潰れたんだから・・・

大高

「もう今月も終わりだろうが！」

明日は学校の文化祭なんだ・・・寝かせろ

大高

「情けない・・・その程度で」

小学生の相手は疲れるんだ・・・

大高

「まったく今度は何をするんだ？」

・・・

大高

「ん？」

・・・

大高

「寝てやがる・・・」

次回

「～番外編～設定資料？ 今までの登場人物や兵器など」

〈番外編〉 登場人物紹介（前書き）

順不同、敬称略ですが見やすくするため出身国と役職や所属で固めてあります。

〔番外編〕 登場人物紹介

序章

・片山有朋

大日本同盟統合内閣総理大臣

・近藤克彦

旧日本国内閣総理大臣

・衛藤

大日本同盟統合内閣総理大臣

・浦部

大日本同盟統合内閣財務大臣

・楠田

大日本同盟統合内閣国防大臣

・宮野

大日本同盟統合内閣外務大臣

・前橋

大日本同盟統合内閣経済産業大臣

・大統領

アメリカ合衆国大統領

第二章

・山村

大日本同盟統合内閣外務大臣

・大高

大日本同盟統合内閣総理大臣

・西野

大日本同盟統合内閣経済産業大臣
世界の心理を知らない男

・高山

大日本同盟統合内閣内務大臣

・柊

大日本同盟統合内閣国防大臣
陸軍大将

・金本

大日本同盟統合内閣財務大臣

・佐藤

大日本同盟統合内閣厚生労働大臣

・香山

大日本同盟統合内閣文部科学大臣

・小林

大日本同盟統合内閣外務大臣

・ニコライ二世

ロシア帝国皇帝

・セルゲイ・ヴィツテ

ロシア帝国首相

・ドイツ帝国皇帝

・児玉

陸軍大臣

欧州派遣軍団司令

・佐藤孝明

大日本同盟海軍

海軍元帥

・鮫島孝明

海上自衛隊第四護衛艦隊の所属基地司令

少将

・鮫島艦長

大日本同盟軍特務軍団次元航行艦隊第一艦隊次元航行艦隊

次元航行艦『日向』艦長

中佐

・副長

大日本同盟軍特務軍団次元航行艦隊第一艦隊次元航行艦隊
次元航行艦『日向』副長

・近藤

大日本同盟軍特務軍団次元航行艦隊第一艦隊次元航行艦隊
次元航行艦『日向』乗組員

技術中尉

M A D

・鹿島

大日本同盟軍特務軍団次元航行艦隊第一艦隊次元航行艦隊
『日向』乗組員

中尉

・佐野

大日本同盟軍特務軍団次元航行艦隊第一艦隊次元航行艦隊
次元航行艦『日向』乗組員

調査隊隊長

中尉

・郷田

大日本同盟軍特務軍団次元航行艦隊第一艦隊次元航行艦隊
次元航行艦『日向』乗組員

調査隊副隊長

中尉

・パイロットAおよびB

八洲州空軍基地所属パイロット
なぜか裏事情を良く知っている

・艦長

海上自衛隊第四護衛艦隊

護衛艦『榛名』艦長

・副長

海上自衛隊第四護衛艦隊

護衛艦『榛名』副長

・穴戸

試作三号魚雷を発射した潜水艦の艦長

・ブルシロフ

ロシア帝国軍將軍

・006P-PT05

佐野と郷田が研究所で遭遇した人工AI

本体はノートパソコン型量子演算機

〔番外編〕 登場、未登場兵器紹介

序章にて登場した兵器

陸軍

戦車

- ・ 10式

海軍

戦艦

- ・ 日本武尊
- ・ 日本武尊改
- ・ 超大和

空母

- ・ 信長
- ・ 蜃気楼

イージス艦

- ・ やまと
- ・ こんごう
- ・ 不知火
- ・ ながと

巡洋艦

- ・ 阿武隈

護衛艦

・家康

潜水艦

・亀天

補助艦艇など

・秀吉（工作艦）

超兵器

・リバイアサン（戦艦）

・アラハバキ（戦艦）

・ハリマ（戦艦）

・ヴォルケンクラッツァー（戦艦）

・ムスペルヘイム（双胴空母）

・デウアルクレイター（揚陸艦）

・アルケオブテリクス（爆撃機）

戦闘機

・天震

・蒼海

空軍

爆撃機

・富嶽

第二章で新たに登場した兵器

陸軍

戦車

- ・ 87 式

自走榴弾砲

- ・ 88 式

自走迫撃砲

- ・ 88 式

輸送ヘリ

- ・ MH-50R
(隆雄は愛称)

海軍

戦艦

- ・ 八雲
- ・ 出雲
- ・ 吾妻

空母

- ・ 河内
- ・ 摂津
- ・ 薩摩
- ・ 不破

イージス艦

・敷島

・旭日

・初瀬

・三笠

・香取

・鹿島

護衛艦

・榛名

爆撃機

・飛影

・天震

空軍

爆撃機

・彗星

特務軍

次元航行艦

・日向

未登場だがその内出したいもの

海軍

戦艦

・大和

・三笠

・薩摩

イージス戦艦

・持国天

・増長天

・広目天

・多聞天

護衛艦

・綾波

・敷波

・伊吹

・初春

・島風

・若葉

・深雪

・藤波

イージス艦

・金剛

・比叡

・高尾

・大淀

・鞍馬

・高千穂

空母

・豪龍

・霸龍

・和泉（へり空母）

潜水艦

・蒼龍

・王龍

超兵器

・阿修羅（戦艦）

・敷島（戦艦）

・香取（戦艦）

・荒神（戦艦）

・月詠（戦艦）

・不動（空母）

・不破（空母）

・不倒（空母）

・不屈（空母）

・海龍（潜水艦）

・天龍（潜水艦）

戦闘機

・烈風

対潜へり

・MH-40S

〈番外編〉 登場、未登場兵器紹介（後書き）

空軍が爆撃機しか出てない・・・

第十四部 帰還（前書き）

長らくお待ちしました、やっと更新できました。

第十四部 帰還

佐野

「かなり長い間エレベーターに乗っていたようだがどれぐらい地下にあるんだ？」

006P—PT05

「さあ？施設の保安上、私にはその類のことは全く知らされていないわ。さてここよ、あの部屋を開けたカードキーは持ってきているわね？」

郷田

「ああ、持ってきている」

006P—PT05

「それじゃあ、扉の横のカードリーダーの下に差込口があるから。そこに差し込んで頂戴」

佐野

「何とも分かりにくい所に在るな」

006P—PT05

「保安上の問題よ。開いたわね、さて中のモノ貰っていきましょう」

扉が開くとそこには大小さまざまな大きさがある装置や何かの試料、

実験の産物だろうか金属製の板などが数百ほど転がっていた

郷田

「どうやってだ？ざっと見まわしても人間二人程度じゃあ何年かかるか分からんぞ」

006P—PT05

「大丈夫よ、この倉庫は特別で丸々次元空間に収納できる様になっているから。だけどそのためにはこの倉庫の中から操作しなくちゃならないの。確かこの辺りに操作作用のコントローラーが・・・」

そういつて006P—PT05は雑多に置かれていた機械類を眺めていた

郷田

「そのコントローラーはどんな形をしているんだ？」

006P—PT05

「赤いスイッチが一つだけ付いているやつよ」

佐野

「もしかして・・・これのことか？」

そういつた佐野の手には赤いスイッチが付いた何とも無骨なものが握られていた

006P—PT05

「ええ、それよ。さあ入り口に戻ってからスイッチを入れて頂戴」

佐野

「なんで入り口に戻るんだ？」

006P—PT05

「出れなくなるわよ？それでもいいの？」

佐野

「それは勘弁」

研究施設 入り口

隊員A

「隊長たちは未だ帰ってこないのか？」

隊員B

「もう三時間は経ったぞ・・・」

隊員C

「どうする、中に探しに行くか？」

隊員D

「それじゃあ、『日向』に通信を・・・」

隊員A

「ん？足音が聞こえるぞ！！」

隊員B

「逆光で姿が見えないな・・・誰かライトを持っていないか？」

次元航行艦『日向』 艦長室

佐野

「以上で帰還報告を完了します」

鮫島

「それで、帰還報告にあったのがこれか？」

佐野

「ええ、そうです。そして次元空間に隔離された倉庫へのアクセス装置がこちらです」

そういつて佐野は自分のポーチから四つのトランシーバーのようなものを取り出した

鮫島

「それはどうやって使うんだ？」

佐野

「これは四角形をつくる様に壁に取り付けこのカードキーを差し込めば使うことができます、今ここでやりましょうか？」

鮫島

「ああ、頼む」

近藤

「なるほど！なるほど！そういう事か！！あっはっはっはっは
！」

他の職員

（（（（（艦長！助けて！）））））

12月14日

―――記者会見場―――

大高

「みなさん、おはようございます。まずは国民の皆さんにお知らせしなければならぬ出来事が幾つか起きてしまいました。まず一つ目は清の北京で次元の亀裂が観測され北京が消滅したこと、二つ目は試験運行中であつた次元航行艦一隻が行方不明になっていること、この次元航行艦は数年前から度々、軍や自衛隊の観測レーダーに移りこんでいた不審なエネルギー体の搜索の為に、単独で次元航行並びに転移を何度でも繰り返すことができるように縮退炉を搭載した艦艇です。その艦艇が次元航行中に突然消え去りました・・・いえ、

正しくは突如現れた次元の亀裂に呑みこまれました。

ですが国民の皆さんには解っていると思いますが次元の亀裂はそれ自身には物体を吸い込む力はなく、自ら飛び込まなくては飲み込まれることはありません・・・更に人為的に起こした次元の亀裂はどこかの次元世界に漂着する事が無いことは実験で明らかになります。我々がどの様に転移しているのかについては国民の皆さんに説明する必要はないでしょう、このことを踏まえ至った結果は何者かによって人為的に次元の亀裂が起き、そして次元空間のどこかで！ 今も！ そう、今も漂流しています。

更に、清の北京で観測された次元の亀裂も人為的に起こされたものであることは昨日の記者会見でも発表された通りです。さらに北京消滅の少し前にも謎のエネルギー体が観測されています、我々はそのエネルギー体が北京消滅の原因と断定し、そのような事ができるものを探しました、しかしこの世界ではそのようなことができるのは我々のみ、ですがこの世界以外の世界を含めると一つだけ、そうたった一つだけありました。

その名も『次元管理局』彼らは管理していると言っていますがその中身は魔法という非科学技術の独占による一方的な支配、いえ唯の帝国主義的侵略です。彼らは我々が持つような通常兵器を質量兵器と呼びさまざまな次元世界に強制的に関与しすべての通常兵器を破壊させ自らの勢力圏内に無理やり組み込んでいます。

それに抵抗した文明は・・・いやこれ以上は私には到底語る事の出来ぬことだろう、それほどのことまで奴らはやっていることが特殊潜入部隊の勇敢な兵士たちが暴いてくれた。全国民に私は問う！ このまま奴等の暴挙を許し我々までその毒牙にかかり滅亡を迎えるか否か！」

その時、柊国防大臣が大高首相の下に駆け寄ってきた

柊

「総理！緊急の用件が・・・」

大高

「なんだ？・・・なに？　で？　今何処に居る・・・そうか・・・
・・・解った」

柊

「それと例の“アレ”を捕捉しました」

大高

「よし、国民には私から説明しておく」

柊

「ええ、それでは」

大高

「たった今、吉報が入ってきました。行方不明になっていた次元航行艦が無事に大和州芦張港に帰港しました、乗組員に怪我は無いそうです。が多少疲労しているとのことですよ」

第十四部 帰還（後書き）

やつと管理局が絡んで来ましたね。

ちなみに自らの国家の利益の為の虚ならばこの国家は許容します。そして他国に同様のことをされると猛抗議します。

まあ、これが普通なんですからね・・・

第十五部 終わりの始まりの始まり

さて次元航行艦『日向』が帰還したところで第一次世界大戦いや、欧州大戦を少し振り返ろう。

欧州大戦では英仏露の三国連合対独墺伊の三国同盟、そして日英露の条約同盟を連合に墺、オスマン帝国、ブルガリア王国を同盟に加えた構図であった。

しかし、大同盟は同盟国に対し参戦の意図はないと公然していた。その為同盟国は3対5の戦いと認識していた、だが大英帝国とロシア帝国が協力条約に基づく支援を大同盟に要請し大同盟はこれを快諾。

通商防衛と英国植民地防衛の名目で海軍第七、第八艦隊。海自第九、第十一護衛艦隊。陸軍第一、第二方面軍。陸自第六、第八軍団を派遣。

この派遣により英国は補給や植民地のことを気にすることなく戦争に集中する事が出来る様になり積極的攻勢を仕掛ける事が出来る様になった。

しかし、塹壕戦という全く新しい戦術を取られ苦戦し始めた、そして英国はフランスと共に大同盟に欧州方面への支援を要請。この時彼らは支援の規模を全く告げていなかった、元よりダメもとの支援要請だったからだ。

しかし、この要請によって大日本同盟は大手を振って欧州大戦に介入する事が出来る様になり英仏両国に対して恩を売ることになった。

12月 15日

オーストリア ウィーン

フランツ・ヨーゼフ1世

「ドイツが降伏だど!!」

「はっ！ニューカッスルで大英帝国をはじめとする連合国と講和会談を行い全面降伏した、と」

フランツ・ヨーゼフ1世

「ば、馬鹿な・・・いったいどこが・・・イギリスもフランスも進撃は停止している。ならばロシアか？ いや、ないな。あそこは今それどころではない」

実はこの時のロシア帝国はドイツ帝国の塹壕で多大なる損害を出しており食糧や武器は有るが軍人いや戦闘を行える者（つまり国民）が存在していなかった。よって民衆による父を返せ、息子を返せと暴動が起きており戦争どころではなかったのだ。

しかし大同盟の第一、二方面軍並びに陸軍特殊部隊が東部戦線に加わると国民に対し「戦争は時期に終結する」と宣言し戦線の一部から軍を引き始め暴徒の取り締まりや治安維持のために引いた分の軍を投入した。無論武力による鎮圧ではなく警らや警備といった所詮警察の補助的役割でしかなかったが国民からすれば圧倒的な物量で自分たちの国の領土を半分に削り食料の支援までしている国が戦線に加わったことに加え戦地に行っていた自分の息子や夫、父親が無事に帰ってきて自分たちの身の安全を守っているという事の方が重要だった。

それは、戦争の終わりが見え始めてきたという事を実感すること
他ならなかった。

「陛下、ドイツを倒したのは日本でございます」

フランツ・ヨーゼフ1世

「あの、ロシアを下した日本か？」

「そうです、大英帝国とロシア帝国は日本と条約を結んでいたの
でしょう」

フランツ・ヨーゼフ1世

「なるほど・・・まだ我が国は日本に宣戦布告されてはいなかった
な」

「御意に」

フランツ・ヨーゼフ1世

「ふむ、ドイツが真っ先につぶされた理由は何だと思う？」

「はっ！ それは戦闘能力の高さでしょう。かの国は三国相手に戦
闘をしていました、向うからすれば戦力のあるうちに潰しておきた
かったのでは無いでしょうか」

フランツ・ヨーゼフ1世

「・・・セルビアと・・・セルビアと講和する事は叶わぬのだろう
か？」

「・・・今何とおっしゃいましたか？」

フランツ・ヨーゼフ1世

「セルビアへの最後通牒の拒否された部分を削除したものと相互友好条約の草案に宣戦布告に対する謝罪文を外交官に持たせてセルビアに向かわせてくれ」

「成りませぬ！ それだけは成りませぬぞ！」

フランツ・ヨーゼフ1世

「私は・・・この国が無くなるのが、失うのが怖いのだ。私は息子を失い実の弟も失った・・・妻は放浪の旅だ・・・もう失いたくは無い。それにドイツを降伏に迫りやった国がこの戦争の発端である我が帝国をそのままにする訳が無い。きつと攻めてくるだろう・・・そうなたら我が帝国は終焉を迎えるだろう。ならば・・・ならば、早々に終わらせるにこしたことはない」

「ですが・・・イギリスやフランス、ロシアがどう出るかが問題です」

フランツ・ヨーゼフ1世

「幸い、ドイツ帝国との戦闘によって出た損害は少ない。更に奴らはクリスマスまでには終わらせると国民に公表しているのだ。このままでは今年のクリスマスどころか来年のクリスマスも戦地に行くことになるのだ、国民は戦争が終わるので在らばそちらになびく。それに元々自国が攻撃を受けた訳でも無いのに戦争していることの方がおかしいのだ、向うの国民は戦争続行の理由がなくなれば必ず講和を望むだろう、だが戦争が長引くと自国が受けた損害は彼らに戦争継続の口実を与えかねんのだよ」

「確かに、このことは我が帝国とセルビアの問題、他国は関係がな

い。むしろ巻き込まれたに近い。今ならば・・・」

フランツ・ヨーゼフ1世

「今やらねば今後はもう機会が無い。どちらかが力尽きるまではこの戦争は終る事はないだろう、そうなれば勝った方も負けた方も復興などしていられなくなるほど疲弊している可能性の方が高い」

「先ほどの言葉は先の事まで見ての判断だったのですな」

フランツ・ヨーゼフ1世

「ああ、やるならば今しかないのだ」

第十六部 終わりの始まり

新暦54年8月15日

第194・401・144管理外世界で同時に次元震が発生。調査団による報告によると。

それぞれの世界から強国として存在していた国家が消滅したのと。

何の運命か消滅した国家はすべて大日本帝国と名乗っていたようだ。

追加調査の結果三か所同時で起きた次元震の他にもう一か所でも起きていたようだが

発生源が特定できず調査を断念。

新暦58年7月4日

第107管理外世界で異常な次元震と思われるものが観測された。管理局は直ちに現地に調査団を派遣。

しかし、そこには知的生命体がいいた痕跡すら残っていなかった。

新暦61年9月19日

第80管理外世界で7月に起きた次元震と同様の次元震が観測された。

調査団派遣の結果、第80管理外世界の大日本同盟なる国家が突然消滅したとのこと。

調査は同月25日に完了。消滅原因の特定が急がれる。

去年起こった次元震で消滅した国も“日本”という名が付いていたがこれはどういう事だろうか

新暦70年7月7日

第70管理外世界で管理局職員が大日本同盟と名乗る質量兵器で武装した集団を発見。

武装解除勧告をしたが向こうは拒否した為バインドで拘束しようとしたが、強烈な光と音で怯んだ隙に逃走。
増援が足取りを追うも見失う。

61年に消滅した国家との関係性が疑われる。

新暦76年7月20日

第184観測外世界付近で次元震が発生。急遽旧機動六課のメンバーを招集。

R型次元航行艦18番艦『アースラ』と共に第184観測外世界に派遣。

新暦76年8月29日

7月に発生した次元震の発生源を特定。

第97管理外世界と同様の地形をしている世界が発生源との事。未発見だったため199管理外世界と呼称。

八神特別少将によれば大きな二つの大陸の間の大洋に大陸が存在し、上空から観測したところ第97管理外世界からして凡そ100年ほど前と思われるが、一部異様に発展しているとのこと。少なくとも第97管理外世界と比べる事が出来ないほど科学技術が発達しているようだ。

西暦1914年12月14日

大日本同盟次元空間監視指令室

樋田統合幕僚長

「向うの状況は？」

オペレーター

「どうやらこちらに監視されている事に気付いていない様です」

樋田

「ならば、好都合。デフコンを2に移行！次元航行艦隊に出港準備を急がせろ！」

オペレーター

「大高首相と連絡が取れました」

大高

『今の状況は？』

樋田

「奴らは此方に気付いていない様です。今現在デフコンレベルは2、次元航行艦隊に出港準備を取らせています」

大高

『戦術S弾頭弾、並びに大陸間弾道弾の発射準備を開始。戦略空軍を招集！技術科学庁に秘匿コード009を要請！自衛隊を防衛出

動させろ!!　ここでの対応で開戦か否かが決まる!」

オペレーター

「秘匿コード009・・・」

樋田

「総理!　正気ですか!!」

大高

『正気だ!　だから構えるのだ!!　即時報復が抑止力にならずとも躊躇させるだけでも十分な交渉の切片となる』

樋田

「しかし!」

大高

『戦術S弾頭弾も大陸間弾道弾も実際に使われていないからこそ、いや使わないからこそ脅威として、抑止力として成り立ってきた。今回も同じだ!　多少相手が強固に成るか成らないか、其れだけ!　奴らとしても次元空間からの攻撃は凌ぐことなど出来はしない!　それだけで・・・それだけで　奴らは手を引く!』

樋田

「・・・解りました」

オペレーター

「アンノーンの周囲に多数の高エネルギー反応!!　増援です!」

樋田

「増援だど!!　もう来たというのか?!」

大高

『現時点をもって国家緊急権を発動！デフコンレベルを3に引き上げる！戦略空軍と特務軍団はP型装備で待機。国内の縮退炉をすべて起動させろ！』

オペレーターA

「各部署に国家緊急権発動を通達！」

オペレーターB

「デフコンレベルを3に！」

オペレーターC

「招集した戦略空軍と特務軍団に通達、P型装備で待機。指示を待て！」

オペレーターD

「各地電力施設に通達！縮退炉を即刻起動させろ！今すぐだ！」

オペレーターA

「海軍が配備を完了！」

オペレーターC

「戦略空軍がP型装備で空中待機姿勢に入りました」

オペレーターB

「科学技術庁から入電！次元転送システム座標確定完了！」

オペレーターD

「SLBM並びにICBM発射準備完了！」

オペレーターA

「アンノーンから入電!？」

樋田

「ここに繋げ」

オペレーターA

「サブディスプレイに出します」

???

「こちらは次元管理局次元航行部隊所属『アースラ』艦長、八神はやて特別少将です」

樋田

「こちらは大日本同盟軍統合幕僚長樋田勝正陸軍中将だ。今現在貴艦らは我が大日本同盟の領空を侵犯している、即刻その場から立ち去れ。そして今貴艦が居る場所は数分後に統合演習が行われる場所のほぼ中心部である、巻き込まれてもこちらは責任を取らぬが軍事演習を不当な理由で妨害したもしくははしようとしているテロリストとして処分する用意がこちらにはできている。最後に言っておくがこれは最終勧だ。即刻立ち退くことをお勧めするよ・・・通信切断! 各地の陸海空基地に通達。訓練を開始する」

はやて

「ちょ! ちよっと!・・・ブツ」

大高

『君が・・・引き金を引いたか・・・』

樋田

「政治は政治家。戦争は軍人にさせるのが定石でしょう？ 総理」

大高

『ふっ・・・そうだな、では後30分ほどでそちらに着くだろう。それまで全権限を君に委託する』

樋田

「は！」

大高

『それでは、しばしの間頼んだよ。ガチャ』

樋田

「陸自には対空兵装での出撃を急がせろ！ 治安維持部隊も構成するんだ。海自は全艦艇出撃準備、空自は全機出し惜しみせずに対空兵装で出撃させろ！」

第十六部 終わりの始まり（後書き）

来週からテスト週間に入ってしまいます。

なので次回更新は再来週になります。

第十七部 サブタイトルが思いつかない時もある（前書き）

テスト期間が終了した為、以前通りの更新速度に戻れると思います。

第十七部 サブタイトルが思いつかない時もある

次元空間内

『アースラ』艦橋

はやて

「切れてもた・・・」

「どうするのはやてちゃん」

はやて

「上からの指示は『対象の無力化』やからな・・・」

「交渉決裂・・・か」

はやて

「しやぁない、なのはちゃん、フェイトちゃん」

なのは・フェイト

「「うん」」

はやて

「僚艦に打電。『交渉決裂の為、最終処置を執る、各艦の武装隊は出撃準備を整えよ』以上や。二人とも頼んだで」

なのは

「大丈夫、フェイトちゃんもいるし、皆だって」

フェイト

「そうだよ、はやて。少しはなのは信用したら？」

はやて

「あはははは」

ビービービービー

「前方および後方からアンノーン接近！」

「アンノーン総数10、11、12！前後6ずつです！」

はやて

「前方を α 、後方を β と呼称。第一種警戒態勢に移行！」

「アンノーンから入電。『我、大日本同盟次元艦隊。これより演習を開始する、即刻退避されたし』以上です」

「後方から飛翔体接近！」

「飛翔体は本艦のわきを抜け前方に出ました」

「 α より高エネルギー反応！」

「アンノーン発砲！」

はやて

「緊急回避！」

「 α の砲撃と β の放った飛翔体が衝突！」

「本艦前方に次元の歪みが発生！」

はやて

「面舵いっぱい！飲み込まれたら一巻の終わりや！」

「歪みに引き寄せられています！」

「βより先ほどと同様の物体が飛来」

「αも同様です！」

はやて

「は、嵌められた」

なのは

「どういう事？」

はやて

「なのはちゃん・・・向こうはこっちのこと知ってこれやってるんや、つうことはこっちの目的も大体の見当は向こうはついとるってこと。普通なら自分たちの邪魔しよう奴らがおったら消すのが定石や」

フェイト

「つまり、向うは演習の名目でこっちを消すつもり・・・」

なのは

「それって・・・」

「本艦以外の艦の前にも次元の歪みが発生！」

はやて

「あかん、もう無理や」

フェイト

「次元跳躍システムは！」

「無理です、起動しません」

大日本同盟次元航行艦隊旗艦『紀伊』 CIC

「目標前方への“ゲート”の作成完了」

艦長

「僚艦に打電。『甲作戦完了。これより乙作戦に移行する』」

「僚艦より入電。『了解これより乙作戦に移行する』以上です」

艦長

「目標艦隊の先頭艦が“ゲート”をくぐりました」

「続いて目標艦隊二番、三番艦も“ゲート”に突入します」

艦長

「そろそろだな、司令部に打電。『お嬢様方が入場した』以上！

さて、こちらにも忙しくなるぞ。砲雷長、砲撃準備は？」

砲雷長

「整っております」

艦長

「うむ、目標艦隊の最後尾が“ゲート”をくぐり次第、本艦は後始末を開始する！」

扶桑州北海道千歳

千歳空軍基地

『統合本部より緊急電、次元管理局の次元航行艦隊が出現。全機スクランブル！』

パイロットA（以下PA）

「おはよう、姫さん」

『ええ、おはよう。早速だけど今回の任務内容は海軍および海自艦隊上空の制空権の確保、および海軍、海自艦隊壊滅時の予備戦力よ』

PA

「了解、搭載武装と僚機および合流地点は？」

『搭載兵器はA S M、A A Mと20mmバルカンよ、弾薬数的には弾薬転送装置が搭載されたためほぼ無制限に成ったわ』

管制

『グリフィス1状況確認は済んだようだな』

P A

「おいおい、やめてくれ。俺はそんな優秀なパイロットじゃないぜ」

管制

『何言ってるんだ、お前ほどのパイロットが一体何人いると思ってるんだ?』

P A

「空軍第5航空団の島中佐に空自第7航空の檜山1佐他には・・・」

管制

『みな歴戦の英雄ばかりだろうが・・・グリフィス1いや、鳳凰1、鳳凰2、鳳凰3と共に状況確認を終了し滑走路に進入せよ』

鳳凰1

「了解、滑走路に進入する」

管制

『鳳凰1、2、3離陸を許可する』

『尾翼動作確認、エンジン出力上昇確認』

鳳凰1

「鳳凰1離陸します。」

管制

『鳳凰1の離陸を確認、続けて鳳凰2、鳳凰3の離陸を確認。朱雀隊は状況確認を終了し滑走路に進入し続けて離陸せよ、なお全機離陸後はA Iの指示に従え。これは演習ではない繰り返しこれは演習ではない』

＜こちら空中管制機、各機A Iに作戦通達を開始する。搭乗パイロットはデータリンクを開始せよ＞

＜A Iへの作戦通達を完了、データリンクを解除し各自作戦の再確認を開始せよ＞

第十七部 サブタイトルが思いつかない時もある（後書き）

【ゲート】

外見はただの対艦ミサイルだが次元転送装置の簡易版が弾頭になっている。

簡易版のため使い捨てでもいいところだが安全性と安定性はかなり高い。

おもに次元航行艦の演習時に使用され、大きな衝撃が与えられると同時に次元の亀裂を発生させ飲み込むが大日本同盟航空自衛隊の演習地域の近くに設定されている為、航行艦が失われることはない。

【弾薬転送装置】

ウェーカーにあつた倉庫の技術を応用して作られた。

しかし、機体内部にミサイルなどの弾薬庫がない場合は固有武装のバルカン砲とジェット燃料が無制限になる。しかし弾薬の補給は完全に打ち尽くした後でなければならずジェット燃料は安全のため機体搭載のAIが判断し所属基地に要請する。

第十八部 静と動とタイムリミット

『アースラ』艦橋

はやて

「痛たた」

フェイト

「みんな大丈夫?!」

「何とか・・・」

「一体どうなったんだ?・・・!!」

はやて

「どうしたんや?」

「本艦前方にアンノーン多数!」

はやて

「なんやて!」

「艦長! 大変です本艦は大気圏中に居ます!」

はやて

「反重力装置作動! 周辺に僚艦の存在を確認」

「本艦後方500mに『フィンブルセイン』と『ガナー』の存在を

確認」

「反重力装置の作動を確認」

「後方よりさらにアンノーン接近！ 数50！」

はやて

「第一種戦闘配置や！ アンノーンの動向に注意！」

「アンノーンから入電！ 『我大日本同盟空軍、貴艦らは我が大日本同盟の領空を侵犯している。ただちに全乗組員は武装解除し投降せよ。我等は48時間以内での選択を望む』 以上です」

はやて

「降伏勧告やな・・・次元転移装置は？」

「依然沈黙、復旧の目途は立っていません・・・」

はやて

「とりあえず技術職員は転移装置の復旧、戦闘部隊は現状維持。オペレーターは僚艦および向こうの動きを監視しといて」

なのは

「どうするのはやてちゃん？」

フェイト

「私たちが出れば何とかかなりそうだけれど・・・」

はやて

「無理や、此処が向うの領空内であるならば確実にこっちは陸海空

の三軍に監視されてる。しかもここで下手に動くとうこうは宣戦布告ないし、それに準じた動きだとして本部に攻撃するかもしれん・・」

フェイト

「じゃあどうするの？」

なのは

「転移装置が直ってそれで脱出したとしても、向うは攻撃するだろうね」

はやて

「正しく、八方ふさがりやな」

一時間後

大日本同盟次元空間監視指令室

オペレーターA

「空軍並びに空自が周辺空域に付きました」

オペレーターB

「海自が海軍並びに上空の空軍の援護位置に付き、陸自が周辺住民の避難を終わらせ対空戦闘準備に取り掛かっています」

大高

「管理局艦隊の動きは？」

オペレーターC

「依然、大和州と瑞穂州の間の空域に留まっています」

樋田

「向うが動くとしたら明日の早朝でしょう」

大高

「だろうな・・・だがすべてこちらが先手を打ってある。特務軍の次元航行艦隊の現在位置は？」

オペレーターD

「ただ今、次元空間内を航行中です。管理局と交信可能位置まで後5時間程です」

樋田

「しかし、交信可能位置まで5時間だったとしてもどの様な方法で交信を？」

大高

「次元航行艦に搭載されている皇は独自のネットワークを持っている。それに高度な演算能力と皇にしか使われていない進数を使っていて操作には専用端末を使わなければならない、これはハッキングをするには普通の端末では出来ないことを表している。なぜならこれは英語の回答に日本語で答えるようなものだからだ、管理局が二進数だろうが十六進数だろうが皇はそのどちらも使用していないから一度皇で使える様に変換する必要がある、しかしそれには少々時間がかかるそれは皇にも言える事だがそれを皇は皇同士のネットワークで補っている。つまり此方は日本語と英語を理解し翻訳を担当する者が居るが向こうは英語しか理解できず翻訳する者もないと

いう事だ」

樋田

「つまり、ハッキングする。という事なんですね？」

大高

「うむ」

樋田

「ならあんなに長々と説明をしなくても・・・」

大高

「画面の向こうの読者の皆様に説明していたのだ」

樋田

「なら仕方がないですね」

タイムリミットはあと47時間

第十八部 静と動とタイムリミット（後書き）

突如現れた謎の艦隊。

急速に沈黙していく電子機器。

困惑、戸惑い、恐怖そして暴かれた秘密による怒りと絶望。

次回「選択」

その先にある物は屈服か反抗か？

第十九部 静と動とタイムリミット？

三時間後

次元空間内次元航行艦『伊勢』CIC

艦長

「目標地点まで後どの位だ？」

オペレーター

「後2時間程です」

艦長

「そうか、皇にハッキングの準備をさせろ」

オペレーター

「はっ！」

副長

「そんなにうまくいくのでしょうか？」

何時になく副長が心配そうに聞いてくる、まったくこいつは心配性にもほどがあるんじゃないか？

艦長

「自分の乗っている艦が信じられないのかね？」

副長

「いえ、そういう訳はないのですが・・・ただ上手く行き過ぎている様な気がしてならないのです」

艦長

「これが罠だとしても我々は行くだけだぞ？ 副長。それに上官のお前がその様では、皆に心配されるだろう？ 少しは見栄を張ったらどうだ？」

副長

「すいません。元来心配性で・・・」

艦長

「まあ、慎重なのは良いことだが臆病には成るなよ？」

副長

「はい、心得て置きます」

当時、C I Cに居た日野一尉はこれから大仕事をするような者達には見えないほどその場にはゆったりとした雰囲気でした、と語っている。

2時間後

次元航行艦『アースラ』艦橋

はやて

「どや？ 何とかなったか？」

「ええ、何とか転送だけは出来るよう成りました。しかし到達座標の設定が出来ないので使用は危険かと・・・」

はやて

「何とかならんの？」

「故障の原因が分からない為、直し様が無いんですよ・・・転送だけ出来る様になったのも色々な所を弄ってたら急に出来る様になったので・・・」

はやて

「じゃあない、もう暫らく気張ってや」

「はい、わかりました」

なのは

「はやてちゃん！」

はやて

「どうしたん？」

なのは

「それが、どうにも本局との連絡が取れないみたいなの」

はやて

「なんやて?! 原因は？」

なのは

「それが解らないらしくて・・・今オペレーターの皆と技術部員の

人達が復旧作業中らしいけど・・・」

はやて

「転送装置の次は通信装置かいな・・・いったいこの世界の技術力はどれだけ高いんやろな・・・」

なのは

「どういう事？」

はやて

「出港前にこの船は隅から隅まで整備員に整備されて不具合はすべて取り除かれてるんや、それに此処まで来る間なんも不具合も出んへんかった。なのに此処に来てからそれが大量に出てきた。しかも原因不明、という事は誰かに妨害されているってことしか考えられへんやろ？」

なのは

「・・・確かに」

はやて

「（今気が付きましたって言う顔やな・・・）はあ・・・」

なのは

「？ はやてちゃん？ 大丈夫？」

はやて

「大丈夫や心配いらへん・・・（全く頭が痛い・・・）」

なのは

「そう？ 気を付けてね？」

はやて

「わかつとるよ」

次元空間内

次元航行艦『紀伊』

「目標地点に到達しました」

副長

「艦長、いくら皇と云えどハッキングするには橋頭保となる端末が必要になりますよ？」

艦長

「問題ない、向うには“協力者”がいるからな」

副長

「“協力者”ですか？ 一体いつの間に？」

艦長

「突然だが此处で問題だ。近代国家が国境を決め許可のない入国を禁止するようになったのは何故だか解るかな？」

副長

「治安の維持の為、ですか？」

艦長

「いや、そんなのは警察組織を強化すれば済む問題だ。人口を把握する為でもないからな」

副長

「では疫病の流行を防止するためですか？」

艦長

「うゝむ、なかなか正解に辿り着かないな。そろそろのんびりして居られ無く為りそうだから答えを言うが、正解は難民の入国防止だ」

副長

「難民・・・？」

かなり困惑気味の様だ。どうやら質問と回答の意味が繋がらない様だ、仕方がない長々と説明してやるかな

艦長

「我が国は昔から島国だから国境というものを感じた事は余り無いだろうが大陸国では入国するのはとても容易い事なのさ。それに古代や中世では一般市民は流動的だった、ある町の税金が上がるとよその街に逃げたりしていた。

だから他国の使いや犯罪者は顔が知られていない限りは安全だった、まあ警備が厳しい所もあったが、それは王城などで武装した人間が多くいる所に限られていた、つまり他国の人間が危険を冒してまで忍び込み国王を殺したり、国宝を盗み取る事をしなかったのさ。だが近代になって技術力と云うモノが生まれると他の人間にはガラク々でも専門家には機密情報の塊と云う様なものが多くなってきた。それに人間の移動速度が徒歩から馬車、自動車へと変わるに連れて情報の伝わる速さも変わってきた。つと此処まで言えば大方の予想

が付くかな？」

副長

「もしかや諜報部の人間を難民として？」

艦長

「ああ、さすが次元空間の管理者（自称）気が付いたら此処にいた、
と言うと次元漂流者として保護してくれるそうだ」

副長

「つまり“協力者”というのは向うに保護させた諜報員のことなん
ですね？」

艦長

「ああ、そうだ。ちなみにハッキング開始と共に“彼”は我らが回
収して共に帰還する事になって居るからな」

副長

「それでは士官用の個室を用意させましょう」

艦長

「ああ、そうしてくれ。さて、艦内放送用のマイクを・・・『総員
に告ぐ。そろそろアンノーンからアクセスがある筈だ！ 見つけ次
第、皇が防衛プログラムを起動し掌握するまでにハッキング中の防
衛態勢に移れ！ 以上！』」

残り時間42時間

第十九部 静と動とタイムリミット？（後書き）

昨日の23日は今上天皇の七十七回目の誕生日です。

祝日という事で足を運んだ方もいらっしゃるのではないのでしょうか？
近頃の政治家を見ていると今一度、大政奉還をした方が良いのではないだろうか？とってしまうことが有ります。

皆さんは今の政治家を見てどう思っていますか？

第二十部 静と動とラストカウント（前書き）

本年最後の更新でございます。

帰省中の方は御免なさい。

第二十部 静と動とラストカウント

次元管理局

「アースラとの通信が出来ないだど!!」

「派遣した他の艦とも出来ないのか?」

「くそ! あの船にはエース中のエースが揃っているんだぞ!!」

「我々の損害は馬鹿にならんぞ!! どうするんだ!」

「どうするもこのことが世間に知られたら大変な事になるぞ!!」

「そうだあの船には旧機動六課の主要メンバーが乗っているんだぞ!
! あいつらに影響を受けた管理局員が一体どれだけ居ると思っ
ているんだ!!」

「下手したら、救出に行くと言う奴らが現われるぞ! そんな事にな
ったら本局の警備が手薄どころか無きに等しくなる!!」

「だから、そんな時の事を考えてメンバーを決めろと言ったのに!
!」

「貴様も最後には『彼女達なら大丈夫だろう』と言って賛成しただ
ろうが!!」

「提案したのは貴様だぞ!!」

「なんP i p i p i p i p i 誰だ!! この忙しいときに!!」

ピ!

「今会議中だ!!」

『大変です管理局のコンピューターがハッキングされています!!』

「そんなこと何時もだろうが! マニュアル道理対応しろ!!」

『それが、第一、第二、第三プロテクトまでたった三秒で到達されました!』

「ふざけるな!! こちらは忙しんだ! 戯言を言っている暇があれば仕事をしろ!!」

ブツ!

次元航行艦『紀伊』

オペレーターA

「皇がハッキングを開始しました」

オペレーターB

「第一プロテクト、第二プロテクト解除!! 第三プロテクト解析開始!」

オペレーターC

「向うに気付かれました!」

艦長

「気にするなどうせ皇にはアクセスする事は出来ん!」

オペレーターA

「第三プロテクト解析率40%」

オペレーターC

「皇にアクセス!! 6号プロテクトで対応します!」

オペレーターB

「第三プロテクト解除!! どうやら事務局の端末にアクセスできたようです!!」

艦長

「全艦に打電!! 『岩戸は開いた』」

オペレーターD

「『伊勢』『天照』『大和』がハッキングを開始!!」

オペレーターA

「データの転送開始!!」

オペレーターB

「本艦の皇は保安局にアクセスするようです」

艦長

「三号補助プログラム起動!!」

オペレーターD

「三号起動確認！」

オペレーターB

「向うの抵抗率が低下しました！」

オペレーターC

「本艦の皇へのアクセスを全てシャットアウト！」

オペレーターA

「保安局へのパスワード発見！ コピー開始します」

オペレーターB

「事務局の全端末を制圧！このまま警備局の端末にハッキングします」

オペレーターA

「保安局へのパスワードコピー完了！」

オペレーターB

「保安局へアクセス！！」

オペレーターD

「『大和』が広報局を制圧！『紀伊』が膨大な量のデータを発見！
！『天照』と共に本国に転送しています！」

次元管理局管理局事務局

ビービービービー

「「「!」」」」

「なんだこの警報は!!」

「保安局に問い合わせます!」

「大変です! 第一、第二プロテクトが解除され第三プロテクトが解析されています!」

「保安局へのアクセスどころか、端末への操作が一切できません!」

「部長に連絡を! 他のものは手近な端末で強制シャットアウト!」

「無理です! 操作ができません!」

「こっちでも無理です!」

「よし、後はパスワードを、ん? こっちも出来なくなりました!」

「くそ、残っている端末全てシャットアウトするんだ!」

「くそ!! こっちはダメだ。そっちは?」

「こっちも今出来なくなった！」

「こっちもだ！」

「くそ！！ こいつが最後の端末だ！」

「そうだ！ 局長は！？」

「会議中だと言われて通信を切られました・・・」

ブン

「ブ、ブルースクリーン」

「最後の端末が・・・落ちた」

事務局陥落

西暦1914年12月15日

突然始まった管理局へのハッキング。

それとほぼ同時に知らされた管理局のエース達の交信断絶の知らせ。後の歴史家たちはこの日から陰陽問わずの次元管理局と大日本同盟の本格的な対立が始まったとしている。

そして運命の時まで後24時間

第二十部 静と動とラストカウント（後書き）

2010年も今日で最後ですね・・・

考えてみれば連載開始より早6ヶ月が経ちました。

2度の入院を乗り越え今日この日まで連載を続けてこれたのも皆様の暖かいコメントのおかげです。

来年も精力的に執筆して逝きたいと思っていますので来年もご愛読くださるようよろしくお願いします。

それでは皆様よいお年を。

平成22年 大晦日 大日本同盟作者 一般読者

第二十一部 終わりの始まりの終わり（前書き）

今年初の更新です。

これからもよろしく願います。

第二十一部 終わりの始まりの終わり

12月16日

アースラ艦橋

はやて

（残り時間は後18時間。少なくとも本局との交信が出来ない今、
こんまま約束の時間が過ぎたら私達が取れる行動は向うの要求に従
う事のみや・・・僚艦との通信さえ回復してくれば・・・いや、
たとえ回復したとしても確実に私たちは・・・止めとこ、今出来る
ことは少なくない・・・報告を聞く限り転送装置はある程度は到達
座標が確定できるとこまで回復しとるし、通信も無音から雑音に変
わり始めとる・・・なら後15時間が限度やな・・・）

3時間後

大日本同盟軍統合司令部

（次元管理局へのハッキング開始と共に全面戦争の準備が完了した
為、デフコンレベルが更に上がり指揮権が次元空間監視指令室から
統合司令部に格上げされた）

特務軍参謀長

「管理局に対するハッキングは事務局を橋頭保として保安局や各部
隊のコンピューターを制圧しすべてのデータのコピーが完了し次第
『トロイの木馬』で破壊され現在の復旧率は凡そ3%とみられてい

ます」

陸軍参謀長

「陸軍は現在欧州に派遣した第一、第二軍団は現在極東ロシア基地にて待機中です。しかしそれを除く大和、秋津、瑞穂州の各部隊は第一種戦闘態勢のまま待機任務に就いており各地の空挺師団は輸送機に搭乗し待機中です」

海軍参謀長

「第二、第三、第四、第五艦隊が周辺海域で警戒態勢に扶桑州の艦隊は大和、秋津、瑞穂州を囲う様に航行中です。なお特務海軍が現在指揮下に入っており次元管理局の次元航行艦の動向を監視しております」

空軍参謀長

「空中給油機と空中管制機を各20機、自動補給装置を付けた戦闘機を師団単位で張り付けており、空中管制機には空自の管制機と共に各種ジャミングを給油機は扶桑州北海道各地の空港から空自機と共に給油任務についております」

陸自幕僚長

「こちらは周辺住民の避難を完了し対空兵装を中心とした部隊は展開を完了し機甲師団は海岸線に、自走砲などはその後方に展開を完了しています」

海自幕僚長

「第一、第二、第三護衛艦隊は補給艦隊と共に海軍艦隊の後方に展開し、八咫の鏡を搭載したイージス艦は海軍の艦隊と共に管理局艦隊の監視任務についております」

空自幕僚長

「空軍と同数の給油機、管制機、戦闘機を上げ本土上空の防空任務に就いております」

大高首相

「ふむ、あと15時間で管理局がどこまで回復するかが問題だな」

柊国防大臣

「管理局が復旧作業を開始したのが今から1時間前ですので15時間後に50%まで回復していれば良い方でしょう。少なくともすべての端末に『トロイの木馬』を仕込んであるわけですから、それを橋頭保に再度ハッキングを仕掛ければ復旧不可能なレベルにまでする事が可能だと思われます」

大高

「いや、少なくともあのハッキングは反管理局組織が独断で行ったことであり我等大日本同盟は何ら関係していない事を証明しなければならぬ。そうするには次のハッキングは違った場所から始めなくてはならぬ」

空自幕僚長

「少なくとも今回は専守防衛でなくてはならない、そして今の総理は決して武力には屈せず立ち向かいこれを撃破しなくてはならない。こちらから手を出すと扶桑の変人たちが五月蠅いのだ」

海軍参謀長

「うむ、少なくとも今回のハッキングと我々の演習は無関係のモノでなくてはならない」

10時間後

大日本同盟軍統合司令部

大高

「あれから10時間か・・・管理局の復旧率はどれぐらいになっているのか解るか？」

特務軍参謀長

「ええ、前回の会議後に潜り込ませた『トロイの木馬』を使って復旧率を調べさせた所、現時点で復旧率は40%です、しかしここで『トロイの木馬』を使えばこれをもう一度0%に戻すことはともかく復旧不可能レベルにすることも可能かと・・・」

大高

「潜り込ませた『トロイの木馬』の感染能力はどれ位なんだ？」

特務軍参謀長

「ネットワークで繋がっていればファイルの転送に伴って広がっていきます。なので感染能力は十分なほどありますが・・・」

大高

「何、予備のコンピューターによって管理局の回復が早まったら面倒なのでな」

陸軍参謀長

「ともかく、あと5時間後に・・・」

空軍参謀長

「ああ、約束の時は近い・・・」

海軍参謀長

「そして役者はすでに揃っている」

陸自幕僚長

「ならば、それに向かって後は突き進むのみ」

大高

「すべて此方のシナリオ道理に事は進んでいる」

アースラ艦橋

はやて

（残り時間は後4時間30分、なのはちゃん達には攻撃準備を始めてもらったけど・・・正直勝てる気がせえへん。これだけの戦闘機と艦艇相手に補給や増援なしで戦うんは自殺行為や、それにこっちの戦力は通信が出来なくて連携が全く取れない次元航行艦が20隻とエース級の管理局職員150人少々・・・）

（外に出た瞬間に向うは攻撃出来る様にしとる筈やし陸上戦何てもつてのほかや、例え上陸できたとしても向うは軍しかも空海軍がこの規模やから少なくとも陸軍は10万は超えとる。ここは素直に降伏しといった方がええんとちゃうかな？）

フェイト

「はやて」

はやて

「ん？　なんや？　フェイトちゃん」

フェイト

「あのね・・・技術部員の人に頼んで向うの航空兵力と海上兵力を想定してもらったんだけどね・・・」

はやて

「絶望的な数値が出たんやろ？」

フェイト

「！！　うん、少なくとも艦内の戦闘要員を総動員しても持つて1分。1分でアースラを含むすべての艦艇のシグナルロストっていう結果になった・・・ねえ、はやて」

はやて

「うん？　どうしたん？」

フェイト

「降伏するしかないのかな？」

はやて

「するとしても艦内の魔法至上主義の管理局員を説得しないとあかんで？　後4時間少々で説得できるん？」

フェイト

「だよ、ね・・・」

なのは

「二人ともどうしたの？　そんなくらい顔して」

フェイト

「あ、なのは・・・」

なのは

「どうしたのフェイトちゃん？」

はやて

「今な、フェイトちゃんが技術部員の人に外の戦闘機とかと戦うと、
どうなるのかシュミレートしてもらった結果を聞いてたんよ」

なのは

「そうなんだ。で、どうなったの？」

フェイト

「うん・・・それが、ね」

はやて

「1分や」

なのは

「ふえ？　何が？」

フェイト

「アースラを含めた次元航行艦と戦闘部員を全員投入した場合の戦
闘終了までの時間。終了条件は交戦能力の消失・・・」

なのは

「それがどうしたの？」

フェイト

「え？」

なのは

「それってこっちが圧倒したって事でしょ？」

現在時刻

西暦1914年 12月 16日 14時 58分

タイムアップまで後 1時間2分

第二十二部 造反

鳳凰1

「なあ、姫さん」

『なに？』

鳳凰1

「思ったんだが・・・あの船どうやって浮かんでるんだ？」

『たぶんだけど、反重力装置が付いてるんじゃない？』

鳳凰1

「なら、上層部はわざと重力装置のコントロールは奪わなかったんだろうな」

『たぶんそうでしょうね。作戦開始3分前よ、各兵装のチェックと燃料の残量に注意して。こちらでもある程度のサポートをするから』

「了解」

く空中管制より空軍・空自機に告ぐ、敵艦艇は未だ沈黙状態にある。
よって統合司令部は降伏の意思なしとし1 ^{ヒト}5 ^ゴ0 ^{マル}0 より海軍、
海自艦艇が攻撃を仕掛ける。貴官らは艦艇全滅時の予備兵力である

が重要なポジションにある。単機で攻撃をするような事の無い様に、決して海自、海軍に味方殺しをさせる事の無い様に注意しろ＞

海軍 第四艦隊所属第二戦艦群 戦艦『日本武尊』

「艦長！」

艦長

「ん、そうか、もうそんな時間か」

「はい、統合司令部より攻撃準備を開始せよとのことですよ」

艦長

「砲雷長、敵艦隊は航空兵力として見るのが正常か？」

砲雷長

「微妙ですが対艦ミサイルのターゲットはCICでどうにかなりま
すので対艦戦闘で良いかと・・・」

艦長

「そうか、ならば対艦戦闘用意！ 対艦ミサイルサイロ1番から2
0番まで解放」

砲雷長

「対艦戦闘！ ミサイルセル1番から20番まで解放」

艦長

「主砲照準、目標、空中敵艦隊。弾種徹甲弾！」

砲雷長

「主砲照準！目標、空中敵艦隊！ 弾種徹甲弾！ ミサイルセル解放完了！」

艦長

「ミサイルターゲット一隻に集中させろ！」

砲雷長

「ミサイルターゲット集中ロック」

「艦長！！ 作戦開始時間です！！」

艦長

「判った。最終確認始め」

砲雷長

「最終確認！」

「主砲仰角良し、主砲弾良し」

「ミサイルターゲット良し」

「非戦闘員の退避、甲板作業員の退避確認！」

砲雷長

「艦長！ 最終確認終了しました」

艦長

「よし、遠慮はいらん！！ 徹甲弾を撃ちこんでやれ！」

砲雷長

「了解！ 撃ち方始めー！」

ここで時は一時間遡り・・・

14時 00分 タイムアップまで後一時間

アースラ艦橋

艦橋では、なのはの予想の斜め上に行く発言により、はやてとフェイトが呆然としていた。
そしていつの間にかなのはは、姿を消していた。

はやて

「フェイトちゃん・・・」

フェイト

「・・・もうどうしようも無いのかな」

はやて

「まだや」

フェイト

「え？」

はやて

「まだ、後一時間は有る」

フェイト

「そうだね・・・何としても全滅は逃れなくちゃ」

はやて

「そうと決まったら全艦に通信で艦長を呼ぶんや。音声のみやけど何とか通信機器は回復しとるし、それに・・・」

フェイト

「うん、急がなくちゃね」

20分後

はやて

「だから何度も言っとるやろ！もう時間が無いんやって」

「ですがそのシミュレーションの結果が本当なのかがどうにも・・・」

はやて

「なら、そっちでもやって見たらええんや無いか！」

「それができていれば疑いませんよ」

「こっちでは損害なしで此方の勝利と言う結果が出ているんですよ？
なぜそちらの結果だけが完全敗北などと言うふざけた結果にな

るんですか?!」

はやて

「向うの戦闘機の大きさや翼の下についとる武装から推定した爆発エネルギーと海上の艦艇に搭載されている砲の大きさから直撃した時のエネルギー量を換算した結果がアースラの撃沈や! それに避ける暇もなく20から30の砲弾が飛来しそのうちの8割が直撃し1割が至近弾ないし掠って航行システムに異常が発生するんや!」

「本当に避ける事が出来ないほどの速さが? そもそもこちらから先にヤッてしまえば問題ないのでは?」

はやて

「それも考えた・・・やけど海上艦艇全滅と同時に戦闘機からの総攻撃が開始される可能性が80%。管理局本局に攻撃がされる可能性が100%なんや。それにこの事を多分本局の方では、まだ確認できていない可能性が大いにあるんや、そんな状態で先に手え出したら今無防備な本局は確実に攻撃を受ける」

「じゃあ、あなたは質量兵器を大量に保有した奴らを見逃すというのか!」

はやて

「いや、多分向うはこちらが逃げたとしても本局の方に攻撃を開始する可能性がある」

「じゃあ、このまま好き勝手にやられろともいうのですか!」

はやて

「・・・そう成らない為の方法が一つだけあるんよ」

「じゃあそれをやれば・・・」

はやて

「戦わずして負けを認める事や」

「ふざけるのもいい加減にしてもらいたい!!」

「いくらなんでもそれじゃあ話にならん!」

「そうだ、我々管理局の魔導師が負ける訳にはいかんだ! 質量兵器ごときに」

はやて

「あんたらは質量兵器の強さを知らんからそんな事が言えるんや」

「出身地と似ているからと言って敵対しないという事は少々自分勝手すぎるのでは?」

はやて

「そんな事あらへん!」

「ふう、全く話にならん・・・これ以上の問答は無用と私は考えるのだが?」

「私もだ」

「うむ」

はやて

「な、なんやて・・・そないな事いっとって死んでしもうたら元も子も有らへんやろが!!」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

はやて

「この、あほんだら!!」

フェイト

「はやて・・・」

はやて

「フェイトちゃん・・・アースラだけでもミッドに帰るで」

フェイト

「・・・うん、だけど皆信じてくれるかな?」

はやて

「それは、判らん」

フェイト

「そ、それじゃあ!」

はやて

「信じてもらわなあかん。せやからフェイトちゃん、力貸しとってな」

フェイト

「うん」

はやて

「せやったら、艦内の何処かに皆集めてシミュレーションの結果みせな」

フェイト

「急がないと」

残り時間 40分

はやて

「はあ」

フェイト

「あんなに説得するのが大変だったとは」

はやて

「うん、なのはちゃんを中心に反対してくるとは思わなかった」

フェイト

「しょうがないよ。全くと言って良い程、質量兵器を用いた戦闘法は勿論どの様な兵器が有るかすらミッドじゃあ判らないんだから」

はやて

「しかしなあ、少なくとも十数年生活しottaた国の軍とか政治には

少しぐらい関心が有ってもええんやないの？」

フェイト

「まあ、其処は其の・・・ね？」

はやて

「何が、ね？ なん？」

フェイト

「あはは・・・」

はやて

「はあ、取り敢えず此れからだないしよう？」

フェイト

「素直に投降すればちゃんとした扱いはしてくれると思うけど・・・」

」

はやて

「そうやな・・・世界が違っても同じ“国”の人間やし」

フェイト

「少なくとも殺される事は無いんじゃないのかな？」

はやて

「艦橋から通信できへんかな？」

フェイト

「降伏勧告をして来たという事は少なくともそれを受け入れる用意があるってことだからね・・・みんなに何て言われるのか分からない

いけど・・・」

はやて

「そやな」

フェイト

「あ、はやて大変！」

はやて

「どうしたんや！」

フェイト

「あと20分ない！」

はやて

「あかん、これはあかんで！！ 急いで艦橋にいくで！！」

フェイト

「うん！」

大日本同盟統合司令部

大高

「後、20分か・・・」

陸軍参謀長

「投降する奴等はいるのでしょうか？」

海軍参謀長

「さあ、判りませんな」

空自幕僚長

「投降して来たとしても海に一度落ちて貰わないといけないんですかね」

陸軍参謀長

「それは仕方あるまい。それは置いといて、ミッドチルダの報道関係は抑えられているので？」

特務軍参謀長

「ああ、それは問題ない。何時でも艦隊壊滅の速報を知らせる事が出来る」

空軍参謀長

「憎まれますな」

海軍参謀長

「どうだかな、今まで自分たちが散々やってきたことを逆にやられているから怒るんじゃないのか？」

空軍参謀長

「それでも、面倒なことには変わらんよ」

樋田

「何とか成るだろう。文句を言われる事が無いようにちゃんと48時間もの猶予を与えたのだからな」

陸自幕僚長

「そうでしたね」

「次元空間監視司令室より緊急入電。
管理局員2名が投降。繰り返す管理局員が2名が投降！」

第二十二部 造反（後書き）

戦艦『日本武尊』

主砲 80cm三連装 4基 12門

副砲 拡散荷電粒子砲 2基 4門

対空、対艦、対潜ミサイル 各24セル

40mmCIWS 20基

防御重力場

電磁防御

使用弾薬

・主砲

簡易気化爆弾

徹甲弾

榴弾

・対空ミサイル

77式対空誘導弾

・対艦ミサイル

76式対艦誘導弾

・対潜ミサイル

80式対潜ミサイル

第二十三部 知らされた真実（前書き）

風邪ひいたようです

第二十三部 知らされた真実

次元空間監視司令室

大高

『で、投降したいと』

はやて

『ええ、もはや説得する時間も必要性も感じられなくなりました』

大高

『味方を見捨てて自分達だけ助かろうと？』

はやて

『他のフネとの連絡が取れない今、自分の乗るフネの人間だけでも・・・と思いましたが全く聞き入れてもらえずに・・・』

大高

『成る程、分かった。受け入れよう、確認しておくが投降するのは君と後ろの彼女だけかね？』

はやて

『はい、そうです』

大高

『そうか、分かった・・・ところで君達は・・・』

はやて

『なんですか？』

大高

『泳げるのかな？』

はやて

『え？』

10分後

アースラ 物資搬入用ハッチ

フェイト

「まさかこんな事に成るとはね・・・」

はやて

「じゃあないやん！ 方法がこれしかないんやから」

どことなく二人の顔色が良くない

フェイト

「それでもだよ？」

はやて

「うん・・・」

フェイト

「この高さは・・・」

はやて

「・・・」

フェイト

「・・・」

はやて

「か、覚悟決めんと」

フェイト

「はやて、足かなり震えているよ」

はやて

「フェイトちゃんこそ・・・」

大高

『攻撃開始5分前からAMFを解除する。それと同時に貴官らは降下を開始してくれ、近くに飛行艇を派遣するからそれに乗り込んで戦闘空域から脱出してくれ』

はやて

「なんでこんなにもAMFが強力なん！！ デバイスの起動すらで
きん」

フェイト

「と、とにかくそろそろ行かなくちゃ・・・？ ねえ。はやて、救助用飛行艇ってあれの事かな？」

はやて

「多分そうやろな・・・リインいくで!!」

フェイト

「バルディッシュ！ セットアップ！」

(Yes Sir!)

フェイト

「ふう、これで何とかなるね」

(Yes Master)

US-2機内

「管理局員2名降下確認！」

副機長

「目標地点接近」

「減速開始。着水よーい、各員衝撃に備えよ」

機長

「ちやーくすーい！」

ザザザアン

「よし確保目標に接近！ 機体の上に来るようにするぞ」

副機長

「機長、まだエンジンは未だ止まっています危険です！」

機長

「馬鹿もん、彼女達を12月の寒い海で泳がせる気か！！」

副機長

「解りました！！」

機長

「エンジンは止めるなよ！ すぐに飛びたてる様にしておけよ！
帰路は空自機の護衛が付くが全員油断するなよ！」

「」「はい！！」「」

はやて

「フェイトちゃん！」

はやてが、私から少し離れた所から飛んでくる。どうやら落下中に離れていたようだ

はやて

「あの飛行艇みたいやで？」

フェイト

「うん、早く行こう。待たせちゃいけないし、それに此処まだ戦闘空域になっているんじゃないの？」

はやて

「そうやね。それにしてもどこから入れば良いんやろ？」

フェイト

「翼の上に乗ってみる？」

はやて

「そやな、でも機体の真ん中らへんは開きそうやで？」

フェイト

「あ！ ホントだ・・・とにかく近づこう」

そう言って私は真下にあるさつき着水した飛行艇に近づいて行った

15時 00分

アースラ 艦内

なのは

「フェイトちゃんもはやてちゃんも向うは質量兵器をあんなに保有しているのに・・・」

局員 A

「そうですよ、でも何で彼女達は研究部員の言う事を信じてしまったのでしょうか？」

局員B

「確かに・・・でもあの二人は、もしかしたら戦わない可能性があります？高町少将はどういう作戦を？」

なのは

「今からでも遅くは無いと思うから彼らに武装解除を促して」

局員C

「了解です」

局員B

「高町少将、通信です」

なのは

「誰から？」

局員B

「彼等です、どうしますか？」

なのは

「繋いで、私から直接彼等とお話するから」

局員B

「解りました」

『さて、約束の48時間が経った。君達の返事を聞こうか』

なのは

「今すぐに武装解除して投降しなさい」

『そうか、それが君達の返事か・・・致し方有るまい、』

なのは

「貴方達が持っているものは質量兵器ですそれがどういう事か分かっているのですか?! とても危険なものなんですよ!」

『そんなものの使い方を間違えなければ良いのだよ、それに君達が使
う魔法とやらは全く危険が無いとでも言うのかね? 我々からすれ
ばその魔法の方が規制するべきモノだと思いがね』

なのは

「・・・」

『それに我が国の事を他の世界、しかも祖国を捨て生まれ育った世
界を捨てた人物になど言われたくないのだがね? 高町家次女の高
町なのはさん? それとも管理局のエースオブエースさんの方が良
いかね?』

なのは

「祖国を・・・捨てた・・・?」

『おや? 知らないのかね?』

なのは

「どういふことですか?!」

『知らないの有れば教える必要性は全くないさ・・・ああ、そう
いえば投降して来た者が居るんだが、君は家族とはもう会いたくは
無いのかね?』

なのは

「誰が貴方達なんか・・・」

『そうか・・・残念だ。すまないがもはや猶予は全くとって良いほど残ってはいない。我が国の国民はこんな嘗められる様な事は許さないのですね。各艦艇および航空機に連絡、攻撃を開始せよ、一隻も残すなども伝えてくれ。ほんとに残念だよ君が投降してくれなかったことはね・・・』

なのは

「なにを!!」

『なあ、なのはちゃん』

なのは

「な、なんで?! どうして・・・」

『さようなら、なのは』

ドサッ

なのは

「は、はは、嘘、だよね・・・ははは」

局員C

「高町少将! 大変です! あれを見てください」

ぐおおおおお

日本武尊級戦艦2番艦『八咫鳥』 CIC

艦長

「最大船速！」

航海長

「最大船速！ よゝそろ」

艦長

「1、2番主砲旋回！ 弾種徹甲弾」

砲雷長

「1、2番主砲旋回！ 弾種徹甲弾！」

艦長

「情け、容赦はいらん！ すべて撃ち落とせ！」

超兵器戦艦『阿修羅』 CIC

艦長

「拡散プラズマ砲充電開始！ 荷電粒子加速開始！」

砲雷長

「拡散プラズマ砲充電開始！ 荷電粒子加速開始！」

オペレーター

「荷電粒子加速開始！」

艦長

「各対空兵装を自動制御装置とリンク、各員は砲雷戦に集中せよ！」

通信士

「司令部より入電、各艦各自戦闘を開始せよ。以上です！」

艦長

「主砲1、2、3番、撃てー！！！」

砲雷長

「主砲1、2、3番、撃てー！！！」

艦長

「続いて4、5、6番、撃てー！！！」

砲雷長

「続いて4、5、6番、撃てー！！！」

オペレーター

「弾着まであと20！！！」

艦長

「目標変更！ 対艦ミサイル1番から20番撃て！」

イージス艦『金剛』CIC

オペレーターA

「八咫鳥、阿修羅発砲開始。日本武尊の発砲を確認」

オペレーターB

「敵艦に荷電粒子とプラズマ砲が命中！ 爆発を確認」

オペレーターC

「敵残存艦艇35隻」

副艦長

「どうやら我々の出る幕は無い用ですな」

艦長

「そうでもないと思うが？」

副艦長

「は？それは一体どういうこと」「敵艦内より管理局員が出撃！」

艦長

「ほらな、各員対空戦闘用意」

通信士

「司令部より入電、これよりAMFを再展開する。以上です」

艦長

「・・・」

副艦長

「・・・無くなりましたな」

次元航行艦 『アースラ』

局員A

「ファイリア、クリーブ撃沈！ ああ！！ アレフィアンスまで！」

局員B

「シルヴァランスより武装隊員が出撃！」

武装隊員

「AMFが解除されたのか！！ 俺たちも行くぞ」

局員B

「し、出撃した武装隊員が海に落ちていきます！！」

局員C

「クソ！！」

局員B

「高町少将！！ 確りして下さい！ 高町少将！！」

なのは

「あは、あはははは」

『こち・・・リフィ・・・アース・・・応答・・・』

局員A

「通信が回復した！！ こちらアースラ、貴艦の現状を知らされた

し!?!」

『こちらリファイ、貴艦はアースラか?』

局員A

「こちらアースラ、貴艦の状態を報告せよ!」

『こちら・・・』

局員A

「おい! どうした?! 応答せよ! 応答せよ!」

『日本武尊』 CIC

オペレーター

「敵艦撃沈!」

艦長

「敵残存兵力を報告せよ!」

オペレーター

「敵残存艦22隻、いえ21隻です」

ミッドチルダ

「おい、あれ見ろよ。この間出撃して行った艦隊じゃないか?」

「マジかよ。でもなんで戦闘してないんだ？」

「さあ、交渉中なんじゃないのか？」

「あ！ あそこのはアースラじゃないか？！」

「おお、スゲー。ん？ あの海に浮いてる船って質量兵器じゃないか？」

「みたいだな、倍以上いるぞ！！！」

「でも、何とかなるだろうよ、アースラには管理局が誇るエースたちが乗っているんだからな」

「おいあれ見ろ！ アースラから誰か出てきたぞ！！！」

「八神少将とハラオウン少将じゃないか」

「ん？ 飛行機に乗っていったぞ！！！」

第二十三部 知らされた真実（後書き）

頭痛い・・・

第二十四部 絶たれた希望（前書き）

絶たれた希望は絶望となる

第二十四部 絶たれた希望

『アースラ』 艦橋

なのは

「・・・」

ふらあ

局員

「あ！ 高町少将！ どこへ?!」

なのは

「レイジングハート・・・セット、アップ」

(All right)

局員

「少将!!」

なのは

「・・・」

(Transporter)

海上 第二艦隊 旗艦『阿修羅』CIC

オペレーターA

「司令部より入電。AMF発生装置の制御回路が破損、よってこれより全種類の火器の使用を許可する。各員奮闘せよ。発大日本同盟総理大臣 大高弥三郎 以上です!」

艦長

「AMFが使えなくなったか。まあ、代わりに全武装の使用許可が下りたから良しとするかな? 機関室に連絡、第3融合炉の始動準備に入ってくれ」

オペレーターA

「了解!」

レーダー員

「レーダーに感あり! 数1、2時方向!」

砲雷長

「数1・・・対空ミサイルの射程内か?」

レーダー員

「そうです、この位置からならば十分に届きます」

艦長

「対空ミサイル発射用意! ミサイルセル1番から5番まで解放」

砲雷長

「対空戦闘！ 対空ミサイルセル1番から5番解放！」

オペレーターA

「1番から5番解放完了」

オペレーターB

「目標補足完了！ ミサイル装填確認、甲板作業員の退避確認」

艦長

「対空ミサイル1番から3番撃て！」

砲雷長

「1番から3番撃ち方始め！」

艦長

「続いて4番、5番撃て！」

オペレーターA

「弾着まで45」

艦長

「6番から25番まで解放開始！」

オペレーターB

「は？ は！ 6番から25番まで解放。解放完了！ 1番から5番までの再装填が完了」

艦長

「6番から9番撃て！ 続いて10番から15番撃て！」

オペレーターA

「弾着まであと25・・・いえ！ ミサイル消滅！」

砲雷長

「何！ 消滅だと！！！」

艦長

「全艦に打電、敵エースを発見。気化弾頭弾を装填されたし。以上だ！」

砲雷長

「艦長、我々も・・・」

艦長

「そうだな。砲雷戦用意、主砲1番から4番。気化弾頭弾装填！ 目標管理局エース。散布界調整5km一掃射用意で行くぞ！！！」

オペレーターA

「ミサイル、シグナルロスト。敵目標、未だ接近してきます！」

オペレーターB

「機関室より入電！ 第3融合炉炉心臨界到達！」

艦長

「電磁防御出力上昇、防御重力場は停止しても構わん。船速120ノットまで上昇、距離3000から撃ち方始め」

オペレーターC

「距離4000・・・3500・・・3000！」

艦長

「撃てー！！」

ずどおおおん

80センチ75口径連装2基4門から放たれた3000kgの巨弾は内部に自身の凡そ3分の2ほどの燃料を含んだまま初速900m/sで放たれ、時限信管により砲弾が分裂し砲弾内の燃料が空気中に散布されると同時に発火装置が作動する。

一発あたり2kmを焼き尽くし3km以内の酸素を消滅させる戦略兵器であり初代『日本武尊』が搭載していた『ろ号弾』をもとに作成され、使用については内閣総理大臣から使用の許可が無いと装填する事すらできない程の機密兵器である。

オペレーターA

「左舷より戦艦『天照』、『八咫鳥』が接近。気化弾頭弾を使用するようです」

オペレーターB

「空中管制機より入電、貴艦の攻撃は有効打ならず！」

艦長

「散布界8kmに再調整、仰角そのまま信管を後1秒遅らせて再装填。急げ時間が無いぞ!!」

オペレーターB

「敵性反応発見! 4時方向!!」

艦長

「回避運動はじめ!! バウスラスター起動!!」

オペレーターB

「魔力の収縮を確認、今現在も収縮しています」

艦長

「砲撃魔法だろうな、しかも特大の奴の筈だ。その分反動が大きく制御が効きにくい! 差し違える気でやるぞ!! 敵発射と共に面舵いっぱい、全火器にて敵を圧倒しこれを撃破する!!」

「「「了解!!」」」

ミッドチルダ

そこには突如として現れたフォログラム映像にくぎ付けになっている人たちが数百人いた。

「おい、一体どういう事なんだ・・・」

「知らねえよ・・・俺にも何だか・・・」

「なのはママ・・・ちゃんと、ちゃんと帰ってくるよね？」

「え？ 今のって・・・」

「どうしたんだ？」

「いやなんでもない、ともかく奴らこんなに質量兵器を持っていたなんて。それにあの大爆発SSSランクの魔導師ですら同規模の物を起こすのには骨が折れる・・・やはり質量兵器は持つてはいけないものだな」

「ああ、そうだな。どうせこの世界も管理局の誇るエース達には敵わないさ」

「ああ、だけど八神少将とテストロッサ少将は一体？」

「降伏勧告をしに行ったんだろう？」

「だといいいけどな・・・なんか違う気がするんだよな」

「何がさ？」

「さあ？」

ミッドチルダの市民の心には一時不安が陰った。しかしそれも彼らが最強にて無敵と信じてやまない者の登場でかき消されてしまった。それが過ちだとも気付かずに・・・

『阿修羅』 CIC

オペレーターA

「!!! 敵の魔法発射を確認!!!」

艦長

「バウスラスター出力最大!!! 面舵いっぱい! 総員何かに捕まれ!!!」

オペレーターB

「敵砲撃魔法、本艦右舷を通過」

艦長

「被害報告知らせ!!!」

「第一、第二砲塔異常なし。第三、第四砲塔にも異常なし」

「各対空兵装異常なし、舵損傷なし、機関異常なし。戦闘行動については一切の異常はありません」

艦長

「主砲弾の装填は?!」

砲雷長

「回避寸前で完了しました、何時でも打てます!!!」

艦長

「よし、確実に落とすんだぞ! 撃ち方はじめ!!!」

第二十五話 虚像と真相 (2011, 2, 11, 00:54改訂)

第三艦隊 旗艦 戦艦『阿修羅』CIC

艦長

「くそ、エースだけあってそう易々とは墜ちてはくれないか」

オペレーター

「『八咫鳥』より入電、我方の攻撃に全くの手応えが感じられず。空軍に空中爆雷の投下要請を求む」

艦長

「空中爆雷・・・か。一考の余地はある。しかしながら奴に中るかが問題だな」

オペレーター

「巡洋艦『鞍馬』『飛蟬』被弾、駆逐艦『白雪』撃沈！」

オペレーター

「第5艦隊より戦艦『蜃気楼』及び駆逐艦5巡洋艦3が合流」

この時、なのはの出撃に因ってAMFが解除されている事に気付いた武装隊が各航行艦より出撃。対空砲火をくぐり抜け電磁防御性能が戦艦より低い駆逐艦や巡洋艦に取り付き攻撃を加えていた、しかしAMFの解除を知った戦闘域外の艦長達はほぼ独断で戦闘域に突入。管理局艦隊の迎撃を開始していた。

駆逐艦 『白根』 CIC

オペレーター

「敵艦隊の戦闘能力は未だ回復していないようです」

艦長

「そうか。やはり戦争は戦いが始まる前から下準備をしてからの方が被害が少なくて良い」

オペレーター

「まあ、敵さんには可哀想ですが・・・」

艦長

「ああ、これが戦争だからな」

管理局次元航行艦隊が次元の亀裂に飲み込まれこの世界に到着し降伏勧告を行ったとき、次元空間監視司令室では管理局艦隊へのハッキングが行われていた。その結果、航行システム、武装システムおよび通信完成システムに多大なる影響を与えることに成功した。しかしそれは航行艦の自己システム修復システムのせいだ。3時間少々しか効果がつくか無い事もあり一刻も早く管理局艦隊の全滅なし壊滅が望まれた。

統合作戦司令部

大高

「彼我の戦力差は今どれぐらいだ？」

オペレーターA

「敵大型艦20、小型艦25。外に出てきている局員は約70人。友軍戦艦38、イージス艦30、巡洋艦40、駆逐艦55、潜水艦20、超兵器は各艦種25。各艦の直援機5機、待機中の攻撃機は40機、空中管制機は15機です」

大高

「その全ての戦闘が可能か？」

オペレーターA

「はい、損傷して戦闘に耐えられないモノは外してあります」

大高

「気化弾頭弾は敵エースに対して有効打になりえているか？」

海軍参謀A

「それは難しいでしょう。少なくとも『阿修羅』は撃った8発中すべてが有効打と成っていません」

空軍参謀A

「ならば空中爆雷の投下はどうでしょうか？」

陸軍参謀A

「いや、向こうは多分撃ち落とそうとするだろう。そうなれば例えそのタイミングで起爆したとしても被害はあまり出ない」

海自幕僚A

「やはりAMFの復旧待ちに成りますかな？」

陸自幕僚A

「だとすれば後どれ位、彼らは無駄弾と知りながら撃ち続けること

になる。それならまだ対空砲火の方が効果があるのでは？」

大高

「そうだな・・・技術部に連絡。A M Fの再展開までの時間を報告させろ」

オペレーターB

「駆逐艦『不知火』撃沈！ 敵艦2隻撃破確認」

オペレーターC

「巡洋艦『風音』より入電。我機関への損害大なり、総員退艦セリ。戦艦『比叡』より緊急電。至急特務軍以外の全艦艇の撤退と航空隊の出撃を要請セリ」

味方艦から突然入ってきた緊急電に、その場にいた全員が息をのみそして耳を傾けた

海軍参謀長

「な！ 一体何があった？！」

空軍参謀B

「おい作戦空域の管制機すべてに状況を報告させるよう命令を出せ」

海軍参謀B

「馬鹿を言うな！！ 緊急電で来たんだぞ！ これがどういう事か判らないと言う訳じゃないだろうな！！」

空軍参謀A

「状況が混乱している、今は一旦状況確認をしてから・・・」

大高

「貴様ら落ち着かんか！！ 作戦空域の全管制機と艦隊旗艦に状況報告をさせろ、すべてはそれからだ！」

ミッドチルダ

戦闘開始から早数時間、その映像を見ている者は今はもう数える事が出来ないほどに成っている。そんな中突如として彼らの見知った二人組と見た事の無い軍人が映った。

「う、ウソ、だろ・・・」

「最新鋭艦だぞ・・・」

「これは作りものだ！！ 奴らの罠だ！！」

『違うぞ？ ここに映されている事は全て実際に起きている事だ』

「じゃあ八神少将とテストロッサ少将は・・・」

『君達が見た道理だ。まあ信じるかは君達の勝手だがね？』

「この悪魔が！！」

『ふん、貴様らに教えてやろう。これが戦争だ！！ 裏切り裏切られ、返り血を浴び、敵を殺し、味方を殺され。悲しみに暮れる暇もなく、敵に敬意を表す心遣いも無い！』

『それに先に手を出したのは貴様らだろうが！ こちらは警告し降

伏すれば丁重に扱うと指揮官に伝えた。しかし貴様らは、貴様らは逆にこちらの武装解除を要求してきた！！これがどういう事か判らぬ訳ではあるまい』

『さあ、貴様らが危険だと、クリーンでないと断言していらぬと言い、野蠻だと逃げ。知ろうとも理解しようともせず、はては仲間内からの忠告に耳を貸さずにいた付けだ。しっかりと受け取るがいい』

突然告げられた真実

認めたくない事実

それは今迄の驕りか

はたまた別の何かか・・・

第二十六部 サブタイトルが無くても困る人はいないと思う

救助用飛行艇US-2に乗って海域から脱出したはやてとフェイトは空軍基地の在る大和州神風基地に向かっていた。

はやて

「向こうどないなっとなやろな」

フェイト

「解らない、だけどね・・・」

はやて

「解つとる、解つとるんや、もう皆ん所に戻れへんことはな。私達がやったことは皆に対する裏切りや、しかしな無意味な戦いして命散らすんは何か違うんやないのかって思ってたな」

フェイト

「違う？」

はやて

「うん、今まで管理局は正義を語ってた。だけど何時やったかな？見てしまったんねん」

フェイト

「なにを？」

はやて

「フェイトちゃんはこの事知ってはならん、知ったらフェイトちゃ

んが報われん。やからフェイトちゃんにはこの事は言えん、解つてや」

はやてはそう言って押し黙ってしまった。

「八神少将、テストロッサ少将。これより着陸態勢に入ります座席に座ってシートベルトを締めていてください」

フェイト

「ねえはやて？ もし、もしはやてが見てしまった事を私に教えてくれるとしたら何時になる？」

はやて

「うーん、皆目見当つかへんわ。それに此の事を世間に知らせたら管理局と言う組織の存亡に関わるぐらいやからな。此の事は墓まで持っていくわ」

フェイト

「そう、なら仕方ないね。言いたくないっていうのを無理に言わせる訳にもいかないし・・・」

「着陸します、お二方多少衝撃が有ると思いますので舌を噛まないようにお気を付けください」

一方、その頃管理局艦隊と交戦中の海軍はどうとう最終兵器である超兵器での攻撃を開始しようとしていた。しかし彼らが保有する超兵器はヴォルケンクラッツァーやグロースシュトラールを改修し

各武装も軒並み強化され1隻で戦局を左右する程のモノと成っていた。

その良い例が6度の改造、改修が行われたヴォルケンクラッツァーであった。

嘗て樺太を南北に割り島を1つ消し飛ばした当時の面影は辛うじて残っていた、しかしそれは外見のみで主兵装としてあった波動砲は核融合炉を積むことで連射性能、威力、有効射程が総じて伸び。波動砲封じとして有効で有った艦首部分への攻撃は15式波動砲では全くの無意味と化した。

また発展改良量産型として双胴戦艦の艦首に16式波動砲2門と副砲としてプラズマ拡散砲を搭載した『荒神』は融合炉を10基搭載し100ノットと言う怪速に加え単艦で対空対艦対潜戦闘が出来るように搭載された兵器は70を超え海軍の1個艦隊といえども差し違える覚悟で挑まなければ沈める事は叶わずまさしく荒神であった。

さらにグロースシュトラールは100cm砲ではなく収束陽子砲を搭載しレーザー戦艦として新たに設計し直しヴォルケンクラッツァーと同様に核融合炉を搭載し連射性能を向上させている。

しかしヴォルケンクラッツァー然り荒神然りどちらとも味方艦を巻き込む可能性を持った兵器を持つ為、19式電磁防壁を搭載した戦艦以外は海域から脱出せねばなくなる。これは戦力が半減するという事だ、しかも19式を装備しえいるのは彼ら超兵器が所属する特務軍の海上部隊のみ。しかし彼らの手によって改造を繰り返された超兵器は抜けた戦力を補うだけで無く味方艦の減少と言う彼らが暴れる為に必要な“味方艦の被害を最低限に収める”と言う条件が満たされ100ノットの怪速で駆け回っても障害になるモノが

少なくなり設計上の理論値での戦闘が出来るようになるのだ。

そうして統合作戦司令部に緊急電で知らされた特務軍以外の全艦艇の撤退が司令部に緊急電で要請された。その事を知った統合作戦司令部は要請を快諾し大和州神風基地に双方向通信の準備をさせ、ミッドチルダに流れている戦闘映像に神風基地の映像と統合作戦司令部の映像を付け加え、はやてとフェイトの降伏を伝えた。

超兵器戦艦『荒神』 C I C

艦長

「味方艦の撤退状況はどうだ」

オペレーターA

「は、今は第一、第二艦隊と第二、第三護衛艦隊が撤退を完了し第四、第五艦隊はその半数が撤退完了しました。しかしそれ以外の艦隊の撤退率は50%代です、完全に撤退が完了するのには後30分かかります」

艦長

「そうか。砲雷長、各兵装はどうだ？」

砲雷長

「はい、今僚艦とデータリンク中です。データリンクが完了すれば攻撃目標の重複が無くなり周囲への被害もある程度は減るでしょう」

艦長

「そうか、引き続き頼むぞ」

オペレーターB

「敵接近！」

艦長

「長距離対空ミサイル発射」

オペレーターB

「長距離対空ミサイル発射！ 弾着まで300」

オペレーターB

「第5艦隊旗艦『敷島』より入電。我が第5艦隊は戦域を脱す。以上」

艦長

「あと30%・・・」

第二十六部 サブタイトルが無くても困る人はいないと思う（後書き）

本日2月11日は建国記念日です。

私はまだ学生の為休日ですが社会人の皆様は雪降る寒い中ご苦労様です。

私の家の方では今は雨ですが外気温は2℃暖房の無い私の部屋は非常に寒くキーボードを叩く指がだんだん白く、そして動きにくくなっています。

皆様、お体にお気を付けてこの3連休をお過ごしください。

P S

国の借金が2010年12月で919兆円に成っていたそうです。
しかも11年度末には1000兆円に成るとか・・・

第二十七部 神の咆哮 前篇（前書き）

今回非常に短いです。

ご了承ください

第二十七部 神の咆哮 前篇

超戦艦『荒神』CIC

オペレーターA

「第4艦隊より撤退完了の電文が来ました！」

艦長

「機関出力最大！ 取り舵、艦首を敵残存艦隊に向けろ。波動砲発射準備！」

砲雷長

「艦長！ 波動砲は対空攻撃は出来ません！」

艦長

「問題ない、こんな事も有ろうかと16式波動砲は出力を抑えれば仰角を最大で30度まで取る事が出来るように改良されている」

航海長

「機関最大、とーりかーじ」

オペレーターC

「機関最大、とーりかーじ」

砲雷長

「波動砲発射用意！ 仰角28！」

オペレーターC

「波動砲仰角28。波動砲発射準備完了」

艦長

「周辺海域及び空域の味方に警報発令、一隻一億は余裕で行くからな」

オペレーターB

「は！ 味方への警報を発令します」

砲雷長

「波動砲、うてえい！！！」

「波動砲、撃てえ！！！」

キュウイイイイイイ

艦長

「総員衝撃に備えろ！！！」

ヴォルケンクラッター C I C

オペレーターA

「超戦艦『荒神』より警報発令」

艦長

「警報？」

オペレーターA

「はい、どうやら波動砲を使う様です。しかし・・・波動砲は対空攻撃は出来なかった気が」

艦長

「いや、あの船の波動砲は仰角が30度まで取れる様になってるんだ。『荒神』に返信、了解これより射線上から退避する。砲雷長！我々も負けてはいられないぞ」

砲雷長

「は！！」

艦長

「初代波動砲搭載艦の意地を見せてやれ」

砲雷長

「は！！」

第9世代型特殊攻撃機『魁皇』 コックピット

『超戦艦荒神から警報が発令されたわ』

鳳凰1

「警報？ どういう事だ？」

『どうやら波動砲のようね・・・だけどここは射線外だから特に注意はしなくても大丈夫よ』

鳳凰 1

「そうか・・・ところで俺達は一切何時までこのまま待機してれば良いんだ？」

『仕方ないわ、待機も任務のうちよ』

鳳凰 1

「そうか・・・しかしなあ。せっかくの最新鋭機なのにな・・・」

鳳凰 2

『割り込み失礼』

『む・・・』

鳳凰 2

『司令部の友人が言うにはこちらから打って出る計画も有るそうだぞ？』

鳳凰 1

「お！ほんとか？！」

鳳凰 2

『おう、だけどまだ本決まりじゃ無いからな』

鳳凰 1

「そうか、じゃあ其れまでゆっくり待つとするか」

『ちよっとまだ作戦中よ！！』

鳳凰 2

『オーバー』

鳳凰 1

「な！！ 逃げるな！」

『荒神が波動砲を発射！！』

念のために高度300まで下りて！！』

鳳凰 1

「了解！」

第二十八部 神の咆哮 後編（前書き）

前話が非常に短かった為に連続更新です。

第二十八部 神の咆哮 後編

nanoha

始まりは小学生の頃だった。あの日助けて、と頭に響いた声。あの声が聞こえ始めてから私の生活は変わってしまった。

魔法との出会い、ジュエルシードを集め、最初敵対した彼女は今でも親しい友達・・・

闇の書やヴォルケンリッターとの戦いで初めて敗北と言うものを知った。相棒は修復しなければ成らなくなったけどカートリッジシステムを搭載してやっとともに戦う事が出来た。

はやてちゃんが創設した機動六課に出向しスターズ分隊の隊長と新人魔導師の教育官に成りあの子達との模擬戦の時はやりすぎたところでも後悔する。でもそのおかげで彼女が強くなってくれたことはうれしい。

ヴィヴィオを保護して母親代わりをしていた時にヴィヴィオが攫われた時は自分の無力さが身に染み込んだ。

そのあとのゆりかごでの戦いはフェイトちゃんの言いつけを破ってしまっても怒られた、だけどヴィヴィオを助けるためにはしやうがなかった。

機動六課解散後昇進提案があったけど辞退して戦技教導官の空戦魔導師として現場に立つことを望んだ、だけど今までの無理が経った

のかシャマルさんに長期の療養すめられたけど休んでも完治し無い可能性がある事を聞いてそのまま飛び続ける事にした。

その後ヴィヴィオの母親として過ごしながら管理局戦技教導隊でヴィータちゃんと共に教導に励みながらミッドでヴィヴィオと二人暮らしを続けた。新装備のテスト中に海上警備部の司令になったはやてちゃんから召集を受け旧機動六課のメンバーと特務六課を結成しエクリプス事件を解決した。

そしてその後もヴィヴィと二人で楽しい生活を送っていたある日、管理局の司令部から緊急の召集指令がかかった、あの時は質量兵器を大量に保有する危険な世界と言う認識しかなかった。

「なんで・・・ねえ。なんでなの？ フェイトちゃん、はやてちゃん・・・どうして？」

敵の罠にはまってしまい動きが取れないときに突然・・・いやその予兆はあった、だけど彼女たちはそんなことはしなないと思っていた・・・敵である彼らに降伏するという事を彼女たちが提案してきたのは・・・

彼女たちが言いたいことは判る、圧倒的な戦力差がある事は・・・だけどそのために私達が召集されて新造艦が与えられた、この状況で負ける事は無い。それに何回も私達は逆境を乗り越えてきた。だから反対した・・・周りのみんなが何か言っていたけど私は管理局の魔導師として、いや管理局の魔導師のプライドがそれを許さなか

った。

あの後彼女達は何かを決意した顔をして会議室を出て行った。それからしばらく彼女達の姿を見なかった。そして彼らからもう一度通信が来た、内容はやっぱり降伏勧告・・・だけど今回は違った最初は義務いや上司から命令されて仕方なしにやっているという業務の一環のような事務的な態度だった。しかし今回は同情や侮蔑・・・愚かなものを見る様な目と口調だった。

そして私は彼らとの会話中に突然出てきた映像に目を奪われた、其処には先ほど降伏を提案してきた彼女たちの姿が映っていた、そして一言何かを言った。私には一瞬理解できなかった、いや理解しなかった。そこからの出来事はよく覚えていない。ただ何時も道理にレイジングハートを起動しアースラの外に転移した。

そこで私を待っていたのはアースラを超えるほどの巨大な海に浮かぶ鋼鉄の要塞だった。

故郷である日本の国旗に似た旗を掲げ海を進む巨大なフネ、私の体はそれを敵と判断し攻撃を開始したどんな魔法を使ったのかは覚えていないが近づいてくる白い物体を幾つか撃ち落とし爆風を受けながら突き進んだ。途端にその場を離れなければいけない様な気がしてきて300mほど移動したら今まで自分が居たところに巨大な火球がいくつもできていた。

あの時避けなければいくらバリアジャケットが有ろうとも死んでいただろう・・・そう思うとなぜか怒りが湧いてきた・・・体が砲撃魔法を打つのに最適な場所を探し出しここ十何年かで体に染みついた電子音を聞きながら砲撃体制を取り、自分の最強の魔法を打った。今まで何回も使いあまたの敵を討った魔法を・・・

私は勝利を確信した。

そして次はどれを襲おうかと考え行動に移そうとした時に巨大な水飛沫が目に入った。ここでまた思考が止まった、おかしい目標は鋼鉄、幾ら海の上だろうと爆発が起らないのは可笑しい、と思い周りを見回してそれを見つけてしまい今度は体の動きが止まった。

其処には先程目標にし、今は沈み行くはずのフネ。

その鋼鉄のフネがそこに健在しこつちに巨大な砲を向けている様を。

「う・・・そ・・・」

超戦艦 『荒神』 CIC

オペレーターA

「敵艦撃沈」

オペレーターB

「我が艦の波動砲に巻き込まれた味方なし」

オペレーターC

「波動砲冷却開始、冷却完了まで10分」

オペレーターB

「船体に異常無し、搭乗員に死傷者無し」

オペレーターA

「残存敵艦艇12、管理局員10名」

艦長

「流石に波動砲2連打は無理があったか・・・しかし半数は落とせたな。融合炉の状況は？」

オペレーターB

「今調査が終わりました。融合炉、発電量に異常なし、機関室からの報告では一度精密検査の必要あり、ゆえに出力を75%に抑えると言う報告が来ています」

艦長

「速度を70ノットまで低下。砲雷長、今後は波動砲ではなくプラズマ拡散砲を使用するように」

砲雷長

「了解！」

オペレーターB

「ヴォルケンクラツァーより警報発令。波動砲を使用するものと思われます」

艦長

「本艦は射線上にあるのか？」

オペレーターA

「いえ、我が艦の前方550m先を通過するようです」

艦長

「ヴォルケンクラツァーは本艦から見て右舷側だったな？」

オペレーターA

「右舷前方25度480m先です」

艦長

「航海長、取り舵いっぱい！ 左舷側スクリュウの回転数を半分に、バウスラスター起動！緊急回避！！」

航海長

「は！！！」

超巨大戦艦 『ヴォルケンクラッツァー』 CIC

艦長

「味方への警報発令。砲雷長、波動砲発射用意」

オペレーター

「味方への警報発令完了」

砲雷長

「波動砲照準完了。それにしても何時の間に仰角が付けられるように？」

艦長

「3か月前に砲身のメンテナンス時に異常が見つかっただろ？ あ
の時に変えて貰ったんだよ。整備と技術部に頼んでな」

砲雷長

「変えたのなら教えてくださいよ・・・ん？　もしかして『こんな事も有ろうかと』って言いたかっただけじゃ・・・」

艦長

「飯田中尉、今は作戦行動中だ。私語は慎むように」

飯田中尉

「は！！」

オペレーター

「波動砲発射準備完了！」

飯田中尉

「艦長・・・」

艦長

「うむ」

飯田中尉

「波動砲、撃てえー！」

第二十八部 神の咆哮 後編（後書き）

今回で管理局との戦闘は一時終了です。

次回からは第一次世界大戦終結まで一気にいきましょうと思います。

第二十九部 次の一手

「これより先日中日海上空での管理局艦隊との戦闘および今後の対応について内閣総理大臣大高弥三郎氏より発表があります。ここで会場の皆様にご利用とご注意があります。今記者会見は最後に1時間分の質疑応答の時間があります、なので発言中に挙手などの行為はしない様お願いいたします」

「また発言に対して野次を飛ばすなど妨害と取れるような行為は国民の知る権利を侵害していると見做し会場から退場していただきます。以上で諸注意を終了します。それでは内閣総理大臣大高弥三郎様お願いします」

大高

「それでは管理局襲撃事件の報告記者会見を始めます。14日の朝、04時42分次元空間内で次元航行艦隊・・・これは我が国のモノです、と次元管理局側の艦隊が遭遇、接触当初次元航行艦隊は訓練航行期間中で実を使用しての戦闘訓練中に発生した次元の亀裂が発生。この時に管理局艦隊は何らかの、ええ・・・と、次元空間を移動するような事を行ったようです。その時に偶然が重なり中日海上空に出現。次元の亀裂の発生を観測した次元空間監視指令所は空軍にスクランブルを要請し大和州神風基地など5カ所から16式特殊攻撃機20機、15式制空戦闘機30機がスクランブル発進し空自も同様に15式迎撃戦闘機をスクランブル発進させ降伏勧告の後監視任務に就きました」

発言の合間、合間にフラッシュがたかれまばゆい光に会場は包まれ集まった記者たちは色めき立ち「聞き漏らすな」や「カメラのバッテリーは大丈夫か？」や「一面差し替えだ！　そうだ今会見中だ。何？！早く印刷機を止めさせろ」など一部は喧々囂々としている。しかし大高は淡々と用意された原稿を読み上げていった。

大高

「降伏勧告から一時間後の6時ですね。この時には海軍および海自の艦隊が海域に集結し陸自が周辺の住民の退避を完了しました。この時点で残りは47時間です。そして翌日の15日は空軍、空自は海軍、海自と共に前線で監視任務。陸軍は対空火器を海岸線に設置し迎撃用意を整えました、陸自も同様です。よく16日午後2時2分前に管理局員2名が投降したため派遣していた救助機がその2名の身柄を確保。15時に管理局艦隊に再度投降要請、しかし逆に武装解除を命令された為、投降の意思無し、と見なし攻撃を開始。そして翌日16日夜特務艦隊が攻撃に参加、この時点で海軍と海自の艦隊は中日本海から離脱しております。そして朝の7時管理局艦隊を殲滅し海上に居る生存者を保護し9時より海岸線の撤収作業を開始しました。此れも本日の午後5時に終了する予定です」

大高

「以上が今回の管理局艦隊襲撃事件の終始です。それではこれから質問に移ります。質問がある方は挙手をお願いします」

未だざわめく記者集団の中から紺色のスーツを着た男が手を挙げた

大高

「どうぞ、会社名とお名前を」

「共同新聞の佐藤です」

大高

「それでは佐藤さんどうぞ」

佐藤

「報復は有るのです？ 有るのでしたらどの様に？」

佐藤と名乗った男は端的にしかし重大な事を言った。その発言を聞き周囲の他者の記者達は一字一句聞き漏らさぬように口を閉じ総理の返答を待った。

大高

「当然、あります。しかし内容は此処ではお話しする事は出来ません。唯一つ言える事があるとすれば、彼らは二度と私達に係わろうとしないでしょう」

佐藤

「有難う御座います」

大高

「それでは他に」

ミッドチルダ

管理局艦隊の全艦が沈められてから1時間。

未だ周囲はざわついていた。しかし管理局の局員もこの騒ぎに気付き沈静化を図っていたが途端に

「あいつ等が攻めて来るんじゃないのか?!」

と言う声は何処からともなく聞こえてきた。そして段々と落ち着きを取り戻していた民衆にそれは広まって行った。

「今のは、何だったんだ・・・」

民衆の集団から少し離れた所であの映像が始まった当初からいる男が呟いた

「解らん、だが唯一つ言える事があるとすれば・・・」

その男の隣にいた男は苦虫を噛み潰した様に言う

「有るとすれば・・・?」

男は恐る恐る聞き返す

「反管理局組織の動きが活発化する、いや反管理局組織だけじゃない。ありとあらゆる窃盗団や違法魔導師たちが動き出す、少なくとも今の管理局はエース達が行方不明に等しい状況になっている以上、戦力は明らかに低下している。管理外世界でこれが映し出されているとしたとすれば離反や反発は防げん、しかも管理局が誇る最新鋭の艦隊が圧倒的大敗北をすれば管理世界であったとしても管理局に反旗を翻す可能性は出て来る」

「じゃあ如何するんだ? このままいつ来るのかも解らない様な状

況で日々怯えながら暮らすのか？」

「さあな、俺には解らんし関係は無いことだ」

「何・・・どういう事だ？」

男は突然、懐から何かを取出し10秒ほど操作し又それを懐にしまった。

「それじゃあ達者でな」

「おい、ちょ待て！」

男はそう言って消えてしまった、まるで霧が晴れるかのように

「何だったんだアイツは」

時は数日流れ

12月17日 午後9時30分

大日本同盟 扶桑州 北海道 千歳空軍基地

『北部司令本部よりより各員、北部司令本部より各員。整備班はハンガーに集合、パイロットは搭乗機体A Iと共にブリーフィングルームに即刻集合せよ。繰り返す整備班はハンガーにパイロットは搭乗機のA Iと共にブリーフィングルームに即刻集合せよ』

大日本同盟 扶桑州 北海道 千歳空軍基地 ブリーフィングルーム

ブリーフィングルームには千歳空軍基地に所属するパイロット総勢35名が着席していた。

全員が資料を読み進める中、不意にブリーフィングツームの入り口の扉が開く音がした

「全員集まっているようだな」

ガタガタガタ

さっ

その声に反応して全員が席から立ち上がり敬礼をする

「うむ、楽にしてくれ」

後から入って来た50代の男性が答礼と共に告げた

「諸君、資料はもう読んでいる事だろう。今回の任務は非常に危険が伴う、よって志願制と成っている、我こそはと云う者だけ此処に残ってくれ」

50代の男性は今回の作戦への参加志願者を募った。しかし一向に誰も立ち上がろうとしない。

「司令は我々が何の為にこの場所に居るのか忘れてしまったのでしょうか？」

パイロットの中の一人が言う

「そうだな、我が千歳基地は全員出撃だな。それではもう一度作戦を見直す、各員手元の資料を開いてくれ」

その日の晩、各地の空軍基地から国民に広く知られたエンブレムを付けた部隊が星の輝く空に向かって消えて行った

12月 19日 オーストリア

「陛下!!」

フランス・ヨーゼフ1世

「どうした?! 敵襲か?!」

「いえ、セルビアから講和会談開催の要請を受け入れるとの返事が!!」

フランス

「おお! そうか、そうか。よかった・・・これで私は大切なモノを喪わなくて済む」

「陛下、まだ安心するのは早いですぞ」

フランス

「そうだな・・・」

「はい、我々が講和しても他国が納得しないでしょう」

フランチ

「そうか・・・ドイツにはまだ日本の関係者は居るのか？」

「解りませんが・・・どうしてですか？」

フランチ

「ならばセルビアからイギリスに居るはずの日本の関係者に連絡が取れると思うか？」

「それならば何とか成るでしょう・・・もしや陛下」

フランチ

「何とか接触できれば良いのだが・・・」

第二十九部 次の一手（後書き）

40分の遅刻ですね・・・次は何とか間に合わせたい

第三十部 オペレーション・ブローケンハート

『欧州戦線に早期終結の可能性あり』

管理局艦隊との戦闘が終了してから3日たったある日欧州各国に潜入している陸軍の特殊潜入部隊から突如入って来た情報だ。詳しく見るとアーストリアがセルビアを通じて接触の可能性あり、のこのとだ。

一般人からすれば余り価値の無い情報だが外務省の職員である私からすれば無視する事の出来ない貴重な情報だ。相手の情報が1日でも早く伝わるだけでこちらの対応をいかようにでも変える事が出来る。さてオーストリアがセルビアを通じて接触してくるというのなら世界平和の為協力は惜しまない、と言いながら両国の講和を全面的に支持しながら欧州での利権確保に奔走する事に成る。

反対意見は生まれないなぜならそろそろクリスマスだからだ、情報によるとクリスマスまでに終結させると欧州各国の首脳陣は国民に発表している、それを押し切ってまで戦争を続けるならば今度は本気で此方が介入するまでだ、世界平和の旗の下あっけないほど容易に捻り潰す事が出来るだろう。何せ今の日本はすべての分野で世界第1位を独走している、どんな国でも一捻りに違いない、もったも戦争を続けるような国は無いと思うが・・・

しかし問題は未来の事だ、この時代から影響力が強すぎると21世紀で必ず面倒事に巻き込まれる事は必須。なぜなら少なくとも物事には責任が発生する、其れは実行した者に強く押し掛かり逃げられなくなる、そうなると国内からも転移に反対する声上がるのは必須だろう、国立図書館には過去の世界での事が細かく書かれた資料

が保存されている。

その中に唯一の転移反対運動が起きた事が記されていた、それは民族問題や国境紛争の調停役としての責任が元で起こされたもので当為の内閣や国連は何とか世界第2位にあったロシアとアメリカに後任を任せた。

しかしその事は世間には発表してはいなかった(当時中国がチベット問題で軍事衝突を日米ロの3国と時々起こしていたからだ)そのせいで3日転移が遅れたことは先遣隊として送っていた部隊にひどく恐怖と絶望感を与えた事だろう。

その為今まで政府は転移直前にまで解決しない様な事には介入しないという手段を取り始めた。その為今回のドイツ侵攻も裏では喧々囂々の大議論が行われた事だろう。

『大日本同盟の発展と栄光』第2章 第3節 なぜ彼らは転移を繰り返したか より

18日 午前9時

大日本同盟 首相官邸

大高首相

「さて、欧州での戦争だが我々が管理局との戦闘中には特に大きな事は起こってはいない。しかしオーストリアとセルビアに講和の可能性ありとの報告が上がってきている。よって此処で今回の派遣で

の我が国の今後の指針を決めて行こうと思う、この指針はセルビア、オーストリアの講和時に要求する事に関係してくるので各省庁や国内の不満などを上げて行行ってほしい」

柊国防大臣

「欧州派遣軍団は貴重な戦術、戦略訓練が出来たと末端まで喜んでいますが、また管理局との戦闘で『ヴォルケンクラッツァー』の主砲が16式波動砲に換装されていた事が判明しました」

金本財務大臣

「こちらからすれば物凄く頭が痛いのだがね？」

金本は嫌味を多めに込めて柊に視線を送る

小林外務大臣

「逆にこちらは仕事がいそいそ、やっぱり経済力と軍事力が背後にないと不安だね」

西野経済産業大臣

「ですが金本さん、今回の派遣で食料品に弾薬、燃料の新規購入や武器の部品、各種車両と航空機の部品の需要が出来たので経済効果も多少は期待できますよ。軍需品は基本的に民間企業に受注しますから税金で帰ってくるでしょう」

金本

「だいいいのだが・・・」

高山内務大臣

「国内の問題は一部を除いて出てはいませんが、賠償金なども平和維持の為の派遣としてしているので今後の復興に一枚噛ませて貰えば土建

が潤うので静かに成るでしょう、問題は中日本海の漁師たちですね」

三島農林水産大臣

「ええ、今回の戦闘で中日本海の漁師たちは半強制的に追い出しましたから・・・何とか埋め合わせをしなくては」

大高

「とれた海産物を日本国民党の方で買い取っては？」

小林

「確かに漁師たちの為と言えば聞こえは良いでしょうが、どうやって消費するんですか？」

金本

「野党の奴らと欧州戦線終結パーティーでも開くか？」

西野

「良いですね」

三島

「野党も巻き込めば無駄遣いと叩き難くなる、しかも高級食材とはいえ今回の戦闘の被害者の救済の為の出費。反対すれば国民から白い目で見られるのは間違いないな」

大高

「ならば日本国民党の党首の小林外務大臣に一肌脱いで貰うとしますか」

小林

「本気ですか?!」

「「「「もちろん」」」」

小林

「・・・解りました党執行部に要請しましょう」

「「「「「酒だ！ 宴だ！ うまい料理だ！」」」」」

小林

「おい、ごらあ。この糞親父共が！！」

大高

「おや小林君、そんな口きいてもいいのかな？」

小林

「そちらこそ、こちらがこの件断ったら如何するんですか？」

大高

「もちろん私のポケットマネーで「有難う御座います！」違うわ！
！ 全く！！」

佐藤厚生労働大臣

「そろそろ、記者会見の時間ですよ。総理」

大高

「ああ、それでは講和会談出席の見返りに復興の為の利権確保、中
日本海の漁師には日本国民党の名前で海産物の買い上げを、買い過
ぎない様に気を付けてくれ。今回の件での損害が埋め合せられる程
度で良い、買った海産物は野党各党の上層部との講和記念パーティ
ーで消費する。それと『ヴォルケンクラッツァー』の艦長には追っ

て処分を下す、今回は此れで以上か？」

柊

「総理、昨夜出撃した特殊攻撃機の事と救出した管理局員の処遇は・
・・」

大高

「おお、そうだった」

金本

「なんかまた支出が増えそうな・・・」

柊

「特殊攻撃機自体は前々から訓練内容に入っていたから全損で帰ってきてても想定の範囲内です」

金本

「そうか・・・で管理局員は如何するお積りですか総理」

大高

「一度、統合演習を見せてから返そうと思う」

小林

「ミッドチルダに、ですか？」

大高

「ああそうだ、彼らも瓦礫の山となった故郷を見れば無力感に苛まれ復讐心を喪うだろう」

佐藤

「恨まれそうですがね」

大高

「その時は自分たちが井の中の蛙であったことを恨んでもらうよ」

三島

「ところで特殊攻撃機について教えて貰っても？」

大高

「そうだな、今のところは技術研究開発用の開発未完了機だ」

三島

「その正体は？」

柊

「国防総省航空機研究開発機関と各社がロマンを求めて創り出した第七世代機ですよ」

西野

「第七世代機？ 15式戦闘機やF22が第五世代機で16式が第六世代機でしたよね、柊さん」

柊

「ああそうだ。しかしこいつには光学迷彩が搭載されている機体自体は15式をステルス化させただけだが塗料には低電波反射性の物を使っている為多少のステルス性は有している」

佐藤

「いつの間にそんな技術を・・・で、どこの部隊が？」

柊

「エンジェル、グリフィス、メビウス隊の3部隊だ」

佐藤

「なら被撃墜は無いでしょうな」

柊

「ええ、AIも積んでるようですから」

三島

「電力不足は解消できたんですか？ 確か15式の時もそこが問題でAIの搭載は見送ったのでは？」

柊

「アトムトランジスタを改良したそうです。その為十分の一に抑える事が出来たそうです」

金本

「コストは？」

柊

「新しく創るよりは安くなりそうです、今の機体は15式ですので16式を改造すればコストは低く機体性能はもっと良くなると思います」

金本

「そうですか・・・」

第三十部 オペレーション・ブローケンハート（後書き）

来週はテストのため更新はできません。ご了承ください。

第三十一部 平和への道、騒乱への道

12月21日

首相官邸

大高

「イギリスに派遣している外務省職員からセルビアからオーストリアとの講和会談に出席してもらいたいとの要請が来たそうだ」

小林

「これに対してわが国が取るべき対応は二つだ、拒否するか嬉々として参加するか」

大高

「此れはこの国の今後に係わる事案だ、よってこの件は国会に上げなければならない。そこで内閣としてどちらを取るのかを決めておきたい。参加に反対する者は挙手してもらいたい」

大高

「居ない様だな、それでは講和会議への参加を閣議決定する。それと講和会談に出席する人員だが・・・」

小林

「イギリスに滞在している外務省職員で良いのでは？　そうでなければ私が行きますが・・・」

大高

「いや、どこから聞いたのか陛下自らが出席する、と」

金本

「は？」

大高

「宮内庁長官の佐竹さんからじゃなくて陛下から直々に、な」

高山

「はあ」

三島

「で、了承したのですね」

大高

「ああ、仕方ないだろう電話が来たんだからな」

一同

「ううむ」

12月22日 イギリス 某公園

寒く静かな公園に二人の男がベンチに座っていた。片方は若い東洋人そしてもう一人は初老の西洋人

東洋人

「先日本国に問い合わせた所、例の件お受けする事に成りました」

西洋人

「そうですか、これで我が国の民も安心して生活を送る事が出来る様になります」

東洋人

「それで当日の場所なのですが・・・」

東洋人の男が懷から折り畳まれた紙を取出し初老の男に渡した

西洋人

「ここは・・・港、ですか？」

東洋人

「ええ、そうです。こちらが出席するに当たりそちらに提示する第一の条件です」

西洋人

「そうですか・・・解りました、伝えましょう」

東洋人

「ええ、それではまた当日お会いしましょう。」

西洋人

「ええ、其れでは」

そうして二人はベンチから立ち上がり全く逆の方向に歩いて行った、しかしお互いに数歩歩いた時、突然東洋人の男が

「ああ、言い忘れていました。このことは出来るだけ早く皆さんに教えた方が良いでしょう、本国もそれを強く望んでいます」

西洋人

「解った、そうしよう」

東洋人

「ええ、その方が良いでしょう。其れでは失礼」

12月24日 某港

そこには正装した二人の男が辺りを警戒しながら立っていた

「おい、本当に此処なんだろうか？」

「ええ、此処が指定された場所です」

「しかし何も無いじゃ無いか！！ いったい彼らは何を考えてこの場所を指定したんだ」

ブクブク

「おい、今何か聞こえなかったか？」

「もしかやこの場所が誰かにばれたのか？」

「そんな訳が無い・・・見張りもいるんだぞ」

「じゃあ一体なんだ・・・」

ブクブクブク

「おい、海だ。海を見ろ！」

「泡？・・・一体、なぜだ？」

「あそこだけ色が濃い？ いや何かいるのか！」

「なに！ どういう事だ！！」

「おい、大きくなるぞ！！」

「な、なんなんだ・・・」

「くじ・・・ら、か？」

潜水艦『王龍』艦長室

艦長

「ようこそ大日本同盟海軍所属潜水艦『王龍』へ。艦長のひわだ松皮少佐です、今回はあなた達の送迎役を任されました」

「ああ、オーストリア・ハンガリー王国特務大使のハインリッヒ・ラマーシュです」

桧皮

「よろしく」

ハインリツヒ

「こちらこそ、それにしてもこんなフネがあったとは・・・」

桧皮

「それは失礼しました、驚かせてしまいましたな」

ハインリツヒ

「いえいえ、まさか海中から出迎えが来るとは想定していなかったもので」

「貴軍にはこのような装備が他にも有るのですか？」

桧皮

「すみませんが一応軍機ですので」

『レーダーより艦内、レーダーより艦内。空母『双龍』に接近』

桧皮

「着いたようすな、それでは行くのでしょうか皆さん」

ハインリツヒ

「着いた・・・？」

ハインリツヒは隣に居た男に目線を送る

「さあ？」

桧皮

「さ、外に出るとしましょう」

空母『王龍』 飛行甲板

桧皮

「潜水艦『王龍』艦長、桧皮重成少佐です」

「空母『双龍』艦長、越前流哉大佐だ。護送任務ご苦労」

桧皮

「艦長自らのお出迎え感謝します。後ろの二人がオーストリアからの特使です」

越前

「うむご苦労、中ではセルビアからの特使が待っている。うちの士官たちに案内させよう、おい！ 誰か！」

士官

「「は！」」

士官

「講和会議場まで我々が案内いたします、其れではこちらへ」

越前

「さて、桧皮。久しぶりだな」

桧皮

「はい、艦長もお元氣そうで」

越前

「まあ、とにかく中に入るとしよう。うまいコーヒーを入れる奴がいるんだ」

桧皮

「そうですか、それはとても楽しみです」

ミッドチルダ 上空

『こちら空中管制機【月詠】エンジェル隊、グリフィス隊、メビウス隊の順番に給油を開始しろ』

「こちらエンジェル隊、メビウス隊後方警戒を警戒してくれ」

『こちらメビウス隊、了解した。貴隊の援護に入る』

今回の任務は管制機からの指示とそれに伴う動きを僚機や他隊に伝えるとき以外は無線封鎖のため無線のスイッチを切っている

「ふう、ミヤ給油を開始してくれ」

【分かったわ、ちょっと待ってね。機体コントロール掌握、尾翼水平、スロットル通常位置、燃料タンク閉鎖、給油態勢完了。所属基地に給油要請・・・要請受諾確認。給油開始・・・給油完了まで2

0秒】

「ミヤ、機体各部の動作確認」

【了解・・・弾薬庫、エンジン、吸気口、排気口、装甲、対空レーダー、IFF、20mmバルカン、フラップ・・・機体確認完了、異常は有りません少佐】

「了解、給油完了まで後何秒だ？」

【あと3秒・・・給油終了。機体のコントロールをパイロットに返還】

『エンジェル隊給油は完了したか？』

「こちらエンジェル1給油完了」

『了解』

無線は空中管制機とのチャンネルしか開いていないため他の僚機との交信は出来ない、管制機を通せばできるが。

『こちらグリフィス隊、エンジェル隊援護してくれ』

「了解」

第三十一部 平和への道、騒乱への道（後書き）

三陸沖での地震発生から一週間・・・早いものです。

与党の鈍足の対応については強い怒りを抱いております・・・

被災地の皆様に一日でも早く安堵の日が訪れる事を願っています。

第三十二部 開幕

ミッドチルダ 上空

月詠

『こちら空中管制機月詠、メビウス、グリフィス隊各機は、都市部への爆撃準備に移れ、エンジェル隊は対空戦闘準備。光学迷彩と機体各翼のチェックを怠るな、一瞬の油断が命取りになるぞ』

エンジェル1

「エンジェル隊了解」

メビウス1

『メビウス隊了解』

グリフィス1

『グリフィス隊了解』

月詠

『作戦開始まであと数分だ。各員自機のチェックを怠るな、今乗っている機体は先進技術開発機、通称F Xに使用されている先進技術が大量に使われている。その為不具合が起こる可能性が十二分に有る、とくに光学迷彩はその筆頭だ。目くらまし抵度だと思っておけ。それと無線封鎖を解除する、各員周囲の状況には注意するように。以上だ』

グリフィス2

『こちらグリフィス2。目標を目視で確認、指示を』

月詠

『こちらでも確認した。メビウス、グリフィス隊各機に爆撃コースの情報を送った、A Iと確認してくれ。今から5分後より爆撃を開始する。各隊は光学迷彩のスイッチを入れておけ、しかし何度も言うが過信はするな』

北海 空母『王龍』 路下

オーストリアからの全権大使2名が同盟海軍の士官2名の後ろを歩きながら周囲を興味深げに見ながら進んでいた。そして士官2名の後ろを歩くこと数分。ようやく会場に着いたのか先行していた2名が歩みを止め、自らの制服を整えた後、意を決したように先頭を進んでいた25、6の若い男が鋼鉄製の一見頑丈なドアをノックした

「大日本同盟海軍所属空母王龍航海士、海山中尉です。オーストリア全権大使2名をお連れいたしました」

『入りなさい』

部屋の中から初老の男性の声が聞こえて来た。

多分入室の許可を取り部屋の中からの声はそれを許可するものだろう。

あいにく私は日本語を話す事も理解する事も出来ない、その為彼らの母国語たる日本語での会話は私にとって難解な暗号文でしかないが私はそう思った

「失礼します」

どうやら私の読みは当たったようだ。先頭の男がドアを開け室内に入って行く、もう一人の案内人が入るのかと思った、がいつの間にか開いたドアの向う側においてその様子から室内には入らないようだ。そんな事を考えながら私は自らの戦場となるであろう案内された部屋の中に視点を向けた。

ミッドチルダ 上空 エンジェル1 コックピット内

ついにここまでやって来た。

中日本海では空中警邏しか仕事がなかったが・・・空は俺達の庭だ、そしてこの機体があれば・・・

月詠

『こちら空中管制機月詠、迎撃の魔導師を発見した。エンジェル隊は応戦だ。メビウス、グリフィス隊は爆撃コースへ行け』

月詠

『メビウス隊各機へ光学彩を維持したまま東側の建物への爆撃を行う。各機僚機との間隔を取り違えるな』

グリフィス1

『グリフィス隊各自爆撃コースへ、目標は西側の建物だ』

エンジェル1

「エンジェル隊、魔導師の後につくぞ。各機A R Sを切れ、レーダーで僚機との間隔を確認しながら敵の後ろに周るぞ」

さあ管理局の諸君、君達は一体誰に喧嘩を売ったのか・・・理解してもらおうか

月詠

『空中管制機月詠から各機へ、敵の数は凡そ30だ。向うには対空レーダーのような物が無い様だ一直線にこちらに向かってくるぞ』

グリフィス2

『ふん、天使とダンスでもしてな』

エンジェル1

「管理局員の諸君、天使とダンスだ！^{我々}」

BGMは何にしようか？ 君達へのレクイエムだからな・・・

月詠

『グリフィス、メビウス隊に告ぐエンジェル隊が応戦している間に爆撃を完了させろ』

エンジェル1

「敵の後ろについた、エンジェル隊各機は光学迷彩を切り攻撃を開始せよ。殺さなくても良いやつらを混乱させるだけで十分だ」

さあ、ダンスのはじまりだ。踊り狂え魔導師！！

『こちらグリフィス3、エンジェル隊各機へ奴等をこっちに来させるな』

『こちらメビウス1、爆撃開始地点まであと20。各機弾薬倉開け』

『エンジェル3、FOX3』

『こちらグリフィス1。爆撃開始地点に到達した。各機攻撃を開始せよ』

グリフィス1 コックピット内

月詠

『こちら空中管制機月詠、迎撃の魔導師を発見した。エンジェル隊は応戦だ。メビウス、グリフィス隊は爆撃コースへ行け』

月詠

『メビウス隊各機へ光学彩を維持したまま東側の建物への爆撃を行う。各機僚機との間隔を取り違えるな』

グリフィス1

『グリフィス隊各自爆撃コースへ、目標は西側の建物だ』

グリフィス1・・・オーレリア空軍のエースパイロットのコールサイン。まさか自分のコールサインに成ると思わなかったな、おかしいものだ

エンジェル1

『エンジェル隊、魔導師の後につくぞ。各機ARSを切れ、レーダーで僚機との間隔を確認しながら敵の後ろに周るぞ』

さて俺達大日本同盟空軍のエース部隊相手にどこまであらがえるかな？管理局の魔導師諸君。せめて一機ぐらい墜として見せろ

月詠

『空中管制機月詠から各機へ、敵の数は凡そ30だ。向うには対空レーダーのような物が無い様だ一直線にこちらに向かってくるぞ』

グリフィス2

『ふん、天使とダンスでもしてな』

エンジェル1

『管理局員の諸君、^{我々}天使とダンスだ！』

月詠

『グリフィス、メビウス隊に告ぐエンジェル隊が応戦している間に爆撃を完了させろ』

エンジェル1

『敵の後ろについた、エンジェル隊各機は光学迷彩を切り攻撃を開始せよ。殺さなくても良いやつらを混乱させるだけで十分だ』

もう後ろについたのか？ 早すぎるだろう、もっとあがかないと・

『こちらグリフィス3、エンジェル隊各機へ奴等をこっちに來させるな』

『こちらメビウス1、爆撃開始地点まであと20。各機弾薬倉開け』

『エンジェル3、FOX3』

「こちらグリフィス1。爆撃開始地点に到達した。各機攻撃を開始せよ」

さて新しいのは機体だけではない・・・試作対地新型弾頭ミサイルの試験を始めるとしよう的ぐらいには成ってくれるよな

グリフィス1

「各機AGMで攻撃を開始する、隊形を対地爆撃用に変更。各機AIに変更後の隊形を送る、ARSを切っておけ」

メビウス1 コックピット内

「メビウス隊各機へコースのまま、機体高度をあと100下げろ。使用弾薬を六七式誘導多弾頭爆弾に切り換えデータリンクを開始、目標を重複させるな」

コックピット内にロックオンを表す電子音が流れヘルメットに目標との距離と高度が表示される。

そしてHMSにSHOOTが表示される

メビウス1

「投弾開始。投下後は各員自由意志で攻撃、ただし対空戦闘はするな、エンジェル隊とFOX4するぞ」

俺はそう言い終わるや否や赤く塗られたスイッチを右手の親指で押す。

誤射を防ぐ為のカバーはすでに押し上げてある。そして機体が僅かに上昇したのを確認し弾薬倉を閉じすかさず上昇する。

メビウス3

『メビウス1、それは無い。俺達の機体は対地攻撃用の爆弾とミサイル、自衛用の機関銃しか無い』

月詠

『空中管制より各機へ。メビウス、グリフィス隊の攻撃が始まった、戦果は十分新型ミサイルの攻撃力も十分にデータが採れた。このまま敵に注意しつつ自らの任務を遂行せよ、因みに今の攻撃で敵目標の大半が破壊された。敵の増援が無い場合このまま引き上げる事に成るが決して遊ぶなよ』

俺は自らの機体の後方とレーダーを確認し僚機がちゃんと着いて来ているかを確認し操縦桿を押し倒した

S a i d 魔導師

「いそげ、これ以上奴等に攻撃させるな。管理局に敗北は赦されん！いいな全て落とせ！ 全てだ！」

敗北は赦されないだと・・・先の戦いで何隻ものフネが奴等の手によって沈められ出撃した局員が全員未帰還なのにか。誰がどう見ても敗北しているのにそんなことを・・・

「向うは一機だけだ、すぐに落せる！」

―機ということは向こうは偵察に違いない本隊は違う場所に居る筈だ。だと言うのにこいつは目先の戦果にしか興味が無いのか。

「糞が・・・あれは偵察だ。本隊がどこかに居る筈なのに、奴はそれを考えていないのか」

隣を飛んでいる同僚が毒づく。

俺と同じことを考えている、そしてこいつも本隊の場所で頭を悩ませている。

敵までかなり近づいた時、今まで聞いた事の無い音が前から横へそして後へ飛んで行った。

「今のは？」

思わずその場に止まってしまった、その瞬間俺のすぐ脇を“何か”が通りすぎた、その一瞬後灰色の幾つかの影が横を通った。思わず後ろを振り向くと其処には腕を失った今さっき迄上司に毒づいていた同僚がいた。

いや、其処に居た・・・

「おい、あそこだ！」

後ろから聞こえた声に咄嗟に反応し自らの頭上を見る。

だがそこには雲一つ無い空、あわてて首を回し近くの仲間の見ている方向に目を向ける。しかし下から聞えた爆音にその視線は向けられ、仲間が何を見ていたのか解らないまま“さっきまで自分達が居た場所”が燃えていると言う現実を目の当たりにした。

北海 空母『王龍』内ブリーフィングルーム

『よく来てくれた、さあそこが君達の席だ』

覚悟を決めて入室した私を出迎えたのは私にとって最も慣れ親んだ祖国で使われている言葉だった。

『どうかしたのかね？我が国の海兵が何か失礼な事でも？』

おもわず立ちつくしてしまったのは仕方ない事だろう。

まさか英語ではなくオーストリアで使われている言葉だったのだから。

「いえ、何でも。お気に為さらず・・・」

その時の私にはそう言うことしか出来なかったのは誰も責めないだろう。私には向こうが使うのは英語だろうという先入観があったのだから。

『そうですか、それでは全員揃いましたのでこれよりオーストリア、セルビア間での講和会議を始めましょう。議長は大日本同盟今上天皇である私が行う。なおこの場で締結される条約に立会人として署名する用意が私には有る』

その後彼は何か他の言語で喋っていたようだが私の頭の中では“大日本同盟今上天皇”という言葉が何度も何度も反響していた。この

場で締結された条約に署名する用意があると言った事も私を混乱させたが何よりもこの船に彼が乗っている事が更に私を混乱させた。

第三十二部 開幕（後書き）

光学迷彩

簡単に言えば透明人間。

俄か軍オタはステルスをご理解してこちらだと思い込む。

A R S

A n a n t i - R a d a r S y s t e m

（対レーダー、アンチレーダー、レーダー無効化システム）

ステルス迷彩を機体の形状、塗料関係なく実現させるためのシステム。

F o x 3

自機が機関銃を発射したときに友軍機にコールする符丁。

A G M

A i r - t o - G r o u n d M i s s i l e （空対地ミサイル）

此処では試作対地新型弾頭ミサイルの事。

六七式誘導多弾頭爆弾を小型化し弾頭になっている。

六七式誘導多弾頭爆弾

（六七年正式採用セミアクティブレーダー誘導型多弾頭投下爆弾）

クラスター爆弾を小型化し子弹の散布界を縮小したため不発弾が減少した。

H M S

H e l m e t M a u n g t e d S i t e

ヘルメットに映像を投影できる装置を組み込んで、ハーファミラーに照準や関連する情報を映し出す。

F O X 4

F O X 1などを揶揄した隠語。航空機によるニアミスなどを意味する。この場合は異常接近して接触し墜落、もしくはベイルアウト（機体外への緊急脱出）を指した。

操縦桿を押し倒す

手前ではなく奥に倒すこと。

現在の航空機のほとんどが手前に倒すと上昇、奥に倒すと下降する。旧日本陸軍の航空機は逆だった。

第三十三部 彼らの戦いはこれからも続く（前書き）

小説家になりましたでくそ吹いたわ

第三十三部 彼らの戦いはこれから続く

北海 空母『王龍』 ブリーフィングルーム

王龍のブリーフィングルームではオーストリア、セルビア両国から派遣された大使が条約文に目を通していた。

無論仲立ちをしている天皇陛下の手元にも日本語で書かれた条約が置かれている、しかしそれをすでに読み終えてしまったのか今は両大使の顔を見比べている。いや見比べるというよりも見守る、と言った方が正しいだろう。

この会議の行く末を・・・しかし見られている2人は気が気で仕方が無かった。列強の一角であるフランス、イギリス、ロシアを相手に苦戦させたドイツを一瞬で打ち破った国の王が仲立ちをし、その条約に署名すると言うのだ。

ここまで来て署名出来ない等と下手な事を言ってしまったら戦争が長引くどころか敵を増してしまう・・・最悪国に帰った途端、牢獄に入れられる事は無論の事、末代まで怨まれることであろう。

少なくとも大日本同盟はこの時代の、いやこの世界のどの国も足元に及ばない程の大国であり強国だったのだ。

大日本同盟 扶桑州 箱根 某所

昔話をしよう・・・

未だこの地が日本国だったときの事、この地に一つの研究施設が造られた。

その名は『先進情報技術研究所』外向きは新型スパコンの開発。

日本中から技術者が招かれ国や大学、文科省などの援助を受けながら研究をしていた。

しかし内実は他国の軍や政府機関へのハッキング、クラッキングおよびその為のPCやサーバーの作成や偽装。確かにこの研究所での技術が民間に意図的に流され新型スパコンや新世代のメモリやCPUが開発された。

しかし内側での研究は非常に巧妙に隠されていた。

だがそれは大日本同盟に加盟し数年が経った時に突如として明るみに出た。

始まりは突然だった、大日本同盟 大和州にある第日本同盟陸軍の第一サーバーがシステム障害を起こした、当初は原因不明とされアクセスの全面カットと言うベターな対処が取られた。

管理者たちはすぐさまサーバーのメンテナンスを開始した、そしてデバッグ作業が行われた彼らはマニュアル道理に最初管理用の内部端末からウイルスを流した。

そのウイルスは設定された日時以降に更新されたファイルを検出し

削除ではなく破損フォルダ、もしくは破損ファイルに変換しアクセス出来なくなる一時世界的に流行したウイルスを改変した者だった。

そして流されたウイルスはサーバーのメモリ、HDD、マザーボードのチップなど記憶領域の有るすべての場所に流されどのフォルダ、ファイルにも感染せずに自滅した。

管理者達はOSのチェックを始めた。ウイルスは設定された日時以降のファイル、フォルダを破損させる、アプリケーションならばアクセス不可能になると機能停止する。その為使用後一切の駆除をせずに再起動が出来る少なくとも自爆した場合、対象に改編された痕跡が無い事に成る。

その場合、経験ではなく記憶に誤りがあるという事に成る。

こうなったときは人間の手によってシステムのデバッグをしなければならぬ。しかし何時間、何十時間経っても一向に原因が見つからなかった。

当初彼らはサーバーがダウンした原因をハッキングによるウイルスの感染だと思っていた、しかしウイルスによるシステムの改竄の後には検知されなかった。

大日本同盟 国防省

「それで、原因は不明・・・何者によるものかも不明、結局何も解らず仕舞い」

「サーバーを放棄するしかないのか？」

「原因が解らんのだから仕方あるまい」

「ふむ・・・外部からのアクセス履歴はシャットダウンの3日前。施設課の建設機械の更新のみ」

「内部からの改竄の可能性は無いのか？」

「そうならば履歴に残る・・・向こうは相当のやり手に違いない」

「いや管理者の場合すべてのファイルをチェックできるから・・・」

「それがどうした？」

「確かシステムの設定上閲覧も更新と同じ扱いになっていた筈」

「管理者権限を持っているのは陸軍の各課の課長以上だ、ログイン履歴を洗い直すしかないな・・・」

国防省での会議から3日後、ついにハッキングの犯人が特定された。ハッキング元はアメリカ合衆国、しかしこの世界ではまだインターネットは構築されていない。

その為自然とハッキング元に逆ハッキングする計画が立てられ、大日本同盟各州の行政機関や大学、大手企業へと協力を要請した。大学や大手企業からは断られたが行政機関は有る一カ所を除いて協力が得られた。協力を拒んだのは扶桑州の研究施設、当然疑いが掛けられ警察や公安の調査が入った。

後は言わずもがなでその研究所の所長以下研究者の殆どが逮捕、拘束され国家防衛法や国家公務員法など各法令違反により投獄された。その後研究施設は特務軍に接收され扶桑州最大のサーバー施設とな

り特務軍の各作戦の後方アシストも兼ねるようになった。

現在 扶桑州 特務軍 戦略情報統括部

昔、世間を騒がした研究所は管理局の無限書庫の書籍を日本語への翻訳作業の為、現在フル稼働していた。

「で、俺達は何でこんな事をしていなくちゃならないんですか？

中尉」

中尉

「仕方ないだろうあんな膨大な量の情報を保存解析できるのは各州に一つしか無いんだから、ほかの州の施設もフル稼働だそうだ。語学言語研究所の翻訳ソフトが完成するまでの辛抱だ・・・それと口じゃなくて手を動かしたらどうだ？」

少尉

「解りましたよ、全く・・・ん？」

中尉

「どうした？ 少尉」

少尉

「また翻訳ミスか・・・これで何度目だ？ 後でクレーム付けてやる・・・」

中尉

「文法位ならまだましだろうに、こっちはすべて単語だぞ」

少尉

「え？・・・ほんとだ、これ如何するんですか？」

中尉

「如何するもこうするも手動入力しかあるまいよ、今日も泊まりか」

少尉

「明日で交代ですから、それまでの辛抱ですよ」

翻訳ソフトが急造品であった為、翻訳が完了された文章は作業員の手作業でチェックされ添削、加筆、編集され電子書籍としてサーバーに保管されていた。

入力作業を行う彼らの夜はまだ始まったばかりである。

ミッドチルダ 上空 エンジェル1コックピット内

迎撃のために上がって来ただろう管理局員を蹴散らし編隊を組み直すのと同時に月詠から通信が入った

月詠

『空中管制機月詠よりエンジェル、グリフィス、メビウス隊の各員へ。第一目標の破壊を確認した、エンジェル隊は引き続き制空権を確保してくれ。グリフィス、メビウス隊は第二目標のデータを送った各員確認してくれ』

『グリフィス1、了解』

『メビウス1了解、お前らもいいな?』

「エンジェル1了解、各機付いてこい」

『新たな、敵目標出現。各機にデータ送信完了・・・脅威判定はB。光学迷彩の使用を進言するわ』

機体A-Iが光学迷彩の使用を進言してくる。俺は敵の一を確認しながら左手でコックピット前面のパネルを操作し光学迷彩のスイッチを入れた。

「エンジェル隊各機へ光学迷彩のスイッチを入れろ。敵が来るぞ・・・味方との接近に注意しろ」『こちらエンジェル3光学迷彩が使えない!』（ここ確か・・・）エンジェル3お前はそのまま飛び続けろ、他の僚機で蹴散らす」

『エンジェル3了解!』

『エンジェル2了解。安心しろきちんとコールする』

『エンジェル4了解』

「エンジェル3ここから南東に向かえ、そこは空白地帯の様だエンジェル4と5は月詠の護衛だ、その他は奴等が喰いつくまで他の隊の援護だ」

『エンジェル5了解』

『エンジェル4了解』

ミッドチルダ 地上 管理局員

「急げ、まだ奴らは上空に居る！ これ以上の被害が出ないうちに撃ち落とすんだ！」

「空戦魔導師は何処にいる！ 早く連れてこい、此処からじゃあ攻撃が効かない！」

「くそ、奴ら又見えなくなった・・・」「おいあそこに一機だけ居るぞ！」なに！ どこだ！」

「あそこだ！ 空戦魔導師いや砲撃魔法が使える奴全員で攻撃するんだ！」

一機だけ姿を消していない機体を撃ち落とす為、陸戦魔導師たちが空に向けて砲撃魔法を打つ。しかし相手は彼らが今まで対峙したことのない敵、しかも高度2000m以上の空を時速600Kmで飛ぶ全長20m程度の物にあたる筈もなく回避される

「くそ！ 避けやがった」

「いい加減に当たれ！」

上空に打ち上げられる無数の光線がむなしくも躲される。

全員で5、6回程魔法を撃った頃に成って、ようやく空戦魔導師が空に上がるようになった。それを見た地上の魔導師達の士気は上がったが、士気が上がったのは彼らだけでなくグリフィス、メビウス隊の各員も同様だった、彼らとしては味方が（被弾はしていないが）一方的に攻撃されているのが我慢なら無かったのだ。

当然彼らは仕返しとして攻撃目標に対して二度目の爆撃を開始した、光学迷彩を使用しているのも有るが彼らの注意が完全に上空の僚機に向かっている今、空軍のエース部隊と言われる彼らがミスをするはずもなく機体内の弾薬庫から投下された10個の爆弾は機体A Iにより（効果的な被害を出すのに）最適な高度で無数の子爆弾へと姿を変え建築物を瓦礫へと変えた

第三十三部 彼らの戦いはこれからも続く（後書き）

まだまだ続きますよ

第三十四部 終結（前書き）

短すぎる

第三十四部 終結

下士官Aの日記

セルビアからの大使をブリーフィングルームに連れて行った後私は扉の前で警備をしていた。

セルビアからの大使が入室してから数十分後、セルビア・オーストリアの両国とも講和条件に不満が無かった為だろう講和条約は陛下の立会の下調印がなされた。

その後陛下と共に王龍に乗船していた外務省職員がセルビア・オーストリア両国との国交正常化の為、各種条約の協議を始めていた。当然調印者は陛下だ、あらかじめ資料を渡されていたのだろうか？

そちらの方は陛下は目を通さずに先に調印し終えやや大使側に急かすような視線を向けていた。

彼らもそれに気付いたのだろう、やや資料を読む手が早くなっている。2、3分後読み終わったのか資料を整え机に置き、まるで悪魔との契約書にサインするような手つきでペンを動かしていたのが印象に残った。一体どのような内容だったのだろうか？ 帰還したら調べてみようと思う。

『月詠より各機。第二目標の半数の撃破を確認した、グリフィス隊は第二目標の撃破をメビウス隊は第三目標の撃破を優先してくれ。エンジェル4・5 敵魔導師が本機に接近してきた、本機は高度を上げる迎撃してくれ』

『エンジェル4了解、すぐに追い払う!』

『エンジェル5、FOX3』

『こちらエンジェル3、こっちにも来た! とつとと落としてくれ』

『エンジェル2、FOX1』

『エンジェル2のミサイル回避された!』

『エンジェル1FOX3』

『エンジェル1のミサイルも回避された、ん? 敵が姿勢を崩して落ちたぞ!』

『エンジェル1助かった』

『月詠より各機、全的目標の撃破を確認。ん? レーダーに感あり、高速で接近中?! 各機散開』

『高度は?! 安全高度は?!』

『どこからの攻撃だ!?!』

『くそ、全機フルスロットル高度を25000まで上げろ!』

『そんな無茶な!』

『泣き言ってられる時か?! 早く上昇しろ!』

『飛翔体を目視で確認・・・あれは? なんだ、レーザー?』

『飛翔体の出現位置を発見、地上だと!』

『何!』

『ここは撤退した方が良く! 制空権が完全でない今このまま戦うのは危険だ!』

『そうだな、その方が良くだろう』

『月詠より各機、全機帰投する。周囲に注意せよ』

時は少し遡り・・・第一目標が撃破されたころ

ミッドチルダ

『ミッドチルダ上空に謎の飛行物体が出現。先日のハッキングと同
一犯の可能性あり、緊急出撃せよ』

「くそ、こんな時に」

「ランスター執務官が居ないってのにな、付いてないぜ。ランスター執務官とは連絡は取れているのか？」

「ランスター執務官よりそちらには後20分で到着するとのことですよ」

「よし、其れまでの辛抱だ皆行くぞ」

「「「おう!!」」」

地球 12月 23日

この日世界に向けて一斉にオーストリアとセルビアの講和が日本の仲介によってなされたことが各国に伝えられた。

そして翌24日、ロシアは戦争を起こした原因のオーストリアとセルビアが講和したのならば戦闘を続ける事に意味は無いとし欧州に派遣していた陸軍部隊を引き上げ始めた。それに呼応するかのよう
にイギリス、フランスなど主要国が一斉に国内に軍を戻し始めた。

第三十五部（前書き）

サブタイ考えんのメンドクセ

第三十五部

1914年 12月 31日 総理官邸

大高

「さて無事に今年を終える事が出来そうだ」

秘書

「そうですね先生、ですが先ほど柊国防長官から報告したい事がある、と電話が来しました」

大高

「そうか此方で連絡しておこう、他には何かあるか？」

秘書

「八洲州の青森から山口までのリニアの完成度が30%に成ったと報告がありましたそれと八洲州での総発電量は風力や太陽光を優先的に進め現在は60万kW発電しています。レーザー核融合炉は第一次計画が終了し今後需要増加に合わせて追加で建設するという事です」

大高

「八洲州のレーザー施設は？」

秘書

「北海道や沖縄は完成し現在完熟訓練中です。それ以外はなかなか進んでいません」

大高

「そうか分かった、そのことに関しても話しておこう・・・」

秘書

「はい、それでは失礼いたします」

大高は秘書が出て行き遠ざかったのを確認すると机の上の電話の受話器、では無く懐の携帯電話を取出した

ミッドチルダ 廃墟と化した管理局付近

???

「はあはあ・・・ふう、さすがに疲れるわね」

???

「ティアア」

遠くの方からこちらに物凄い速さで駆け寄ってくる影が見える

ティアナ

「スバル・・・無事だったのね？」

スバル

「うん、だけど部隊の皆の殆どが大なり小なり怪我してる」

スバル

「ところで奴らは？」

ティアナ

逃げられたみたい・・・かなり高い所まで飛んで行ったみたいだから途中で魔力が切れそうになって。おかげでもう殆ど残っていないわ」

スバル

「そう・・・そういえばさっきの魔法は？　かなり大きかったけど・・・」

ティアナ

「ええ、実は結構前に創ったのだけど・・・かなり消費するからまったくの使い物にならなくてお蔵入りモノだったのよ。こんなところで役に立つとは思わなかったわ」

スバル

「そう・・・とにかく無事で良かった。あの人達が居ない今、私たちが頑張らないとね」

ティアナ

「ええそうですね、とりあえず戻りましょう」

スバル

「うん！」

「諸君任務ご苦労、帰還早々招集したのは他でもない。攻撃中に飛来した高エネルギー体の事だ、鎌野大尉報告を」

鎌野

「はい」

鎌野と呼ばれた男が席を立ち机の上にあった書類を手取る

鎌野

「それでは結論から申し上げますと今作戦中に飛来したエネルギー体は彼らの使う魔法であることがハッキング時に入手した膨大な資料の解読により判明いたしました、しかし今回使用されたと思われる魔法は一切の資料が無く誰がどの様に使えるのかと言ったことが全く分からない為管理局員の誰かの自作魔法であり、なおかつ失敗作として保管されていたものと推測いたします」

鎌野

「次にこの魔法の威力ですが・・・高エネルギーで有るがそうでは無いのです」

「どういう事だ？」

鎌野

「例えるならば手をかざすと熱が伝わるが触ると熱くないという非常に不可解なモノでして・・・」

「もし、それが人間あるいは物体にぶつかった場合・・・どうなる」

鎌野

「分かりません、ただ言えることは彼らの使うバリアジャケットと云うモノがあればある程度の物は無効化できる可能性がある。という事だけです」

「それは今後の研究と回収した資料の解析で何とかなりそうかね？」

鎌野

「私を侮らないでください、バリアジャケットに関する資料はほぼすべて回してもいました・・・しかし」

「しかし？ 何か無いモノでもあったのか？」

鎌野

「はい、もし完成したとしてもそれを動かす動力が無いのです。電気などの既存のエネルギーではない別の何かです、これを解決しない限りどうにもなりません」

「そうか・・・ところであの二人から話を聞く事は出来ないのか？」

「あの二人？・・・ああ、あの二人か・・・どうだろうな、今の彼女たちの扱いは皇室の客人と言う非常に高い地位にいるからな・・・」

大高

「その件に関しては陛下が欧州から戻られたときに聞いておこう」

「「「!?!?!」」」

鎌野

「総理・・・いらしたので」

大高

「最初から此処にいたぞ……」

富野空軍基地……総理官邸から地下通路一本で辿り着ける空軍基地、この基地の会議室には数分後の総理の携帯電話が鳴るまで沈黙に包まれていた。

皇居

皇后陛下

「あら、はやてさん。読書ですか？　それは……この国の成立からの歴史ですね」

はやて

「あ、はい。こんなにも私のいた国と違うとは思いませんでしたから……」

皇后陛下

「そうですね？　大和州や扶桑州でも全く違ったり変な所で同じことが起きていたりね……おかげで暫らく日本史の授業が無かったのよ？」

はやて

「そうですね……学生からすればうれしい事でしょうね」

皇后陛下

「ええ、それでね実は数年前まで私は・・・」

はやて

「え、そうだったんで・・・」

此方は仲が良いようです

その頃・・・

フェイト

「ここ・・・どこ？」

迷っていた

数分後、フェイトさんは窓から外に出て空を飛んで見慣れた場所まで行ったそうです。

第三十五部（後書き）

フェイトはドジっ子それ以外は認めたくない

第三十六部 ソ連建国

皇居

はやて

「そういえばフェイトちゃん」

フェイト

「ん？ どうしたの？」

はやて

「いやね、昨日なんで空から戻って来たのかと思ってね」

フェイト

「え・・・うんっとね。迷ったの」

はやて

「へ？」

フェイト

「だから・・・迷っちゃたの・・・」

はやて

「・・・」

フェイト

「・・・」

1915年 1月 7月

新年が明け世間が通常道理動き始めて暫らく多々この日、ベルサイユ宮殿では英仏露日の代表たちが賠償金や今後のドイツの処分等について話し合っていた。

イギリスやフランスを始めとする同盟国各国は史実通りの莫大な賠償金を請求や海外領土の没収、軍への細かい制限を要求した。しかし今回の最大の功労者である大同盟の反対により軍への制限は撤回され海外領土の幾つかは同時に設立されたスイス・ジュネーブに本部を置く国際連盟の管理下に置かれた。

またドイツ本国の各国への割譲は大同盟の「諸君らが請求している賠償金はかの国の国民総生産の20年分に成る。これが一体どれほど大変な物か分かるか？ 確実に後々減額する事に成るぞ」との発言によりドイツの国民総生産の10年分である66億金マルクにまで減額された。

かの国の発言が重く見られ各国が自らの意見を曲げたのは中途半端な総力戦への移行により国内の経済や産業に支障をきたしていた事やと北海に展開している空母艦隊や大西洋を中心に展開している護衛艦隊、東ロシアの機甲師団に航空部隊、そしてドイツ国内に撤退が完了していない陸軍第三方面軍が駐留していたからだろう。

同年 1月 13日

イタリア・アヴェッツァーノで地震が発生。大西洋の護衛艦隊と北

海に展開していた機動艦隊は被害状況の把握の為偵察ヘリを派遣。
2月の始めには陸上自衛隊が現地入りし救助活動や復興の支援を開始。

同年 7月

管理局から得た資料のすべてを解読終了。これにより魔法技術の75%が解析完了、この時点で彼らが使う魔法発生補助装置デバイスの試作が開始されたがリンカーコアの代用機関が開発されていない為に開発が凍結され資料の中にあった人工魔導師に関する研究が進められる。

そして・・・時は少しだけ流れる

1916年 1月 ロシア帝国

欧州戦争が終結し日英露三国協力条約による食糧支援が打ち切られた為、ロシア国内は再び食糧が不足し「パンを！ パンを！」と反政府運動が活発化、更に極東事変の賠償として割譲された極東ロシアに住んでいたロシア人がシベリア鉄道によってモスクワまで到達し反政府運動に参加し「我らが母なる地を返せ！」とデモを始めた。

これにより反政府運動はより巨大な物となる。

ラスプーチンはこれに対し大同盟から食料の輸入を提案。しかし大

同盟と交渉が始まる頃には食糧を求めるデモではなく「皇帝による専制政治の打倒」へと変わって行った。

ニコライ二世は専制政治の打倒を掲げるデモ隊に軍を派遣、食料や極東ロシアの復帰を求める者にはそれぞれ大同盟と交渉中としコサックには軍への参加を奨励した、がこのデモはロシア社会民主労働党が裏から指示しており一向にデモが減る事は無かった。

同年 2月

食糧不足から始まったデモはついに軍による鎮圧が始まった。しかしそれも回数を重ねる毎に段々抑えが効かなくなっていた。

そしてある日鎮圧のために出動した兵士たちは反乱を起こしデモ隊側についた。これにより二月革命が発生し、ニコライ二世は退位しロマノフ朝は崩壊した。これによりロシアの動乱は落ち着きを取り戻したかに見えた。

同年 3月

先月の革命によりロシアは一時無政府状態となったが国会議員によって臨時政府が樹立した、そしてロシア社会民主労働党によって労働者・兵士の代表によって構成されるペテログラード・ソビエトが誕生、臨時政府は諸官庁を接收し権力の掌握、軍の掌握を開始したが一般兵士がペテログラード。ソビエトを支持した。

これにより二重権力が発生、一時は内乱が危惧され極東ロシアに駐留する大同盟陸軍が介入を検討し始めた。しかし二週間後にペテロ

グラード・ソビエトが臨時政府を支持した為ロシア内戦が回避されロシア国内は一時の平和が訪れた。

同年 4月

臨時政府が権力の掌握を終了した頃、ソビエトは軍内部の権力掌握を進めていた。このため臨時政府は軍に対する指揮権を完璧に失っていた。その為軍内部の元コサックが極東への侵略を提案し軍内部ではそれに向けた準備が進められた。

この動きを知った臨時政府は軍の解散を要求、当然のごとく軍が反発した為にソビエトを中心として反臨時政府デモが各地で勃発これに同調し分が武装蜂起を開始し、臨時政府に対して全ての権力をソビエトに渡すように要求。これによりロシア国内は再び無政府状態になり、臨時政府が倒れソビエトのメンバーを含めた第二臨時政府が樹立。

しかし軍側は眼前成るソビエトの権力掌握を要求、武装蜂起を続けた。しかしソビエト首脳部は臨時政府側と協調路線を取っていた為この要求を拒否し武装蜂起を止めるよう要求、これによりソビエトが分裂を開始。

同年 6月

武装蜂起していた軍は6月の中旬に武装蜂起を止めたが政府と軍の溝は埋め難いものとなった、臨時政府は軍の反乱を防ぐため軍内部の改革の準備を始めた

同年 7月

ソビエト協調派から分裂したレーニン率いるボルシェビキ派は臨時政府の軍内部の改革を軍上層に密告、これにより軍がレーニン派と臨時政府側に分裂、しかし上層部がレーニン派と成った為に実質的には軍全体がレーニン派へと変わったと言える。

その中、臨時政府は軍の改革を開始した為に軍が反乱。ソビエトレーニン派に全権力の譲渡を要求した、だがこれは受け入れられず首都へ向けて進軍が開始され7月革命が発生した。

首都が軍に占領されレーニン派が全権力を確保し革命は終結し国名をソビエト共和国とし自らの党をロシア共産党と改称、しかし欧州各国の援助を受けた軍内部から脱退者が反革政府軍を結成、一部内乱状態となった。

更にこの時反革命軍によって奪還されたニコライ二世とその家族は反革命軍によってドイツに亡命。更にイギリスやフランスが軍を派遣するが未だ国内が安定しないために撤退。

この時、大同盟からの食用支援は交渉が続行不可能と成った為にされておらず各地で食糧不足が慢性的になっていた、しかし反革命政府軍との内乱による食糧の不足を防ぐため穀物の強制徴発が行われ農村の貧困が極度に達した。

1918年 7月

2年間続いた内乱は反革命政府軍の壊滅により終結、しかしこれによる穀物の徴発により農村の貧困が極限に達していた為、レーニンは農民や中小企業に自由な経済活動を認め経済を復活させようとした。

これによりある程度回復しはしたが都市の工業は農村の必要な物を供給できずにいた、また農村では貧富の差が開き富農が発生。彼らによって穀物が退蔵された。

同年 8月

レーニンが暗殺され当初、反革命軍によるものと思われ残党狩りが続けられた。

熾烈な権力争いも同時に発生、その中で着実に勢力を拡大したスターリンが指導者の地位に付いた。

スターリンはさまざまな改革を開始、ロシア・ソビエト社会主義連邦共和国、ウクライナ・ソビエト社会主義共和国が誕生、その後行われた共産党大会にてロシア、ウクライナなどがソビエト社会主義連邦共和国を結成。

第一部 変革（前書き）

新章突入！！

第一部 変革

1918年 3月

アメリカで新型のインフルエンザ（スペインかぜ）が流行。しかし米軍のヨーロッパ進軍が無かった為、世界的な大流行にはこの時点では繋がらなかった。

同年 8月

スターリンが指導者の地位に付いた後も各地で反革命軍によるテロが行われていた。これに対抗するためスターリンは秘密警察を結成、国民に密告を推奨した。これにより無実の女子供、更には老人や軍人、果ては議会議員までもが強制連行され裁判なしで処刑された。

反革命軍は救国の旗を掲げ裁判なしでの処刑を快く思わない一部軍人や議員を味方に付け更に反政府テロが激化していった。更にイギリスやフランス、アメリカが反革命軍への支援を検討し始めイギリスやフランスは軍を派遣、大日本同盟にも協力を要請。

彼らは虐げられるロシア国民の救出を大義名分とし進軍を開始。大日本同盟は極東ロシアの陸軍を中央シベリア高地に進出、エニセイ川以東のロシア国民をバイカル湖まで避難させ、そのまま亡命させた。また即刻国内での虐殺をやめる様に要求、その後更に西進しオビ川まで軍を進めた。

イギリスおよびフランスは北海に派遣されている大日本同盟海軍の

機動艦隊の支援を受けながら、第一次世界大戦終結と共に独立を果たしたリトアニア共和国の協力を得て、リトアニアに上陸、更にラトビアを経由しロシア国内に侵攻、反革命軍がこれに接触し原始的な“ゲリラ”戦が10数か月もの間続けられた。

同年 9月

ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世がドイツ帝国の解体および共和制への移行を宣言。議会制への変革が進む、更にこの世界で初めて日系企業が進出し今後のドイツ経済に大きな影響を与える。

同年 10月

ドイツ共和国で第一回議会が開かれ今後のドイツ共和国の諸法やソビエトへの対処などが決定される。

オーストリア皇帝フランツ1世が崩御88歳と言う当時では長寿であり大往生であった。

そして息子のカール一世が戴冠しオーストリア皇帝となった。しかし彼はロシアでの革命が飛び火する事を恐れ、二院制議会の開設を宣言し国政の為の重要機関とし二院双方に議会の解散権を与え議会が機能し始めて暫らく経ったのちに自ら退位した。

1919年 3月

日清戦争により清国の力が衰え、義和団事件により衰退が明確となった為、大韓帝国では軍事や経済などの面での独立が求められるようになっていた。

しかし彼らにとつて後ろ盾が無い状況での発展は経験したことが無く、今まで右に倣っていた清国は1903年に滅び中華民国となり、その後の様々な国情からその乱れは改善されず、衰退の一途をたどる中、帝国国内も又混乱に見舞われていた。

国内が混乱に見舞われ政治や経済も安定しない中、彼らはこの国難を乗り切る方法ではなく新たな後ろ盾を探していた。そこで白羽の矢が立ったのは当時列強の一つであったロシア帝国そして宗主国を破った大日本帝国であった。

1904年極東事変が発生。これにより帝国国内の親露派は勢いを増し親日派は縮小の一途をたどりかける、しかしウラジオストク港が一晩で陥落したことにより形成は一気に逆転。カムチャツカ半島が完全に大日本同盟の勢力圏に入る頃には親露派はその勢いを完全に失っていた。

1910年に成ると親露派は一掃されたのかと言う程であった、そして1914年欧州大戦が勃発し大日本同盟が介入を開始しドイツを単独降伏させると、この動きは非常に大きくなりやがて日韓併合が唱えられるようになる。

しかしこの時点では未だ国交正常化がなされてはおらず帝国から八洲州へと接近する船舶は全て国籍不明船として海上保安庁や海上自衛隊によって排除されており、不法入国しようとした木造船や漁船が相次いで拿捕、強制帰国させられるなど、大日本同盟からすれば招かざる客であった。この動きは扶桑州で過去に有った日韓併合か

らくる反省点であった為、扶桑州が存在していなければ又違ったものであっただろう。

彼らが併合を望む中国内は更に混乱していた、しかし彼らは悪い意味で諦めなかった。

彼らは宗主国であった中華民国から大日本帝国へ渡りを付けようと中華民国の高官に接触、しかしそこで彼らは多大なる衝撃を受ける。それは大日本帝国がもう存在していないという現実であった。

しかししかし、彼らは全く諦めていなかった（悪い意味で）大日本帝国が存在していないならば、違う国に併合してもらえば良いのだと言う考えに至ったのである。その結果が朝鮮・ソビエト共産主義共和国設立への第一歩であった。

総理官邸

大高総理の任期満了により内閣の顔ぶれはほぼ一掃されていた。

大蔵野内閣総理大臣

「諸君、朝鮮が共産化したことはもう聞いている事だろう」

柊国防大臣

「はい、まさかこうなるとは思いませんでした・・・」

金田財務大臣

「君の場合二つの意味で、だろうに」

佐藤外務大臣

「面倒な事に成りましたな」

宮野国土交通大臣

「その通り、如何するんです？このまま放置ですか？」

渡辺内務大臣

「私は放置でもよいと思いますが・・・それよりもオビ川にまで進めた陸軍をどうするかですよ総理」

大蔵野

「その件は来週の国際連盟安全保障議会で決定する事だ、今は朝鮮共産化の問題をどうするかだよ」

終

「今の所陸軍からは何の注文も来ていないのでねえ、報告があるとすれば亡命させた旧ロシア国民は充実した生活を送って居るそうですよ」

金田

「今の財政的にも胃潰瘍に成らなくても大丈夫なぐらいですからな。八洲州も経済の成長非常に速く今年はすでに5%の成長が見込めます」

久世厚生労働大臣

「国内の雇用問題も解決し産業の成長による公害や労働災害もない今、労働者のストライキやデモの発生する可能性が非常に低いのですからしばらくは様子見でもいいのでは？」

大蔵野

「そうだな・・・かの国は未だ産業と呼べる産業が無く発展途上と

言うのもおこがましい程、国名にソビエトが入っていてもソビエト連邦への加入は果たせん」

柊

「ならば今は未だ静観という事で？」

金田

「ロシアやウクライナから産業が移転されれば話は違うだろうが、今はその間に我が国とモンゴルや中国があるから接触は出来ても産業の移転は出来まい」

大蔵野

「うむ、決を採る。朝鮮共産化への対処は静観すると云うモノは挙手願いたい」

内閣閣僚のうちその半数が挙手をした。

大蔵野

「賛成多数、よってこれを我が内閣の意向とする」

第二部 変革？

「緊急ニュースをお伝えします」

「朝鮮半島が共産化しました、政府の発表では

『朝鮮半島が共産化したのは大国の後ろ盾を得る為だ、なので我が国はこれに対し静観の構えを取る。かの国では産業が育つてはおらず、ソビエト連邦へ加盟できる可能性は全くないと言う訳では無い、しかし加盟した場合のデメリットを考えると加盟させないという結果が出る事を予想し、賛成多数で干渉しないことを決めた』と発表しており」

「昨夜開かれた閣議では

『数年前から領海侵犯や密入国者が増え、その中には大日本帝国に併合して貰う為の使者と名乗る者もいた。これに対処した海上保安庁の巡視艇には我が国は大日本帝国ではない為、即刻帰国させるよう指示した。これに従わない者もいたようなので強制的に帰国させた』とコメントしており・・・」

1919年 4月

ドイツ労働者党が設立。

ハンガリー共産党が設立（オーストリア・ハンガリー帝国はそのまま共和制に移行）

同年 5月

中国国民党が設立。

1920年

アメリカで赤狩り（共産主義者などの逮捕）が始まる

同年 1月

アメリカで禁酒法が施行

大同盟が国際連盟に加盟しかしモンロー主義を貫くアメリカは加盟せず

同年 10月

中国共産党が設立。

中国国民党は民族主義の立場から反共主義を取る。

同年 5月

尼港事件が発生。

ロシア員、中国人、朝鮮人のアナキスト凡そ5000名がアムール川（黒竜川）沿岸に駐留する大同盟陸軍および陸上自衛隊の駐屯基地を襲撃。

夜間であつたが周囲10kmに張り巡らされた赤外線センサーに捕捉され、駐屯基地には防御態勢、基地よりも北方の陸上自衛隊の攻撃ヘリ部隊や空挺師団に出撃用意命令が下された。

陸上自衛隊の偵察部隊が3回にわたり警告するも無視、さらに北上するため、ヘリ部隊が威力偵察の為攻撃ヘリが3機出撃。

チェーンガンやロケット弾による攻撃により敵の一部の撃破に成功。しかし3機では戦力不足と断定し長距離対地ミサイルによる支援砲撃とヘリの増援を要請。

増援のヘリ6機が到着、攻撃を開始。これにより敵部隊の半数を撃破。対地ミサイルによる援護攻撃も開始され基地の2km県内に入る頃には凡そ1000名にまで減っていた。

空挺師団が敵部隊の前方と左右に展開を開始、ヘリ部隊による遅滞作戦が功を奏し敵部隊が目指していた基地からも戦車部隊や歩兵部隊が出撃。

空挺部隊と戦車部隊の展開が決定打となり敵部隊は撤退、その後偵察ヘリの追跡により完全に撤退が確認され戦闘態勢が解除されたのは日が昇り始めた頃であつた。

1921年 11月

アメリカ・ワシントンD・C.で世界軍縮会議が開催。参加国は大
同盟、英、米、仏、伊、中、蘭、白、葡^{ベルギーポルトガル}

大同盟、英、米、仏による、太平洋様における各国領土の權益を保障
する四カ国条約やイタリアを加えた海軍軍縮条約が締結された。

しかし、大同盟とその他の参加国では軍備の差があまりにも開いて
いた為。大同盟は新造艦を10年間一切建造しない（代替え艦を除
く）代わりに参加国の戦艦の合計排水量を5…5…5…5に引き上
げる（艦砲の上限を決めない）など通常ならば認められない様な事
が決められてた。

更に空母に関する比率は決められなかった（大同盟に配慮したとも
言われている）

第二部 変革？（後書き）

大遅刻すみませんでしたあ！

第三部 革命

ミッドチルダ 管理局

特務空軍の襲撃から3日、爆撃による火災はほとんど収まっていたが管理局の建造物の殆どが損壊もしくは倒壊していた。

「襲撃犯の居所はまだつかめないのかね？」

顔の前で手を組んだ男がこの部屋で唯一立っている男に問う

「い、今管理外世界の次元艦隊にも後を追わせています、あと一週間……いやあと3日、3日で何とか……」

「君い……僕たちはねえ、そんな報告をして貰う為に君を呼んだ訳では無いのだよお？」

先程とは異なる人間が追及を始める

「は、はい。ですからいま次元艦隊の総力を挙げて……」

「まあまあ、落ち着いて。君、報告はもう十分だ……下がちなさい」

今まで静かに成り行きを見守っていた初老の男性がなだめる

「は・・・失礼します」

教本道理の敬礼の後、その場で後ろを振り向きドアに近づく

「ああ、そうだ。少し休みなさい、働き詰めは体に良くないからね」

そして、あたかも今思い付いたかの様に退室寸前の男に告げる

「は、了解しました」

突然の休暇命令に多少の戸惑いを感じながら、上官からの命令の為、さらには正論の為反論する事も出来ずにそのまま退出する。

そして男が扉を閉め、足音が完全に遠のいたことを確認し、初老の男は今までの好々爺だった自分を捨て、その本性を現す

「あいつはクビだな、適当に処分しておけ」

1922年 1月 10日

胆石症で大和州の総合病院に入院していた大隈重信が無事退院する

同年1月

欧州大戦が終結した1914年からエジプトで独立運動が活発化、そして英国はもはや支配は不可能と判断しエジプトの独立を容認。

これによりエジプト共和国が誕生。

1923年 9月 1日

八洲州関東大震災が発生。

神奈川県相模湾北西沖80kmを進言としたマグニチュード7.9の地震が9月1日11時58分に発生。神奈川を中心に千葉、茨木から静岡の頭部までの内陸および沿岸に広い甚大な被害をもたらした。

この地震により凡そ6万人が死亡もしくは行方不明となった（大同盟参加後から急速に再開発が進められた為、建築基準法によって耐震性能が非常に高い建築物が増えていた、これにより史実の十万五千人よりも大幅に下回った）

また史実で起こった火災旋風は50件ほどの火災が発生するも、消防署の設備が充実していた為、住宅60棟が全焼したが消し止められた。

更に朝鮮人の殺害事件は朝鮮人の入国が拒否（当時、国交があるのは欧州各国とアメリカなどのみ）されていたため起こらなかった。

また、日本海洋研究会と日本地震研究会が海上自衛隊の協力の元、海底に設置した地震計により大同盟各州の自衛隊や各省庁の協力機関、日本ボランティア協会などに地震発生の第一報が届いたために初動が非常に速く、八洲州と扶桑州の間の海域に展開していた海上自衛隊第六、第十一艦隊、海軍第七、第十一艦隊が艦載機を発進させ被害状況の把握に尽力した。

同年 11月 8日

ドイツ労働者党がミュンヘンで一揆を起こす。

ビアホールのビュルガーブローイケラー内での演説中に労働者党の突撃部隊が突入し、臨時政府への権限の委譲を要求した。またホール内では労働者党の突撃部隊と群衆との小競り合いが続いていた。しかしヒトラーの雄弁により群衆は静まって行き、ついには彼を支持し始めた。

その後グスタフ・フォン・カールら3人の首脳がヒトラーの説得により強力すると言明、これにより反乱は成功と思われた。その頃ミュンヘン市内では突撃隊により市役所や国防軍司令部などを占拠、更に通信施設も占拠しバリケードを築いていた。通信施設を占拠した為に反一揆派の運動を察知。

一揆の開始より3時間が経った午後11時、士官学校の生徒一千名がビアホールに到着、包囲を開始する。その後ミュンヘン市内の国防軍が鎮圧の為、列車で市内に移動。

包囲していた士官学校の生徒たちはカールとの対立を恐れ撤退。しかしビアホール内部にヒトラーらが居た為、脱出は出来ずにいた。

国防軍が包囲するもヒトラー等は一切慌てずにいた、そしてヒトラーは首脳の3人に対し

「我々に対する権限の譲渡を君の口から今すぐ宣言してもらおう・・・これは栄光のドイツ帝国を取り戻すためだ！！ さあ、早くしろ！」と手に持ったブロー人紅拳銃を突きつけながら発した、更に周囲に居た群衆がこれに賛同し遂にカールは

「全権限を臨時政府に譲渡する」と発言。よってオットー・フォン・

ロツソウが国防軍に対しカールにより全権限が譲渡された事を発表し同時に即時撤退を命令した。

9日

昨夜の事件があつたにもかかわらず市内は静かであつた。いや、あつたからこそ静かであつた。その日の午後、ドイツ臨時政府より世界に向けてヒトラー総裁の誕生を知らせる電報が放たれた。

第四部 争いの狼煙

1924年 1月 20日

中国大陆で第一次国共合作が開始

同月 25日

フランス・シャモニーで第1回冬季オリンピックが開催

同年7月 1日

アメリカ合衆国で1924年移民法（史実の排日移民法）が施行される。

ホー・チ・ミンがベトナム青年革命同志会を結成。

1925年 1月 3日

イタリアのベニート・ムッソリーニが独裁宣言

同月 20日

日ソ基本条約を締結。国境線は大同盟陸軍が築いた絶対防衛線が適応され、ソ連はロシア帝国の後継国として認められた。

同年 6月 17日

ジュネーブ議定書が作成される。欧州大戦では使用されなかった、しかし大量にドイツ国内に保管されており、ヒトラーがドイツ国内の全権を奪取した為、フランスが提唱した。

同年 7月

アドルフ・ヒトラーが『強いドイツ』および『わが闘争』を公表。

同年 11月

アドルフ・ヒトラーの身边警護の為にドイツ労働党の突撃隊を親衛隊に改編。

同年 12月

ロカルノ条約締結

英・仏・独・伊・白及び大同盟の6か国における地域的集団安全保障条約、ドイツ・フランス国境及びドイツ・ベルギーの国境の文面化。ラインラントにおける軍事施設の建設や兵士の駐屯の禁止、条約加盟国同士での相互不可侵などを規定し、締結6か国の国際連盟への加盟が発動の条件であった。

日・仏・英相互安全保障条約、及び相互援助条約締結。

これにより北海と大西洋に派遣された艦隊が英・仏両国に帰港出来る（これまでは派遣であった為お客さんであった、なので入港時には許可が必要だった）様になり、今後イギリスのプレマス、フランスのブレストを暫定的に母港とし、両港を拠点に北海・大西洋上に展開するようになる。

1926年 5月 24日

八洲州北海道十勝岳が大噴火。

死者・行方不明者70名、負傷者300名を出す大災害となった。しかし、23年に溶融硫黄の沼が発見されていた為、噴火当日は登山が禁止されており付近の住民にも注意を呼び掛けていた。噴火後の水蒸気爆発を原因とする雪崩や土石流による死者・行方不明者は出なかった。

同年 7月

中国。共産党・国民党が協力して北伐を開始。

同年 10月 20日

イギリス帝国議会がロンドンで開催される。

これにより大英帝国下の全ての植民地を自治領とすることを決定。

1927年 3月 7日

八洲州北丹後でM3.7の地震が発生。

震源地は八洲州京都府丹後半島北部、この地震は北近畿を中心に中国・四国地方にまで被害が及び死者3000名、負傷者8000名。更に夕食時であった為火災が随所に発生、凡そ3000戸が全焼した。

同月 24日

国民革命軍（国民党の軍）が南京入城の際、諸外国領事館を襲撃。

1927年3月 24日早朝

当初、平和裏に入城していたが、次第に反帝国主義を叫ぶ（国民革命軍の）軍人や民衆の一部が外国の領事館などへの襲撃を開始、暴行や破壊により日米伊仏丁が1人、英2人の7人が死亡、二人が行方不明となった。

この際日本の領事館には陸上自衛隊の普通科連隊が駐屯しており、

領事館の敷地内は治外法権であり大同盟の法律が適応されるため、武力による排除を開始。同時に他国領事館と連絡を取り、他国領事館の救援の為、台湾に駐屯する空挺団に出動を要請。

出動の要請が来た空挺団は台南の海軍第13艦隊に支援砲撃を要請。海軍第13艦隊が海上自衛隊第13護衛艦隊（母港が同じ）に協力を要請、これに護衛艦隊がこたえ、総勢70隻（内訳戦艦20隻、航空戦艦10隻、巡洋艦25隻、イージス艦10隻、ヘリ空母5隻）が出撃、1時間後の午後一時より南京城内に砲撃を開始。砲撃時間は30分間であったが参加艦艇が70隻と大勢であった為、約700発の砲弾が撃ち込まれた。この砲撃により複数国の領事館が損傷したが後日正式に改修工事を行っている。

この事件は中国共産党の計画的策謀といわれ中国国民党はこの事態の収拾に迫られる事に成る。

同年 4月 11日

日米伊仏英丁が南京事件への賠償と謝罪、責任者の処罰を要求する7か国宣言を発表。

同月 18日

蒋介石が武漢政府に対抗し瓦礫の山となった南京に国民政府を樹立。共産党の排除を開始。

同年 6月 20日

ジュネーブ第二次海軍軍縮会議が開催、しかし大同盟が不参加の為、3日で閉会。

1928年 2月 11日

スイス・サンモリッツで第2回冬季オリンピック

同年 7月 2日

イギリスで女性への参政権が与えられる

同年 8月 27日

パリで不戦条約締結。米英独仏伊日などが署名しその後ソ連などが署名した。

国際紛争を解決する手段としての戦争を放棄し、紛争は平和的に手段において解消する事を規定した。

1929年 1月

スターリンがトロツキーを国外追放し独裁体制が完成。しかし、同時にロシア各地で爆破テロや共産党の建物への襲撃事件が急増。

同年 6月 16日

八洲州北海道の駒ヶ岳が爆発、翌日噴火。山林耕地に被害が出るも死傷者は2名、負傷者は4名であった、しかし牛馬が150頭ほど死亡。

同年 10月 24日

ニューヨーク証券取引所で株価の大暴落が始まる。しかし大同盟に被害なし、だが世界に与えた衝撃は大きく、世界恐慌の引き金となる。

第五部 災厄

1929年 10月 24日

アメリカ合衆国ニューヨーク証券取引所で始まった株の大量売却は4日後の28日から29日に起こり、その後1月間もの間続きその間も売り注文が止む事は無かった。

しかしこの事態は世界に広まった訳では無かった。

1930年 1月 21日

ロンドン海軍軍縮会議開催

第一次ジュネーブ海軍軍縮会議で決定された、大同盟海軍の新規艦艇建造停止は、海上自衛隊の新造艦艇を海軍が海上自衛隊から購入すると言う、詐欺まがいの手法によって回避されていた。

この事を知った米国は、大同盟が第二次ジュネーブ海軍軍縮会議に参加を表明した事を盾に、欧州各国及び大同盟に軍縮会議に参加する事を強引に約束させた。

これに対し、日仏英はお互いに口裏を合わせつつ会議に参加した。

英仏も米国に屈する事をよしとしなかった為である。しかし米国が前回不参加の大同盟に対し要求したことは少なからず海上自衛隊を廃する内容であった。

この時、日本代表として派遣されたのはこの世界では活躍の場の無かった海軍大将東郷平八郎であり、海軍の攻めと海上自衛隊の守りが大同盟の国防を担っている事を正しく理化している人間であった。ゆえにこの様な要求は呑む事など出来ないと断固反対し、最悪の場合今会谈の途中退席も辞さない構えであった。

また、欧州に派遣している海上自衛隊の護衛艦隊が駐留中の英仏両国国民は、海上自衛隊による海上護衛により欧州大戦での被害が減少した事を理解していた。また海軍内では自軍の戦闘能力低下やドイツに対する警戒などにより今条約の締結に対する反対運動が強まっていた。

同月 26日

インド国民会議が独立を宣言。

同年 2月 3日

香港にてベトナム共産党結成

同年 4月 22日

ロンドン海軍軍縮会議は日仏英が条約に納得しなかった（出来なかった）為、不成立。

今後日仏英と米が対立し始める。

同年 9月 5日

八洲州浅間山が爆発、被害なし。

同年 11月 26日

八洲州静岡県伊豆半島北部を震源とするマグニチュード7.3震源付近は深度6、その他の地域では4から5を観測。主に静岡、神奈川で死者を含む被害が出る。しかしその他の地域では耐震、免震設計がなされた建造物が普及した為、数人のけが人が出るも死者は出なかった。

だが震源地付近では非常に大きな断層が確認される。またこの断層によって本州縦断鉄道のトンネルが中央部で大きく移動した為、数か月間不通に成る。

1931年

この年は非常に平和な年であつた。
大きな事件は無く人々は数年ぶりの平和な日々を謳歌していた。

海軍、海自が合計20隻の戦艦、10隻の駆逐艦、5隻の空母を退役。これにより起きた海上戦力の不足が数年続く。しかしそれに反し空軍が新型ステルス戦闘機、空自は無人偵察機をそれぞれ100機受領、また陸軍と陸自が軍事費削減を目指すため戦車及び装甲車の車体、偵察ヘリ、攻撃ヘリを共通化。

1932年

上海市郊外に十九路軍が出現。三個師団からなり兵力は三万以上であつた。

これを中国大陆に数年かけて浸透させた東機関の通報により知った陸軍第八方面軍は、東機関によりもたらされた『十九路軍にクーデターの可能性が有り』と言う報告が否定できなかった為、昨年配備された新型戦車をもって上海の日本租界に展開。

更に十九路軍の接近、及び陸軍第八軍団の展開を察知した英仏米が双方に対しての警戒を強化。

同年 1月 28日

上海で十九路軍と陸軍第八軍団が武力衝突を開始、これが英仏米に飛び火するまで時間は掛からなかった。

同年 2月

英仏米軍が上海に展開開始。

同年 3月

日仏米英が十九路軍と本格戦闘を開始。その後英仏軍は第八方面軍の機械化歩兵連隊と共に戦闘行動をとりながら十九路軍の殲滅を始める。

同年 5月

第八方面軍の機械化歩兵連隊と共に行動していた英仏軍は、百数名の被害を出しながらも十九路軍を撃破、殲滅した。

同年 11月 8日

米大統領選挙で民主党ルーズベルトが当選。しかし世界はニューヨークで起きた株の大暴落から連鎖的に起きた不況は深刻化していた。

1933年 3月 3日

八洲州岩手県閉伊群釜石市の東方沖約200kmを震源とし発生、マグニチュードは8・1歳代観測深度は地上で震度5。

この地震による被害はほぼ皆無であった、しかしその後到来した津波により八洲州で1000名、2000km離れた扶桑州で100名の被害を出す大津波となった。また津波による塩害により収穫間の小麦が海水により根枯れするなど、今後の小麦の高騰が懸念される。

同年 4月

日英間で小麦の輸入量増量の為の会談が開かれる。これにより今年の八洲州岩手での予定収穫量の2倍を輸入することで合意に至る。

これにより英国内ではほんの僅かではあるが景気が上向く。

同年 12月 24日

八洲州鹿児島県くちのえぶらむら口永良部島が噴火。釣り客15名が死亡。

1934年 5月

大同盟各地で冷害が発生。八洲州東北では不漁が相次ぐ。これによ

り英仏独からそれぞれ小麦、魚介、ジャガイモを主として大口の輸入を決定。

英仏独の経済に光が差し始める。

同年 9月 21日

室戸台風が八洲州に上陸。死者1000名、行方不明150名、負傷者7000名。

強風による建造物に対する被害は少数であった、が急な水位の上昇により溺死や高潮により家屋の倒壊が複数件発生した。

第六部 勃発

1935年 5月

大同盟が購入したジャガイモ等による収入により、ヒトラー率いるドイツ帝国はこの資金を元手に国内のインフラを整えていく。

同月 14日

フィリピンが独立協定を批准。

同年 12月 9日

米国が大同盟に、第二次ロンドン海軍軍縮会議の参加要請を出す。しかし大同盟は参加するに値せず、として参加を見送る。

同月 22日

大正天皇崩御。7年ほど前から扶桑州の病院に入院していた。

1936年 1月 22日

英ジョージ5世死去、エドワード8世が即位。

同年 2月 16日

スペイン総選挙で人民戦線派が圧勝。スペイン内戦の火種となる。
ヒトラーが飛行機の開発を命令。

同年 5月

大日本同盟陸軍、海軍、空軍の一般兵訓練学校が統一化、軍内部での不和を避け、新兵の教育にかかる費用削減の為。

同年 7月 17日

スペイン内戦が勃発。

ドイツ・イタリアが反乱軍を支援、ソ連・メキシコが人民戦線派を支援、フランスのブレストに駐留する海軍機動艦隊が緊急出撃。艦載機を10機程偵察に向かわせる。

また、これに同調しドイツ帝国内に反共産主義の視点から、ソ連の介入によるスペインの赤化を危惧する声上がり、陸軍の一部増

強が謳われはじめる。この動きにヒトラーは便乗し、大同盟、フランス、イギリスに軍事顧問団の派遣を要請。

同年 8月 1日

ベルリンオリンピック開催。ドイツ国内が日本人観光客によって潤い始める。

同年 9月

英国がスペイン内戦への不干渉を発表。

同年 11月

日英仏相互防衛条約締結。

これによりアジアにある英仏両国の植民地に駐留、補給が可能になる。

同年 12月 10日

英エドワード8世が退位、ジョージ6世が即位。

1937年 1月 5日

米政府がスペインへの武器の輸出を全面的に停止する事を決定。

同月 13日

スペイン内戦…反政府軍が領海内に機雷を敷設、海上封鎖開始。

同月 16日

ドイツ帝国が外国軍艦のキール運河の自由航行を禁止。民間船舶は料金制に。

同年 4月 13日

ビルマが英国準自治州に成る。

同月 26日

ドイツ帝国空軍が義勇軍として、スペインのゲルニカを空襲。遣仏海軍機動艦隊の艦載機が発見、一部始終の記録に成功。これにより使用機体がJu52であることが判明。

同年 5月 6日

アメリカ、ニュージャージー州レイクハーストでドイツ籍のヒンデンブルグ号が爆破・炎上する。乗員・乗客35名、地上の作業員1名が死亡。飛行船の安全性能に疑問が持たれ、これ以降建造されなくなった。

同月 21日

女性飛行家アメリカ・イアハートが赤道上世界一周飛行に向けてカリホルニア州のオークランドを飛び立つ。

同月 25日

パリ万国博覧会開幕。

同年 6月

ソ連軍トゥハチエフスキー元帥が粛清される。

同年 7月 2日

5月にアメリカを発ったアメリカ・イアハートがハウランド島を指して離陸。

同月 2日 深夜

太平洋で演習を行っていた海上自衛隊第四護衛艦隊、第三護衛部隊が飛行物を発見。随伴する対潜ヘリが偵察の為、スクランブル。その後艦隊司令の判断で接近。対潜ヘリから民間機を発見と通報が入る。

ヘリはそのまま帰投。30分後に合流、艦隊司令の指示で護衛部隊に配備されているイージス艦で民間機を追尾、45分後にレーダーより見失う、しかしレーダーの範囲内の為、墜落の可能性を考慮し、民間機を見失った地点に急行。

目標地点にて救命胴衣を着けた女性を保護。護衛艦鞍馬に収容、その後女性冒険家アメリカ・イアハートと判明。

同年 8月 10日

福建州で大日本同盟陸軍と国民党革命軍が衝突。すぐさま台北の空軍爆撃部隊がスクランブル発進、今回は国民党政府直属の軍団の為、大日本同盟政府はこの攻撃を『宣戦布告なき戦争』とし即時殲滅する事を発表。

八洲州佐世保軍港より海軍第十二艦隊が全艦出撃。台南軍港より海

軍第十三艦隊が全艦出撃。嘉手納空軍基地より超兵器爆撃機アルケオブテリクス？が10機発進、台南上空で空中待機を開始。

同月 11日

秋津州陸軍全軍団が出撃用意を完了、大和州の海上自衛隊艦艇の護衛を受けながら扶桑州千葉、同呉、八洲州岩手、同千葉、同呉を経由し台湾に上陸。中国大陆への上陸準備を開始。

同月 12日

米政府が中国国内の米国人に帰国命令を出す。他国も同様の対応を取る。

同月 15日

空軍爆撃部隊が結成、護衛戦闘機1000機、爆撃機一万機。海軍が州ごとに連合艦隊を結成。

第七部 第二次日中戦争

1937年 8月 17日

八洲州日本海、沖縄と台湾間での一般漁船の活動が大きく制限される。

大日本同盟政府は「国民党軍の攻撃は、宣戦布告なき戦争を意味する。私たちは自らの生存権を守るため、これに対し最も効果的な手段をもって対抗する。」と発表し、今陸軍第一方面軍を台湾の陸軍基地に移動させていると発表。

同月 20日

福建州に陸軍第一方面軍、第一機甲師団と第十機甲師団・普通科十個師団・偵察旅団が上陸。陸上自衛隊敷設科も合わせて上陸し、大型航空機が離着陸可能な滑走路の建設を開始。

>i25457—2495<

黄色は哨戒艦などによる第一次警戒網

青色は海軍の艦隊の場所

翌21日

爆撃隊が中国各地をゲリラ的に爆撃する一方、陸軍は武漢を攻略し昆明に対して攻撃を開始する。

>i25460—2495<

翌22日

他国との国境や欧州系の企業物に手を出さない様に気を付けながら昆明、西安を占領。このころにはすでに戦闘と言えるような戦闘も起きてはおらず、爆撃隊による爆撃により、ドイツからの戦闘顧問団によって伝授された、塹壕もその成果を発揮する前に破壊されていた。

こうした中、国民党と手を結んでいた共産党はソビエトと手を組む為にウルムチにまで撤退し国民党軍はハルピンへと逃れていた。武器や人員の質・量ともに劣る両勢力は再興を胸に撤退を続けていた。しかし、これは両勢力の指導者が戦力の差を認識していたためであり、其れを理解していない他の少数勢力は、便意兵として抵抗を続けていた。

>i25458—2495<

西安

此処は陸軍によって占領された後、北進する部隊の為の補給基地となっていた。そして陸軍旗がひるがえるこの西安の地にぽつん、と周囲とは時代が全く違う建物が立っていた。

陸軍兵士

「こちら瀨田軍曹、武漢司令部聞こえているか？」

一般兵と比べると所々、服装が違う人物が喉に手を当て喋っていた

武漢司令部

「聞こえている、どうした」

応答した声は男とも女ともつかない様な声であった。

瀬田軍曹

「便意兵により襲撃を受けた被害は、輸送用のトラック5台うち2台はタイヤの交換をすれば走れそうだ。襲撃してきた敵の便意兵の数は30名うち10名は応戦時に射殺した」

外を見ると何かが燃えている炎を確認する事が出来る

武漢司令部

「了解、そちらに代わりのトラックを4台送る。あと装甲車2台と魔式強化歩兵2個小隊も追加で派遣する」

瀬田軍曹

「了解、どの位で此方に付く」

武漢司令部

「今日の夜、ふたふたよん2245にこちらを発つ。明日の昼には着く」

瀬田軍曹

「了解、以上通信オワリ」

陸軍兵士

「軍曹殿、同でしたか？」

瀬田軍曹

「トラック4台と、装甲車2台に魔式強化歩兵2個小隊を増援に出

してくれるそうだ」

陸軍兵士

「魔式を、此処に派遣ですか！」

瀬田軍曹

「ああ、上層部も太っ腹だよ」

魔式強化歩兵、管理局に対するサイバー攻撃から始まった、対管理局戦。此れの一つの成果である。本人合意の元、体内に魔力生成物を埋め込み、そこから魔力を供給する。

武装は各々がモデルを用意し、そこから作り上げる完全オーダーメイド式、各員の武器には自己進化型OSが組み込まれ、使用者の反応速度や体格、性格、癖を学習しながら進化する。

今は索敵や防御の面での比率が高い、しかし元管理局員の協力の元様々な試行錯誤が繰り返され、かすり傷程度の治療実験も行われ、一程度の成果を見た。

第八部 国民党軍殲滅戦

1937年 8月

突如として攻撃を始めた国民党軍。

これに対抗するため大日本同盟政府は国民党軍との戦闘を『テロに宣戦布告なき戦争』とした。
対する報復

言うが早いか、陸軍第一方面軍がその全戦力をもって、中国大陆に上陸。20日の事であった。

3日の後、武漢、昆明、西安を落していた。また中国大陆を支配する2つの勢力はそれぞれ、ウルムチ・ハルピンへと逃げていた。

しかし、この2つとは異なる、ほぼ無名に等しいその他の勢力は、その勢いを減らすどころか、以前よりも増していた。しかし所詮は弱兵、目立った被害は今の所輸送用のトラックや食料等であり前線等からしてみれば其れが多少減ったとしても、補給基地は西安、その更に後方の武漢に拠点が有り、そこからいくらでも送る事が出来るという状況であった。

また制空権を完璧に確保している為、輸送機が低速度で侵入し、物資を投下したとしてもこれを抑える術が無かった。またこれに便乗し偵察機や爆撃機が飛来してくるため、少数勢力は、ドイツ軍の戦闘顧問団に叩き込まれた塹壕を生かし切れていなかった。

1937年 8月 25日

西安を占領した陸軍第一方面軍第一、第二師団の機甲部隊と普通科部隊の半数、偵察部隊は残りの部隊をウルムチ方面に侵攻させた。

自分たちは反対に、日本海を横断してきた増援の（八洲州に配備されている）第六北方方面軍の戦車、装甲車部隊合わせて400両、人員2000名。1930年にそれまで駐留していた陸上部隊の代わりに、第6北方方面軍特別師団戦車70両、装甲車30両、攻撃ヘリ20機、とともにハルピンを目指し進軍を開始。

また、数年前まで北京があった場所には台北より飛来した超兵器爆撃機『アルケオプテリクス？』、遼東半島上空で空中給油を受けた99式攻撃機『九尾』のどちらもが自らの巨大な機体の内部に仕込んだ、燃料気化爆弾や10t爆弾の投下を今か今かと待ちわびていた。その数凡そ30機。

大空の弾薬庫と揶揄される99式攻撃機と始祖鳥の異名を持つ『アルケオプテリオス』の後継機『アルケオプテリオス？』の混合部隊を右手に見ながら東に進む第一師団師団長の鴨野誠はその姿に頼もしさを感じながら、心の中で恐怖していた。

そんな中、自らの乗る47式指揮車両の無線機が突然音声通信を傍受した。それはこの地から遙か東、日本海から上陸した第六北方方面軍からであった。

『こちら、第六軍第五戦車師団、作戦開始位置に到達』

『こちら第六第三自走砲師団、他師団との合流に成功、これより砲撃準備を開始する。なお、1800より試射、三掃射後より効力射に入る、注意されたし』

『こちら空中管制、各部隊の現在位置を確認。各自ビーコンのスイッチを入れる』

「こちら第一第一司令、各自の位置確認を完了。総員時計合わせ、現在時刻1725、26で合わせる。5…4…3…2…今！各隊自走砲隊の試射まで無線封鎖」

>i25904—2495<

丸..自走砲

四角..戦車・装甲車

菱形..ヘリ

17時55分

17時59分55秒

56秒

57秒

58秒

59秒

状況開始
18時00分

時刻は18時の5秒前

第六北方方面軍、自走砲連合部隊が陣取るこの地から狙う事が出来るのは、真北と西北西の二カ所。距離は余りなく攻撃に失敗した場合もれなく反撃が来ることは自明であった。

ゆえにこの連合部隊の隊長に任命された第六北方方面軍、第二師団師団長は事前に綿密な情報収集を行っていた。まず陸軍の砲撃部隊が作戦戦略上その性能を十二分に発揮するには何処に陣を張るか、どの弾種を・どの位・どれだけ・どういった風に相手に打ち込むか。また何処からなら部隊を危険に晒させずに砲撃が完遂できるか。その研究による布陣が自走砲を山の中腹に置き、上空に弾着観測の偵察ヘリ、山の陰に戦車、装甲車部隊を置く布陣であった。

また、第一方面軍の自走砲隊と連携し同時に砲撃を開始する事によって、北・南東・南西の三方向から包囲、殲滅を行える様になる。

また同時に今回の攻撃の主犯と思われる、武装集団のリーダーの確保も可能となる。

隊長

「各砲一掃射用意！ 五秒前…四…三…二…状況開始！ うて！」

ドドドバンン

隊長

「第二射装填開始、対地ミサイル発射！」

パシユウウン

パシユウウン

パシユウウン

パシユウウン

通信士

「偵察ヘリより入電、自走砲の第一射有効射なり。以上です」

隊長

「うむ、各砲砲撃座標取得！」

砲手A

「目標座標取得、目標座標確認、確認よろし」

砲手B

「装填完了！ 仰角好し、包围好し。砲撃準備好し」

隊長

「第二掃射、てえ！続いて第三射用意！」

通信士

「ヘリより通報、効力射を確認」

隊長

「全部隊に通達、これより効力射を開始する」

通信士

「了解！」

隊長

「対地ミサイル発射用意、自走砲と同時着弾でやれ」

兵士

「了解！」

砲手

「自走砲装填完了！」

隊長

「各砲各自効力射開始！各砲50発撃ち終わると同時にこの場から撤退する！」

第六方面軍特別師団

18時ちょうど

師団長

「始まったな、計画では試射含めて53発か・・・」

下士官

「53発ですと、撃ち終るまでに凡そ1時間と言ったところでしよう」

師団長

「うむ・・・速まるかもしれん。各車火入え、戦闘用意！」

第八部 国民党軍殲滅戦（後書き）

画像の加工が大変過ぎる・・・

第九部 企み (2011, 9, 24, 11..15改訂)

第六北方方面軍特別師団

18時45分

師団長

「砲撃開始から早45分・・・統制射撃ではないから射数が解らんな」

下士官

「自走砲隊から入電です。カクホウ、シャスウ50ハツニテ、ホウゲキヲチュウダンス、キタイハ、コウゲキジュンビニハイレ。コウゲキカイシハ、ショウメイダンイテ、ツウタツス。以上です」

師団長

「50発か・・・敵部隊の現在位置は？」

下士官

「前方の2部隊は東に向かっていているようです、移動方法が徒歩の上、士気が非常に低いのであまり進んではないようです」

師団長

「そうか・・・総員乗車！戦闘用！意！へりもエンジンを掛けろ」

士官

「総員乗車！ 戦闘用意！ 歩兵は完全武装で装甲車に！ 戦車兵は乗車後、搭載弾薬量の報告を怠るな！」

19時00分

師団長

「7時か・・・そろそろ砲撃が止むと思うが」

『こちらNINJYA、こちらNINJYA。自走砲隊からの合図と思われる星弾を確認』

師団長

「やっと来たか・・・総員戦闘開始！ 戦術など要らん、蹂躪しろ！」

『『『了解！』』』』

第一方面軍第一師団

『自走砲隊からと思わしき星弾を確認！』

師団長

「その星弾は多分、北の第六の奴らに向けた信号だろう。となると、此処にいる敵の部隊が邪魔になるな・・・うちも動くか。全車に通達、これより攻撃を開始する、装甲車部隊は搭載歩兵の数を半数に減らせ、ぐずぐずしていると敵の奇襲を味方が受けるぞ！」

「南の部隊も動かせ、敵を完全に包囲するんだ！」

第六北方方面軍第五師団

下士官

「自走砲部隊からの星弾を確認」

師団長

「よし、全車事前のミーティング道理にやれよ。総員戦闘開始！」

1937年 8月 26日 21時

大日本同盟 総理官邸

国防大臣

「総理、中国大陆での国民党軍との戦闘は順調に進んでいます。わが方の被害も全て想定の範囲内です」

総理

「そうか・・・今回の一件、野党は何と言っているんだ？」

官房長官

「始まりが始まりでしたから・・・今は即時殲滅せよ、としか言っ

「いませんね」

総理

「都合のいい奴らだな、全く」

財務大臣

「まったくその通りですな」

外務大臣

「しかし、こっちは大変ですよ、大陸に利権を持っていた国に対し、侵略では無く武装組織の殲滅だと説明するのは非常に骨が折れたんですから」

総理

「ああ、よくやってくれた。さて国民党軍の殲滅はそろそろ終わる、後は共産党軍だが……」

国防大臣

「その件ですが、国内には一応今回の一件は演習で通そうと思えます。しかしそろそろ、演習でなく共産党軍との戦闘だと露見しそうですね。ですので今回の一件、早急に収束させるためにIRBMの発射許可をいただきたいのです」

総理

「弾頭は？」

国防大臣

「通常弾頭型MIRV搭載IRBMを10発」

総理

「その後の戦略は？」

国防大臣

「今、中国大陆には5カ所の空軍基地が建設中です、その内実用に耐えうる滑走路の整備が完了しているのが3カ所、空中給油を行えば極東ロシアからも空軍による攻撃が可能です。なので今後は空軍主体で進めて行こうかと思っております」

総理

「迎撃の可能性は？」

国防大臣

「戦爆攻の三機種を絡めて飛ばします。使用弾薬は六七式誘導多弾頭爆弾とナパーム、サーモバックを使用します」

総理

「ふむ、何機出す気だ？」

国防大臣

「戦闘機45、爆撃機90、攻撃機55の合計190機です。使用弾薬量は空軍基地の弾薬庫を一つ丸々空に出来る量です」

総理

「空軍からは何か言ってきたか？」

国防大臣

「いえ、逆に喜ばれました。最近は仕事が楽になったようで、いい加減大きな戦いがしたいそうです。後、新人に経験を積ませたいと言う思いもあるようです」

総理

「管理局への嫌がらせがそんなにいやだったのか？ まあいい、許可しようIRBMの方もだ、しかしIRBMは一度に10発すべて打ち2度目は無い、空軍による爆撃も5回までだ」

国防大臣

「了解しました」

第九部 企み (2011, 9, 24, 11..15改訂) (後書き)

間に合った？

第十部 演習 (2011, 9, 24, 11..16改訂) (前書き)

祝連載一周年

第十部 演習 (2011, 9, 24, 11..16改訂)

1937年 8月 27日

八洲州 入間空軍基地 基地司令室

コンコン

「誰だ？」

基地司令執務室とネームプレートが張られた部屋のドアを（襟の襟章から少佐と判定できる）男がノックする。

「神田です」

「お来たか、待っていたぞ。入ってくれ」

神田

「失礼します」

「それでは、そろそろ説明してもらいましょうかね、司令」

司令

「そうだな。実は昨日、日野国防大臣から前々から打診していた中国大陸への出撃が許可された」

「「「おお!」」」

「本当ですか?!」

司令

「こんな嘘をつく必要が何処にあるんだ? 久保少佐」

久保

「ようやく叶った、中国攻勢ですよ!」

神田

「それで、どの隊が出るんですか司令」

司令

「うむ、全員だ」

全員

「「「……」」」

司令

「そこで、指揮系統について再構成しておこうと思ってな。皆に集まってもらったのだ。今のところ総隊長は柴田中佐か南方中佐にしようと思っているのだが・・・反対意見は有るか?」

全員

「「「……」」」

司令

「そうか、無いか。なら次は各小隊の小隊長だ、今の所は久保・神

田に爆撃機隊、篠原に攻撃機隊、猪俣に護衛を頼もうと思う。柴田と南方は自由に動いてもらって構わん。反対意見は？」

全員

「「「……」」」

司令

「此れについても無いのか、なら安心だな。作戦決行は3日後から5日間、参加する味方航空隊は我が入間航空隊と春日、三沢、佐渡、那覇の全部隊だ。その間の警戒任務は空自が請け負う事に成っているから安心しろ。ここまでで何か質問はあるか？」

神田

「…はっ、司令正気ですか?!」

久保

「そうです、幾らなんでも全員って。基地の整備能力が持ちませんよ!」

猪俣

「今からでも遅くは有りません、この話はもう一度検討し直した方が……」

篠原

「そうです、いくらなんでもこの作戦は無茶すぎます」

司令

「おお、言い忘れていた。今回の作戦には極東ロシアの空軍部隊や中国に派遣している空軍部隊や特務空軍も動く、他の隊といざこざを起こすなよ? さてこれで作戦のあらすじについては終了だ、特

に質問が無い限り次に行くぞ？」

久保

「し、質問って・・・有り過ぎます！」

神田

「そうですよ、全員出撃ってこの基地だけでも何人居ると思ってるんですか?!」

司令

「全員合わせて1098名、うち操縦者が戦闘機隊4個100名、支援戦闘機隊8個200名、爆撃機隊4個100名だろ？　ちなみに整備士は800名だ」

柴田

「なんでその数を把握しながらこんな作戦に賛成したんですか?!」

司令

「問題なかりうに・・・来年は第2045次防衛大綱に沿って新型機が納品される。今、使い潰した所で何の問題もない」

久保

「整備士が過労死しますよ!!　それに燃料弾薬も如何するんですか!!」

司令

「何のために空中給油機を大型化したと思っているんだ、それに給油機の給油用燃料タンクはエンジンと直接繋がってはいない、あれが使える。それに弾薬は他の空軍基地から融通してもらえる事に成っている」

南方

「もしかして、現地まで飛びっ放しですか？」

司令

「おまえは何の為に機体に戦闘用自己進化型AIを積んでいると思っ
っているんだ？」

篠原

「弾薬は何を使うんです？」

司令

「六七式誘導多弾頭爆弾とナパーム、サーモバックを使う予定だそ
うだ」

神田

「それにしても奇妙ですね」

篠原

「なんでだ？」

神田

「なぜって唯の支援爆撃なら総出撃機1000越えなんて考えられ
ませんからね」

猪俣

「そうだな、冷静に考えてみればそうだな」

司令

「実はな、最初の計画では参加機は200機程だったそうだ」

柴田

「それが何でこんなにも膨れ上がったんですか？」

司令

「さあな、各国に対するけん制か内部からの反発か……」

久保

「内部から？」

司令

「おう、最初の計画だと参加機は200程度、この八洲州だけでも空軍パイロットは6000……最近の出撃は管理局に対する嫌がらせ、しかも何時自分の番が来るも解らない、となると鬱憤がたまるのは必然。だから、来年には新型機が配備され、使い潰しが効き、弾薬庫の掃除も出来、災害で落ちこんでいる国内の生産も軍需で潤おす事が出来るっていう魂胆だろう」

猪俣

「戦争経済、ですか……」

司令

「まあ、手っ取り早く国内生産を復活させるにはいい鴨だよ、今回の演習は」

柴田

「え、演習ですか」

司令

「あれ？ 知らなかったのか？ 今回の事、国民党軍との戦闘は対

テロ戦闘。共産党軍との戦闘は世間的には“一応”演習だ。陸軍は揚陸作戦、海軍は海上封鎖、空軍は対地戦闘。陸自は敵地での救助及び基地の設営、海自は陸軍上陸部隊の護衛、空自は空軍の代わりに防空任務だ」

神田

「なんとまあ」

久保

「良くもここまで」

篠原

「口が回る」

司令

「あ、あとIRBMの発射実験もあるそうだ。名目は管理局の攻撃に対する報復だ。今回の演習は全て記録映像としてミッドチルダ全域で放送するそうだ」

第十一部 進軍 (2011, 9, 24, 11:17改訂) (前書き)

来週は期末考査のため、更新が出来なくなります。ご了承ください。

なお、本日更新日だとすっかり忘れており、急ごしらえのため非常に短く成っております。こちらも合わせてご理解ください。

第十一部 進軍 (2011, 9, 24, 11:17改訂)

1937年 8月 27日

中国大陆のハルピンから東へ行った某所に国民党軍が野営用の陣（と言っても非常に質素な物）が引かれていた。

この地を支配する彼らは今までにないほどの恐怖を抱えていた。

山が咆哮すれば、金切り声を上げながら降り注ぐ巨弾の嵐。

轟音と共に来るのは白い飛行体。

西安から命からがら逃げて来た、彼らからすれば到底受け入れる事が出来ない事であったろう、しかしこれは現実で有り自らの目の前で繰り広げられている事であった。

「痛い、イタイイタイー」

「お、俺の足がー」

「ぐあああ！」

その様はまさに地獄絵図であった。

あるものは自らの無くなった足を探し、あるものは体中で感じる痛み
に咆哮していた。

一体何時間経ったのであろうか、いやまた数分か、其れとも数十分
か。

それすらも判らなくなってしまう程、彼らは強烈な砲撃が加えられ
ていた。しかしあくまでこの時代からした強烈な砲撃であり、この
時代の砲撃と違う事は相手が見えないという事だけであった。

辺りがすっかり暗くなり、闇が支配を完了した頃。突如、空に太陽
が復活した、否。それは砲撃部隊による砲撃完遂と機甲部隊の攻勢
開始の合図であった。

ハルピンより北、旧ロシア帝国国境

この地にも少なからず自走砲隊の砲撃による音が聞こえていた。

しかしそれはあくまでも微かに響いて来ているだけであり、この事
に気付いている者は誰一人としていなかった。

そんなある時ふと後ろを降り返った兵士がやけに明るい星を見つけ
た。

其れは攻撃開始の合図であつたのだが、彼がこの事を知る機会はどう二度と来ない。

第六北方方面特別師団

『やっと来たか・・・総員戦闘開始！戦術など要らん、蹂躪しろ！』

無線機の方こうから聞こえる師団長の声

「了解！」

『『了解！』』』

自らの声にかぶるように聞こえる仲間の声。

自然と口の中の唾を飲み込んでしまった。

周りを見渡すと其処には厳しい訓練を共に乗り越えてきた仲間の顔が有った。

何故かそれを確認する事で、何時の間にか高まっていた心臓の鼓動が落ち付いてくる。

もう何年も握っている、愛銃とも呼べる十八式自動小銃のグリップをもう一度、確りと握り直す。

『装甲車随伴兵は初弾装填、携帯火器のセーフティーを確認。』

カチ

カツ、シャン

カチ

手に持つ小銃に初弾を装填し、セーフティーが掛かっていることを確認し、肩に掛けわきにあるホルスターから自動拳銃を取りだす。今回は不正規戦の為、普段は持ってこない小型火器の方も確認を済ませる。その間に戦車や砲を備えた装甲車は試射を行い、不具合の確認をしていたようだ。遠くの方から聞き覚えのある砲撃音がした。

第六北方方面特別師団

遠くから戦車の砲撃音が響いてくる、戦闘はもう始まっているのだろう。

『全歩兵降車！ 敵部隊の制圧に向かえ』

待ちに待った出番の様だ。

15分後、そこには生きたモノは誰一人として存在しなかった。

第一方面軍第一師団

自走砲隊による砲撃開始から6時間後。第一師団には各師団から作戦完了の通信が入っていた。

「第六北方特別師団から入電、『ワレ、テキブタイヲセンメツセリ。ワガホウノヒガイケイビナレドモ、シキノテイカニヨリ、コンゴノサクセンゾツコウニシショウアリ、トミテタイキヤクス』以上です」

参謀

「師団長、どうします？この地に逃げて来た国民党軍は殲滅しましたし、国民党首脳陣も全員確保しました。西に逃げた共産党軍は空軍が大規模な攻勢に出るとの情報があります、このままこの地に留まっても良いのでは？」

師団長

「そうだな、司令本部に問い合わせてみなければわかんが……とにかく今日はもう遅い、今日は此処でいったん野営にしよう、各師団にも連絡を。炊事班に食事の用意をさせろ」

8月30日

国民党軍殲滅完了より3日後

八洲州 大島より南に50 km 海中

超ド級潜水艦『ドレッドノート?』

「艦長、ポイントXに到着しました」

艦長

「スクリュー停止、深度攻撃可能最高深度まで浮上、ゆっくりだ」

「了解、スクリュー停止」

「スクリュー停止確認」

「艦停止確認、浮上」

「メインタンク排水」

「艦浮上……浮上完了まで10……7……5……2……0。目標深度到達」

「作戦開始時間まで、後1時間」

「ダウントリム5」

「ダウントリム5、了解」

「炉心温度安定」

「冷却設備、異常なし」

「ソナー感なし」

「対空レーダー、水上レーダー感なし」

艦長

「作戦開始30分前よりミサイル発射管ハッチ解放」

艦長

「現在位置確認」

「現在位置確認、トー3号衛星に接続。パスワード5ケタ……10
ケタ……全セキュリティクリア、現在位置確認完了まで15……
10……5……確認完了」

艦長

「回線切断、——S L I R B M《潜水艦発射型中距離用
弾道弾》1から3番までアクセス、弾道計算開始」

「衛星との回線切断に成功」

「S L I R B Mアクセス確認、オールグリーン」

「弾道計算開始、結果出力まで15分」

八洲州 硫黄島

「弾道再計算開始」

「誘導装置確認……異常なし」

「推進剤充填確認」

第十二部 たった一発の誤射

(2011, 9, 24, 11:19 改訂)

(前書

私生活忙しすぎる

第十二部 たった一発の誤射 (2011, 9, 24, 11:19改訂)

1937年 8月 31日

八洲州 硫黄島

特務陸軍硫黄島基地は対外的には硫黄島周辺の制空権及び制海権の確保、軍官民間問わずの航空機または艦艇の緊急避難地として広大な滑走路、湾港、索敵用のレーザ施設と通信施設が設置されている。また、硫黄の産出地としても重要な位置にある。しかし、これは対外的に公表されている情報の一部である。

この島の本来の役目は中、長距離弾道ミサイルの発射及び誘導、保管である。

498

オペレーターA

「弾道再計算終了」

B

「発射まで後60秒」

C

「隔壁の閉鎖確認」

司令

「発射装置のキーを」

D

「は！」

職員が別室に保管されている発射キーを取りに走る

A

「弾道入力完了」

B

「発射まで30秒」

C

「航行装置チェック完了、異常なし。全チェック項目クリア、発射準備完了」

B

「発射15秒前」

D

「司令、発射キーです」

基地司令

「うむ、警報を鳴らせ！」

オペレーターに渡されたキーを目の前のコンソールに差し込んだ

A

「警報鳴ります」

壁に埋め込まれた警報とネームプレートに書かれた押しボタンを押す、すると人が一人もない殺風景な島に甲高いサイレンの音が響き渡り、広大な空と海に吸い込まれていった

B

「発射まで10秒」

基地司令

「警告、発射装置ロック解除」

A

「警告了解」

B

「発射装置のロック解除を確認」

先程押した押しボタンの隣、警告と書かれたネームプレートの上にある、普段からプラスチック製のカバーが掛かり、容易に押せない様な構造の押しボタンを押す

基地司令

「カウント始め！」

A

「発射5秒前4、3、2、1、発射！」

B

「1号サイロからの発射を確認」

C

「続いて2号サイロの発射シークエンスを開始」

海中

通信士

「硫黄島からの発射を確認」

艦長

「よし、1番発射」

「1番発射」

艦長

「続いて2番発射用意」

「水上で爆音を確認」

艦長

「次弾発射まで60秒、弾道の再計算を開始。後2発だ、総員気を抜くな」

八洲州 四国沖

特設イージス艦隊旗艦 イージス艦 大淀 CIC

「ミサイルの発射を確認」

副長

「弾道は」

「適正です、途中墜落の心配は無さそうです」

「衛星軌道への到達を確認、落下物は無事海上に着水したようです」

艦長

「どうやら我々の出番は無さそうだな、警戒は怠るなよ」

「了解です！」

副長

「暇、ですな」

艦長

「ああ・・・まったくだ」

しかし、そんな空気も一瞬で吹き飛ぶ

「大変です！！ 第18対空レーダーより11発目のミサイルを確認、と報告が」

艦長

「副長、我が艦は弾道弾迎撃時には情報収集担当だったな」

副長

「ええ、そうです」

「司令部より特務作戦を受電。11発目の弾道弾を迎撃せよ、以上」

艦長

「第一種特別警戒態勢！」

副長

「予定道理『霧島』『高千穂』『比叡』を迎撃部隊に指定、全艦に
通達！」

通信士

「こちら『大淀』、これより『霧島』『高千穂』『比叡』を迎撃担
当艦に指定」

艦長

「僚艦に打電！ データリンクの開始、全電力をレーダーと誘導装
置に使用、11発目のミサイルの捕捉を最優先にしろ」

『了解！』

「『金剛』より入電、我ミサイルの捕捉に成功『長良』『長門』『
長濃』より同様の通報有り」

「データリンク完了『霧島』よりミサイル発射、続いて『高千穂』

『比叡』からの発射を確認」

「日本海のイージス戦艦『持国天』より入電。我、これよりレーリングンによる迎撃態勢に入る、情報の提供を求む」

副長

「『持国天』に弾道情報と発射情報を送信。今後は自動送信」

「了解！」

艦長

「まさか自国のミサイルの迎撃が初のミサイル防衛に成るとは……」

副長

「ええ、もう打ってしまったものは、どうしようもありません。何とかして撃ち落とすだけです」

「大変です艦長！！ 11発目のミサイルの弾頭は……」

大日本同盟 統合参謀本部

参謀長

「何！ 弾頭が核！！ 艦長は何をやっていた」

「どうやらロケットブースターの点火を確認できなかった為、発射許可を出したと思われます、その時に通常弾頭でないミサイルを指定してしまったんでしょう……」

参謀長

「くっ……四国沖のイージス艦隊は？」

「現在『霧島』『高千穂』『比叡』の3艦を迎撃部隊に指定し、他の艦で弾道計算や迎撃ミサイルの誘導を行っているようです。後、日本海のイージス戦艦『持国天』がレールガンの発射態勢を整えているとの報告も来ています、もしもの場合はレールガンによる迎撃を行う予定です」

参謀長

「ミサイルでの迎撃の確率は、何%だ」

「80%です、旧日本国の技術を発展させています、しかしそれに伴って弾道弾の性能も上がっていますから」

参謀長

「8割……レールガン単独では？」

「……正直、未知数です。いくらマッハで射出と言っても、大気圏ギリギリからの落下物には難しいでしょう。それに今回はMIRV（多弾頭型）いくらなんでもきついです」

参謀長

「総理は何と？」

「各員の奮闘を祈る、としか言うてはおりません」

参謀長

「そうか……他のミサイルは どうなんだ」

「1発目が無事に予定高度まで到達、後15秒で弾頭の切り離しを

開始します」

参謀長

「迎撃が出来なければ……手遅れか、弾頭が核でなければ!」

「迎撃ミサイルの弾頭が迎撃目標の針路上に到達、衝突まで60秒・
・」

四国沖

イージス艦『霧島』CIC

11発目の弾道弾が放たれたすぐその後

「目標情報入りました。6式MIRV弾頭ミサイル1発の発射を第18対空レーダーが確認、以後ターゲットをαと呼称」

砲雷長

「ふう、絶対に外すなよ。武器管制システムをBMDモードに切り替え。CIC指示の目標、うちい方始め」

「Recommend fireてえ」

「『大淀』から弾道情報入電、誘導システムにインプット」

「インターセプトまで300」

「『高千穂』『比叡』がミサイルを発射」

「艦長、発射されたミサイルの弾頭は通常弾頭でなく、核です!!」

艦長

「なに!! 高千穂と比叡に打電、ミサイルのコントロール譲渡を求めろ」

「了解、イージス艦霧島より高千穂、比叡へ。貴艦発射ミサイルのコントロール譲渡を求む」

『こちら比叡、要請を受諾。You have control外すんじゃないぞ!』

『高千穂だ、こちらも譲渡する。You have control
O! 確実に当てろよ!』

「了解。I have control」

砲雷長

「これより迎撃ミサイル3発をそれぞれα、β、γと呼称」

「αミサイル予想弾道軌道への到達を確認」

「βミサイルの到達を確認」

「γミサイル到達まで5秒」

「第一インターセプトまで10、9、8、7、6、5、4、スタンバイ……敵ミサイル迎撃弾を回避」

砲雷長

「αミサイルは10秒後に自爆、βミサイルの軌道を変更」

「変更完了、第二インターセプトまで8、7、6、5、4、スタンバイ……敵ミサイル再度回避。αミサイルの自爆を確認、敵ミサイルそのまま突っ込んできます」

艦長

「さて、こいつはもう避けられんぞ……」

「弾頭拡散まで10秒です」

「γミサイル起動変更完了、ロケットブースター点火！第三インターセプトまで6、5、4、スタンバイ……」

「レーダーに反応なし！撃破、確認！やりました！」

「「「「『『よっしやああ』『』『』『』」」」」

艦長

「ふう、2回しか回避が出来ないと知っていても……心臓に悪い」

第十二部 たった一発の誤射

(2011, 9, 24, 11:19 改訂)

(後書

MIRV弾頭

弾頭内部に一発ではなく複数発の弾頭を仕込み、それぞれ別々の目標に攻撃を可能にした弾頭、弾頭が分裂後は目標が小さくなる為に迎撃が困難になる。通常は核弾頭が搭載される。

BMDモード

Ballistic 弾道

Missile ミサイル

Defense 防衛

Recommend fire

recommendは忠告
fireは炎

炎について忠告する(多分)

夏休みスペシャルと言う名の時間稼ぎ その1 (前書き)

大日本同盟 \ I S \

夏休みスペシャルと言う名の時間稼ぎ その1

日本 IS学園 1年1組

では入学後初めての授業が行われていた。

真耶

「織斑君、織斑一夏君！」

一夏

「あ、はい」

真耶

「あ、あのー大声出してごめんなさいでも『あ』から始まって今『お』なんだよね自己紹介してくれるかな？ ダメかな？」

一夏

「いや、あの。その、そんなに謝らなくても・・・えーえっと」

そう言って一夏は立ち上がる

一夏

「織斑一夏です、よろしくお願いします・・・」

クラスメイトの女子から（と言っても女子しかいないのだが）からの視線が背中に突き刺さる。

一夏

（いかんここで黙ったら暗い奴のレッテルを張られる！）

そして深呼吸をして最後の一言を言った

一夏

「以上です！」

「」「ああらー」「」

自分以外の全員が机に頭をぶついたり椅子から落ちかけたりする。

一夏

「あれ、ダメでした!？」

かつかつ

ごっん!!

一夏

「いっつゝげ、千冬姉え?!」

二回目のごっん

千冬

「学校では織斑先生だ」

真耶

「先生、もう会議終わられたんですか？」

千冬

「ああ、山田君クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

そう言って黒いスーツを着た千冬が真耶の隣りに移動する

千冬

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物にするのが仕事だ」

彼女が言い終わるや否やクラスの大半から黄色い悲鳴が響く

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「私お姉様に憧れてこの学園に来たんです、北九州から」

千冬

「はあ、毎年よくも此れだけの馬鹿者が集まる物だ。私のクラスにだけ集中させてるのか？」

彼女は本心からそう言い頭を抱える。しかしそれをかき消すかの如く女子生徒からの黄色い悲鳴が教室中にいやその階層に響き渡る。

一夏

「千冬姉が俺の担任・・・？」

千冬

「で？ 挨拶も満足に出来んのか、お前は？」

一夏

「い、いやぁ千冬姉俺は・・・どん！」

そこまで言いかけて机に頭を押し付けられる

千冬

「織斑先生と呼べ」

一夏

「はい・・・織斑先生・・・」

机に頭を押し付けられたまま答える

「織斑君て、あの千冬様の弟？」

「じゃあ世界で唯一ISを使えるのそれが関係しているのかな？」

千冬の些か怒りを含んだ声が教室に響く

千冬

「静かに！ 諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で体に染み込ませろ。今世界情勢は非常に緊迫している、太平洋上に突如出現した国家のおかげでな。もしかしたらアラスカ条約が破棄もしくは全文改訂されるかもしれない。最悪は軍に編入される可能性まであるその覚悟を持っている、いいな！」

真耶

「先生！ それはまだ確定事項と言う訳でも無くて・・・あの、その・・・」

「え・・・軍事転用って」

「どういう事？　今は禁止されているはずよ」

千冬

「今後そうなる可能性があるという事だ」

休み時間

「あの子よ！　世界で唯一ISを使える男性って」

「入試の時にISを動かしたやつだったんだってね」

「世界的な大ニュースだったわよね、やっぱり入って来たんだ」

「あなた話しかけなさいよ」

「あたしいっちゃおうかしら？」

一夏

（誰かこの状態を助けてくれ・・・）

コツコツ

「ちょっといいか？」

屋上

一夏

「何の用だよ」

「うん」

一夏

「六年ぶりに会ったんだなんか話があるんだろ」

「うん・・・」

彼女にしては歯切れが悪い

一夏

「そういえば・・・」

「なんだ？」

一夏

「去年、剣道の全国大会優勝したってな」

「なんでそんなこと知ってるんだ?!」

一夏

「何でって、新聞で見たし・・・」

「なんで新聞何か見てるんだ」

一夏

「ああ、あと久しぶり六年ぶりだけど箒ってすぐに解ったぞ」

箒

「へえ？」

一夏

「ほら髪形一緒だし」

箒

「良くも覚えている物だな・・・」

彼女は心なしかうれしそうだ

一夏

「いや、忘れないだら幼馴染の事くらい」

彼女の表情が少しだけ、面白くなさそうな表情に変わった。

キコンカーンコーン

一夏

「俺達も戻ろうぜ」

箒

「ああ、解っている」

屋上に残された彼女の表情には六年ぶりに再会した幼馴染との再会を喜ぶような表情ではなかった。

大日本同盟 陸上自衛隊 技術開発部

「田所、ちょっといいか？」

田所

「はい、なんでしょう？」

「お前、前々からワードスーツ系の研究をしていたな？」

田所

「はい！ 勿論、私が技術者に成ったのもその開発をする為です」

「そうか、なら丁度良い」

男は手に持っていた封筒から一枚の紙を田所に渡した

田所

「出向・・・陸軍装備開発局」

「そうだISの事はもう知っているだろう？ それに対抗するために戦車や重装歩兵に代わる新たな装備が必要になった。やってくれるか？」

田所

「勿論です」

「そうか、ならこの資料を良く読んでおけ今週はもう此処に来なくて良いぞ。来週から陸軍の研究所に感ず目になるらしいからな。頑張ってきて来いよ」

田所

「はい！」

フランス代表

「さて、今回の議題は皆の知っての通り、太平洋上に出現した国家をどうするのかだ」

アメリカ代表

「偵察衛星からの情報では戦車、装甲車、自走砲、戦闘機、爆撃機、艦載機、大型正規空母、揚陸艦、イージス艦、戦艦、潜水艦その他各種補助装備」

イギリス代表

「ミサイルの発射台は？確認できたのか？」

アメリカ代表

「いや未だ確認作業中だ」

中国代表

「如何するのだ？ この場の全ての国家の軍を投入すれば容易く片が付くぞ？」

日本代表

「倒すよりも味方に引き込んだ方が良いのでは？」

イギリス代表

「向うが承諾しなかったら？ その時は武力しかあるまいに」

フランス代表

「それに戦艦が確認されたのはホントか？」

アメリカ代表

「ああ、かつてのヤマトクラスを遥かに凌ぐ大きさだったよ。推定

全長は400m」

中国代表

「400！ ならば動力はやはり・・・」

フランス代表

「核、だろうな」

アメリカ代表

「他のフネが小舟に見えたよ、あと空母も同程度の大きさの物が確認された」

「「「・・・」」」

アメリカ代表

「トマホーク？を何発食らわせれば沈むかな？」

フランス代表

「考えたくもないな・・・」

中国代表

「となると・・・」

イギリス代表

「IS・・・」

日本代表

「アラスカ条約を破棄すると！？」」

イギリス代表

「その汎用性は計り知れないものがある、それを使わない手はあるまいに」

アメリカ代表

「最悪の場合だ、必ずしもそうなるという訳では無い」

フランス代表

「そうだ何時いかなる時も最悪の状態を想定していなければなら無い」

日本代表

「・・・」

ガチャ！

顔色を悪くした男が会議室に入ってくる

アメリカ代表

「なんだまだ会議中だぞ！」

男はアメリカ代表の耳元に何かを囁きそのまま会議室を出た

イギリス代表

「何事だ？」

アメリカ代表

「太平洋艦隊から通報だ、奴らの艦隊が動いた」

日本代表

「なに！」

フランス代表

「規模は？」

アメリカ代表

「詳しくは分らんが大型艦3隻と護衛艦クラス17に潜水艦が複数、潜水艦からの通報の為詳しい艦種は不明だそうだ。今衛星からの写真待ちだ」

イギリス代表

「このタイミングでか・・・」

フランス代表

「いや、これは威嚇だろうな。洋上での訓練で終わると思うが・・・」

イギリス代表

「あまり刺激しない方が良いな」

アメリカ代表

「ああ、太平洋艦隊で演習をされては堪ったもんじゃない」

太平洋 大日本同盟 海上自衛隊 第四艦隊

旗艦 最上級戦艦 和泉 CIC

艦長

「時間だな、全艦に通達これより対空防衛および対潜戦闘訓練を開始する。使用弾薬はすべて模擬弾を使用、付近の海域にアメリカ太平洋艦隊が潜んでいる間違って攻撃しないよう注意しろ。各艦の艦長は事前に渡されたタイムスケジュールに従い行動を開始せよ、全艦状況開始!」

副長

「艦長、タイムスケジュールです」

艦長

「うむ、諸君良く聞け本艦は自由戦闘だ。しかし味方艦は無い、良いな。全員戦闘配置、主砲装填。C I W Sレーダーと連動」

「ソナーに感、魚雷接近四方から5ずつ」

「ミサイル飛来。数3」

砲雷長

「デコイ発射、チャフ放出。対潜特殊弾頭魚雷、目標周辺潜水艦」

艦長

「機関出力最大、取舵20」

操舵手

「機関最大、とーりかーじ」

「敵機飛来、数20。敵ミサイル発射!」

砲雷長

「チャフ展開、対空ミサイル発射」

「敵魚雷デコイへ、ミサイルもチャフに向かいました」

「敵機ミサイル回避」

「海龍型潜水艦2隻より我が艦は貴艦発射魚雷命中判定により撃沈判定」

艦長

「目標数再確認、脅威度の更新を行え。各種レーダ員、警戒を怠るな」

「脅威度再確認完了、各種ミサイル再装填完了。目標自動ロック開始」

艦長

「目標ロックそのまま、第二戦速」

操舵手

「第二戦速、宜候」

砲雷長

「対艦ミサイル発射、対空警戒。潜水艦は何処だ?!」

「対艦ミサイル発射・・・戦闘機、いえミサイル接近!」

砲雷長

「CIWSで迎撃しろ!」

「敵性潜水艦、反応なし」

艦長

「対潜警戒そのまま」

「左舷40より接近する艦影、敵です」

砲雷長

「ミサイル、いや主砲発砲用意。使用弾薬模擬砲弾、照準は目視で行え！」

「了解！！ 第一、第二砲塔旋回、左舷へ！仰角45いや32、散布界調整。装填急げ」

「装填完了！」

「砲塔旋回完了」

「仰角よし」

砲雷長

「うてえ！」

艦長

「戦果確認！」

「ミサイル飛来、数3距離5100！ 本艦到達まで15」

砲雷長

「何故気付かなかった！」

「ステルスです！」

艦長

「チャフは?!」

「・・・ダメですここに真っ直ぐ飛んできます」

「更にミサイル飛来、数5距離6000」

艦長

「防御力場展開、CIWSで迎撃。各員衝撃に備えろ！」

「10秒・・・5秒、4、3・・・弾着今!!」

ズガガガン!!

「直撃です！」

艦長

「被害報告!!」

「第二派まで到達まで5、4、3・・・全ミサイル撃破確認！」

艦長

「間に合ったか、対ステルス戦闘用意！ レーダー員警戒を厳とせよ」

「対空レーダー目標ほそ、いえ回避されました」

「熱源確認！ この大きさは・・・ミサイル接近、数10距離3万」

砲雷長

「対空迎撃！」

「ミサイル撃破、残数4距離1万」

艦長

「早く敵機を発見しろ！！」

「敵ミサイル全弾迎撃確認、熱源反応なし」

「敵機によるレーダー波の照射確認されず」

艦長

「副長、どう思う？」

副長

「解りませんが、ミサイルの波状攻撃は未だ良いとしても・・・なぜここで姿を眩ますのかが、理解できません。三次元索敵レーダーの起動を具申いたします」

艦長

「対潜警戒が疎かに成るが・・・致し方あるまい。三次元索敵レーダー起動」

「て、敵機直上！」

艦長

「何機だ！？」

「一機だけです！」

砲雷長

「三次元攻撃システム起動、全火器で応戦しろ！」

「自動ロック不可能！」

艦長

「急加速！ 取舵いっぱい、スラスタも使え！何としても敵機の真下から逃げるんだ！」

「急加速！ スラスタ起動、取舵いっぱい！」

「敵機投弾！」

砲雷長

「CIWSで迎撃、対空ミサイルはイージスレーダーで手動ロック、うてえ」

「対空ミサイルてえ」

「敵機ミサイル回避」

砲雷長

「第二射てえ！」

「ミサイル命中判定」

艦長

「空母の捕捉を急げ！ 対空警戒を強化」

「ミサイル飛来！ 数20！？ 距離8万」

艦長

「空母からだな、ミサイルは何処から来ている？」

「南からとしか」

艦長

「十分だ。取舵、進路を南に。第三戦速、無駄だと思うが・・・チャフ放出、防御重力場を最大出力で展開用意」

「チャフ放出、防御重力場展開用意」

陸軍装備開発局

ISと互角以上に戦う装備を創る為、国内の軍関係者の殆どがこの場所に集められていた。

軍人

「此処でロマンの話をするんじゃない！」

高級将官だろう男がどなっている

「ロマンを語って何が悪い！」

それに反論するのは白衣を着た、絵に描いた様な研究者の風貌をした男

軍人

「ここはそういう場ではないと言っているんだ！」

研究者

「ドリルの何が悪い!!！」

軍人

「もっと実用的なモノにしろと言っているんだ、こっちは!!！」

研究者

「実用性よりもロマンだ!!！」

軍人

「それに整備性や汎用性、コストパフォーマンスすべてを満たさなければ採用などせんぞ！」

軍人B

「そうだ！ 超兵器級の艦艇や光学迷彩を装備した戦闘機・・・維持費に一体幾らかかっていると思っっているんだ。それにドリルなんぞ俺は使いたくは無い！！」

「何だと！！ ドリルの何が嫌なんだ！！ あゝあゝ！？」

「————1つ、いいかな？」

金と赤の縞模様に1つ星の階級章を付けた男が拳手をする。

途端に今迄言い争っていた白衣を着た男と軍服を着た男が口をつぐみ、何時の間にか立ち上がっていた事に気付いたのか静かに座る。

「どの様な武装を付けるかは使用者に決めさせればいい・・・其れよりも決めなければいけない事は1時間で整備が完了し、遠中近戦闘の全てをこなし陸海空を自在に駆け、操縦者の帰還率が80%以上で一機当たり一千万以下、そして一個小隊でIS一機と互角以上に戦える兵器だ」

「ロマンを語るのは結構。しかし君達の職務は軍上層部が求める最強の汎用兵器の開発だ、それを忘れないでもらいたい良いかな？」

ガチャ

「解ってますよ南条少将」

南条

「久保君・・・会議は30分前から始まっているぞ？」

久保

「いやあ、すみません。彼を探していましたねえ」

南条

「彼？ 後ろの彼かね？」

久保

「ええ、紹介しましょう。陸上自衛隊技術開発部の田所君です」

南条

「でなんで彼を此処に？」

久保

「いえね実は・・・彼が発案した月光が気に入らしてね。人事に言っってこっちに回して貰ったんですよ」

南条

「月光・・・ふむ仕様書位は有るんだろうな？ 久保君」

久保

「ええ、もちろん此処に」

久保は手に持っていた封筒から5枚ほどのホチキスで閉じられたA4紙を取り出した

南条

「ふむ・・・陽電子ライフル・・・武装ポッド、内容物は誘導ミサイルに反物質機雷・・・50mmバルカン。追加武装は？」

田所

「いえ、今のところは」

南条

「そうか・・・バッテリー式か？」

田所

「対消滅エンジンを使用しようと思っています」

南条

「-----ダメだな、もう少し煮詰めてこい。主に動力だ、武装は少し少ないようだが・・・フレームは問題ないな」

久保

「そういえば南条少将？　ついこの間、人工のリンカーコアの試作品が出来たとか」

南条

「魔導炉か・・・その線で少し練り直してみろ田所」

田所

「・・・」

久保

「田所君？」

田所

「え？　あ、はっはい！」

第十三部 統合火力演習

参謀長

「私だ、ああそうだ……なに、唯の確認だ……で、結果は？　そうか、解った……うむ、ご苦労」

さっきまで青い顔をしていた参謀長の顔色が一気に良くなり始めた。如何やら無事に迎撃に成功したようだ。こちらからもレーダーをモニターしてミサイルの観測をしていたが……

「まったく……誰があんなミサイルを開発したんでしょうか？」

緊張の糸が緩んでいた為だろう、つい本音が零れてしまう

参謀長

「知らん、この国でも核兵器に関する文章や開発計画は闇の中だからな」

「まあ、あんなに厄介なミサイルが世界に広まったら堪ったもんじやありませんがね」

参謀長

「だろう？」

中国大陆上空 早期警戒機 機内

「ミサイルシグナル、ロスト。誤射されたミサイルの迎撃を確認」

「爆撃機体の進入コースとMIRV再突入体の予想落下進路を算出」

第一爆撃機隊
「富嶽一番隊こちら百 空中管制 眼」

『こちら富嶽一番、なんだ』

「MIRV再突入体の予想進路と貴隊の進入コースがクロスしている。予想コース情報を送信する、確認後変更後の針路コースを送信する」

『了解』

第二爆撃機隊
「富嶽二番隊、速度が速すぎるぞ5番機！ 速度を落せ」

第一偵察機隊
「大鷲一番隊、9番機がコースから外れているぞ！」

第四攻撃機隊
「火龍四番隊は攻撃目標の再確認を開始せよ」

第三偵察機隊
「大鷲三番隊、高度一万五千まで上昇」

第一爆撃機隊
「富嶽一番隊、爆撃目標まで100秒だ。高度を1000mまで下げ弾薬庫を開け」

『富嶽一番了解。富嶽隊各機、俺に続け！』

『『了解!』』』

「富嶽二番隊、進路そのままで高度を1300mまで降下」

『富嶽二番了解』

「富嶽三番隊、進路そのまま現在地点より2100m地点で進路を北に変更。変更後1000秒でポイントA87―B28に移動」

『富嶽三番隊、了解』

「百眼より全大鷲部隊へ、全機高度一万九千で待機」

『大鷲一番了解』

『大鷲二番了解』

『大鷲三番了解』

ヴーヴーヴー

百眼

【再突入体第一陣の接近を確認！ 予想進路算出完了、各機に転送します】

「再突入体の弾着まで30秒……20秒……10秒……5秒前、4、3、2、弾着。今」

【続いて第二陣の接近を確認。予想突入コースを算出します】

大和州 一般家庭

【国防省、統合参謀本部より入りました情報によりますと、17日より発生していた中国大陸でのテロ組織との戦闘は10日後の27日に集結したとのことです。また、この戦闘の為に中国大陸に駐屯していた陸軍部隊は撤退戦及び八洲州北海道で上陸戦闘演習を海軍は西日本海で海上封鎖演習を行い、空軍は極東ロシア地域で爆撃及び対地攻撃演習を行います】

【陸上自衛隊は中国大陸で戦闘により負傷した味方兵の救助訓練、海上自衛隊は陸軍の上陸訓練の護衛、航空自衛隊は空軍の代わりに防空任務を行う予定です】

【また、特務軍は陸海空軍と共に演習に参加する予定です。更に中距離弾道ミサイルの発射訓練及び迎撃訓練が行われます、海上保安隊からの指示をよく聞いてください】

第十四部 懲りない奴ら

1937年 9月 1日

大日本同盟各地で避難訓練や消火訓練が行われる

同月 15日

大日本同盟軍が演習を終了させ帰還し始める。

同月 17日

汪兆銘率いる中華民国南京国民政府が中国大陆での実権を握り、南京で中華民国を建国。

1937年 10月 7日

大日本同盟 特務軍第八基地

この日、特務軍第八基地は普段とは異なり、蜂の巣を2、3個破壊した、とでも言うかの様に何時もの数倍以上騒々しかった

これは他の特務軍基地も同様だった、特務空軍は先月の大演習に参加した攻撃機部隊や戦闘機部隊はたまた爆撃機隊等、機種に関係な

く基地上空での待機が命じられ。特務海軍は母港に一隻も僚艦を残していなかった。

しかし一番騒がしかったのは次元航行艦隊が所属する基地であった。様々な世界に赴いている次元航行艦のそのほとんどを緊急帰国させ、補給が済み次第“ある世界”に送って居た。

送り先は大日本同盟特務軍呼称“第230最重要監視区域”に属し人類が支配する惑星。現地名“天の川銀河太陽系第3惑星”所謂“地球”であった。

事の発端は通称管理局、正式名次元管理局のR型次元航行艦18番艦『アースラ』の領空侵犯に端を発する対管理局戦闘、その一つである“ミッドチルダ奇襲”である。

これは大日本同盟軍の新型攻撃機による爆撃、及び管理局の対応を遅らせる為のサイバー攻撃の総称である。これにより管理局は無限書庫やミッドチルダに駐留する管理局員と管理局施設。ミッドチルダ市民からの信用や制空権を完全に喪失していた。

管理局本部への襲撃による戦力の低下が今まで支配下に置いていた自称管理世界の反乱を引き起こし、管理局自体の力をより弱体化させていた。他にも反管理局組織が何者からかの支援を受け様々な世界の管理局施設を襲撃し、次遂にその世界の自治を取り戻していた。

この動きを静観するしかなかった次元管理局の上層部は自ら、組織を警察組織から軍事組織に発展させることを決断。ミッドチルダの管理局本局これを放棄し他世界、特に大日本同盟の監視の目が届かぬ“自らの”管理外世界に拠点を求めた。

そんな動きをいち早く察知したのは北アメリカ航空宇宙防衛司令部

<North American Aerospace Defense Command>通称NORADであった。

NORADが捉えた大気圏外から接近する物体は地球の引力が働く少し手前まで来ていた。このことから接近する物体は小惑星ではなく人工物しかも何らかの推進装置が付いておりきちんとした航行能力がある事が判明。

ここに至ってNORADは己の司令官であるアメリカ北方軍司令官にこの事を通報、アメリカ北方軍司令官は副司令官とNORAD総合指揮監督である米国大統領とカナダ首相に通報し米国大統領から国連に駐在する米国大使に連絡が行き、緊急の国連安全保障理事会が開催された。

現状の説明から行われた会議はおおよそ一時間で閉会を迎え、国連加盟国全てによる国連軍の編成。各地の天文台による24時間体制での監視。NORADからの情報開示。戦闘開始に備え各国内での食糧や燃料の備蓄の強化などが決められた。

そしてNORADのレーダーが次元航行艦隊を発見してから3日、各国が連戦態勢に入ってから2日経った世界標準時間西暦2015年8月4日午後4時40分。NORADの監視レーダーに突如として2000機以上の航空機が映り、今まで静止していたアンノーンが地球に接近してきて来るのを捉えた。

太平洋

世界最強を自他共に認める米太平洋艦隊は敵からの奇襲攻撃に備え、すべての戦闘艦を第一種戦闘配置のまま待機させていた。無論、環

太平洋地域に属する全ての国家が同様の事をしていたのは言うまでもない。その中でも中露の二か国は“日本”が担っていた極東地域での制海権と制空権の獲得に躍起になっており、其れが功を奏し極東地域の防備は完璧と言えた。

米太平洋艦隊 空母『ジョージ・ワシントン』

「艦長、司令部より入電です」

艦長

「うん？ 貸してみろ・・・ん？」

司令部からの通信内容が掛かれた紙が士官から渡される

艦長

「太平洋上にアンノーンを発見？ 確認に向かえ・・・（妙だな、不明機の機数が無い・・・）」

「オルカ1発艦を許可する」

『こちらオルカ1了解した』

「ボギーの機数不明、機数の確認を最優先に」

『了解』

「健闘を祈る」

【3、2、1！ GO！】

「続いてオルカ2、発艦用意」

大日本同盟 特務海軍 空母「瑞鶴」

「進路そのまま、ゲートまで1万です」

艦長

「艦内の航空機の固定を再確認させろ、『機体同士が接触して飛べません』じゃ洒落に成らんからな」

「機関室こちらCIC、炉心の状態に注意しろ」

『了解だ、死ぬのは故郷でと決めているからな』

「いくら核融合だと言っても20年物の骨董品だからな、頼んだ」

双胴戦艦『播磨』

「1、2、3番水密扉の閉鎖を確認」

「5番、6番の閉鎖を確認」

『弾薬庫よりCIC、弾薬の固定が完了。各砲塔への弾薬補給機の停止も確認』

「こちらC I C、了解した。水密扉のロックを確認後退避せよ」

『弾薬庫了解』

『1番主砲塔よりC I C、砲身内の浸水対策が完了した』

「こちらC I C、砲塔の外部ハッチの閉鎖を確認後、艦内へ退避せよ。水密扉のロックを忘れるな」

『1番主砲塔了解、これより退避する』

艦長

「後どこが残っている？」

「2番、3番、5番主砲と後部V L Sハッチが作業中です」

「他の艦はどうだ、駆逐艦雪風、巡洋艦長柄、戦艦紀伊・敷島・富士、空母瑞鶴・翔鶴がまだ終了していません」

「航海長、ワープポイントまで後どれ位だ」

航海長

「現在の速度が15ノット……目標地点までは直線で16カイリ、本艦は19番目に転移しますから……このまま進めば、後1時間30分で転移を開始します」

艦長

「そうか……先遣隊は今頃、向うの軍と接触している頃だろうな」

砲雷長

「まあ、先遣隊は空軍の虎の子。最新鋭の戦闘AIを搭載したAA
F-787ですから、余程のことが無い限り落される事は無いでし
よう」

副長

「それにE-9が各中隊に三機付いてますしE-8Cも先遣部隊の
上空をカバーしています。索敵網に穴は有りませんよ、艦長」

艦長

「うむE-9が付いているからそこは安心しているが……（杞憂で
あれば、いいのだが）」

第十四部 懲りない奴ら（後書き）

AAF-787

The Artificial intelligence deployment

人工知能搭載

All weather type

全天候型

Fighter

戦闘機

大日本同盟空軍の次期主力戦闘機

現在稼働機数は五百機、今回派遣されたのは、この内の三百五十機

E-9

早期警戒管制機（AWACS）E-8の後継機

一機当たり五十機の戦闘機の管制を行える。

ソフトウェアの問題で管制よりも早期警戒の方が性能が良い。同型機であればコンピュータの並列思考が可能になり三機もいれば一個戦闘機大隊の管制と早期警戒が可能になる。

レーダーの探知範囲は半径50～70km。索敵範囲を最大にする
と無線への給電が不安定になる為、最大出力での使用が禁止されて
いる。

同時追尾機数は三百機。

E-8C

電子戦機

E-8を電子戦が行えるように改修したもの。

E-9の就役により早期警戒管制機として二線級となった。しかし稼働率や安定性が良くエンジンの更新が行われたばかりと言う“そのまま捨てるには惜しい機体”であったので、ECMなどの電子戦用機器を搭載させて蘇った。

機体の改修が行われていない為レーダー類はそのまま。しかし管制用機材は降ろしているので空中管制は不可能。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577m/>

大日本同盟

2011年11月16日07時17分発行